

鍊成師と支援師

月蛇神社

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

兄とは、義妹を守り抜く存在である。

ハジメハーレムに依存度フルマックスの義妹を入れたかつただけです。

あくまでも主人公はハジメです。

念のためタグにR-17・9を追加しました。

超気まぐれに投稿されます。

目 次

天使な義妹	1
異世界トータス	1
最弱のステータス	1
二人のステータス	1
支援師との訓練	1
二人の決意	1
想像力と義妹の愛情	1
ホルアドの夜	1
オルクス大迷宮	1
迷宮の罠	1
奈落へと	1
奈落の底	1
奈落のひと時	1
奈落生活	1
トラウマ	1
奈落での食事	1
変化と捕食	1
告白とこれから	1
ハンティング	1
急襲、そして決着	1
残された彼女たち	1
工房へ	1
工房へ：2	1
封印部屋	1

173 168 160 153 145 136 130 122 118 114 107 101 93 83 74 68 58 51 40 32 24 15 7 1

天使な義妹

月曜日の正午。

学生も社会人も昼休憩・昼休みに入る時間。それはこの国夢高校に通う小鳥遊風華も例に漏れず、授業終わりのチャイムが鳴ると同時に彼女は凝り固まつた身体を伸ばし、教科書を閉じる。

「お疲れ、風華」

「……ん」

風華が教材を片付け終えたときに親友の山上美穂が彼女の席までやつて来た。

美穂の手には弁当の入った小包。いつもこの時間を楽しみにしている彼女らしく、その顔はニッコニコの笑顔だ。もつとも、片側の頬が赤く染まっているのは美穂が授業中寝ていた証拠でもあるのだが。

「……また寝てたでしょ」

「うつい、いやあれは数学が悪いし」

「……」

睡眠常習犯の弁明する様子をジト目で見ながら風華は自分の弁当を鞄から取り出し席を立ちクラスを出る。

待つてよーと美穂もその背を追うように出で行つた。

小鳥遊風華は美少女である。少しの力で折れそうな小柄な身体に長い黒髪、いつも無表情だが整つた顔立ちは人の心をつかんで離さない何かがある。今年入学したての一年生であるが、入学一週間で校内二大女神と対抗するかの様に二大天使の片割れとして有名になつている程だ。もつとも、本人は迷惑がつてているのだが、ここまで評価を消し去るのはとても不可能なので渋々受け入れている。

そのとなりを歩く山上美穂もまた二大天使の片割れと言われる程に有名である。ばつさりと切られた短髪と169cmという高身長は彼女の明るさを無駄無く表現し、制服の隙間からわずかに見える身体は細身ながら健康的な肉付きをしている。

そんな彼女たちが廊下を歩くだけで人の視線をくぎ付けにしてしまうのは無理もない。故に

「小鳥遊さん、今日はお昼一緒に食べないかい？」

「山上さん、付き合ってください！」

こういった男子生徒からの告白や誘いが後を絶たない。

風華は表情のない顔からさらに表情を無くし、はあ、とため息をつく。入学当日からこういったアプローチは何度も受けており、その度に断つているのだが流石にうんざりもしてくる。

だから、今回も返事はこうだ。

「……じやま、どいて」

断るにはあまりにも辛辣な返答。周囲で見ている生徒は「ああ、またか」とわかりきった反応をし、誘つた側の生徒は笑顔が固まる。

美穂の方も「ごめんね！」と一蹴し二人は先へ進もうとする。

「待つてくれ！せめて約束だけでも」

しかし、通りすぎたところで風華の肩を生徒は掴んで引き留めようとする。

だが、その手は空を切り、逆に美穂に掴まれていた。

「!？」

「ごめんね～風華のじやまを排除するのがあたしの役目だからさ」

そういって彼女は掴む手に力を籠める。そして、痛みに顔をしかめる様子を見た直後にパッと手を離し「じゃあね～」とさつきのやりとりを無視して進む風華のあとを追いかける。

「もーおいてかないでよ風華あ」

「……ん」

「にしても今日は諦めが悪かったねえ。転校生だつたのかな？」

「……知らない」

「ま、だよね」

そう言いつつ彼女たちは階段で二年生のフロアへと足を進めていた。

その際、風華の表情が少し緩んでいることに美穂以外に気づく者はいなかつた。

同時刻。

クラスが騒がしくなると共に南雲ハジメは目を覚ました。周囲を見渡すと愛ちゃん先生こと畠山愛子先生が教室に残つて生徒と談笑しているほか、席を移動して弁当を広げている様子が見える。

もうお昼か。そう判断したハジメは鞄からゼリー飲料を取り出し、それを胃に流し込む。食事と言つていいのかわからないそれをしながら今朝の様子を思い出す。

少女漫画家である母の作業を可能な範囲で手伝つていたら徹夜してしまい、眠い身体を引きずるように、というか半ば引きずられて登校。日課のように絡んでくる檜山大介たち四人からの言葉を流し、二大女神の片割れで有名な学校一の美少女、白崎香織から女神（であり悪魔）の微笑みで周囲から殺氣を受け、天之河光輝という勘違い強めの超人の言葉にさらに気分を落とす。

この二人のコントロール役である八重樫零からの謝罪に、彼女の疲労具合が見て取れたことには心の中で彼は泣いた。
そして現在。

「南雲くん。よかつたらお昼一緒にどうかな？」

香織からお昼ご飯のお誘いを受けていた。

「あ～誘つてくれてありがとう、白崎さん。でも、もう食べ終わつたら天之河君たちと食べてきたら？」

「ダメー！ちゃんと食べないとあの子に怒られるよ？」

何度も交わされてきたやりとり。去年までは昼休みの始まりのチャイムと同時にそそくさとクラスから出ていたハジメだが、今年からはそもそもいかなくなつていた。

香織という人気者のお誘い。誘われるだけでも羨ましいのにそれを断るという、暴挙に（主に男子の）クラスメイトからの殺氣をビシ

バシと感じながらのハジメの抵抗。無意味だとわかつていてもやつてしまふのは去年の名残か。

そして、彼女の口から出た「あの子」という単語に彼は今日が何曜日かを思い出す。

「香織。こつちで一緒に……」

「……にい。来た」

「零先輩。こんなちは〜！」

スタスターと速足に歩く小柄な影が、香織を誘いに来た光輝を押しのけ、いつもの気障つたらしいセリフを遮る。

ハジメの机の前には、いつの間にか用意されたこちらを向いた椅子。その椅子に少女は躊躇なく座り、ハジメの机に手に持った弁当を置く。

「……お昼、食べよ？」

彼女の名は小鳥遊風華。

クラスに天使が降臨した。

南雲ハジメと小鳥遊風華の関係は、幼馴染だ。元々、母親同士の仲が親友とも呼べる間柄であり、それはお互いが結婚して子供が生まれても変わることはなかつた。ハジメの両親は仕事の都合上、ハジメを一人にしなければならないときがあり、ハジメが小さい頃は、忙しい時には小鳥遊家に預けられていたことがよくあつた。

歳が一つ上のハジメは、年下の風華の兄としての意識から、風華の面倒を見ることが多く、また、風華も昔は引っ越し気味だったでの交流がある同年代はハジメくらいであり、そんなハジメを兄と見ていた。そのため、二人の間には自然と兄妹のような関係が出来上がつていた。

「風華ちゃん！ 南雲くんつたらまたゼリーだけでお昼すませようとし

てたんだよ！」

「…………ほら、にい。口開けて」

「いやだから僕は大丈夫だから風華がもぐあ!?」

「ちょ、風華!?無理やりはダメだつていつも言つてるでしょ！香織先輩も落ち着いてえ！」

「…………にい？たーんとお食べ。ふふつ」

……もつとも、妹の方は兄への距離間をバグらせているのだが。

ちなみに、この時間は唯一といつていいほどに貴重な、風華の笑顔が見れる時間である。そのため、風華の笑みを知る生徒は一年生より二年生のほうが多いという珍事になっている。

さらに言えば、クールビューティで通っているが意外と可愛いもの好きである零が胃痛を回復させる光景でもある。今風華が使つている椅子も彼女が用意したものだ。

流石に下級生に醜い嫉妬というものを見せられないのか、クラスメイトもこのときだけは表立つた殺氣を隠している。内面では香織に気に入られ、さらには風華と幼馴染という境遇のハジメへの恨みつらみでいっぱいなのだが。

そして、渦中にいるハジメはとすると、香織の密告によりキレた風華によつて口の中に卵焼きを突つ込まれ、さらにはミートボール（どちらもニンジン入り）で追い打ちされるという状態でいた。

ちなみに、光輝は香織をまだ誘おうとしていたが、全くもつて相手にされていなかつた。

そんな平和な光景は突如として終わりを告げる。

「な、なんだ!?」

クラスの誰かが声を驚いた声を上げる。その理由はようやく口の中を空にして水を飲もうとしていたハジメにもすぐにわかった。教室の床が純白に光っている。それは、幾何学模様を形成し光輝の足元を中心としていた。

自分たちへ迫る未知の減少。愛子先生が「皆！ 教室から出て！」と叫ぶと同時に光は視界を塗りつぶす。

やがて、光が収まる。

そこには、食べかけの弁当、机に置かれたスマートフォン、机のわきに置かれた鞄といった、それまで誰かがいたという形跡しかない。人間だけがその場から全員消失していた。

異世界トータス

反射的に閉じていた瞼を叩く光が弱くなってきたことをハジメは感じる。

やがて、周囲が騒がしくなる。それと同時に伝わる身体への軽い衝撃。

その衝撃に手をどかしたハジメの視界に入ったのは、自分に抱き着く風華の頭だった。

「風華……？」どうし

「にい……怖い……」

「ツ!!」

身体に回された腕の力は強く、風華の身体が震えていることが全身に伝わる。一先ず、妹を落ち着かせるために頭を撫でながらハジメは周囲を見渡す。

視界に入る景色は、見慣れた教室ではなく、ゲームに出てくるような大聖堂のような大広間。そこには、ハジメと同じように周囲を見渡す者や座り込んで放心状態でいる者たちの姿。あの光の魔法陣が現れた時に教室にいた全ての人間がこの場にいた。

そして、最後に正面を向いたハジメはそこにあるものを見て硬直する。

それは一つの壁画だった。

長い金髪を靡かせうつすらと微笑む中性的な人が、草原や湖といった背景を包み込むように両手を広げている絵。

誰が見ても美しいと答えるであろう素晴らしい壁画だ。しかし、ハジメが硬直したのはそれが理由ではない。
恐怖だ。

何故だかは自分でもわからない。しかし、ハジメは心の内から湧き出る恐怖から、この壁画から目を逸らせないでいた。

だが一つわかったことがある。風華が震えているのはあの壁画が

原因だ。恐らく風華は、この場に来て最初にあの壁画を見たのだろう。

「大丈夫、大丈夫だから」

「……ん」

妹を落ち着かせるために、兄は恐怖を押し殺して小さな身体を抱きしめる。

その行為の効果は大きく、ハジメは、自分の身体を伝わる振動が弱くなつていくことを感じた。

(これつてまさか、アニメとかで言う異世界転移ってやつか……？いや確かに白崎さんとか天之河くんとか天之河くんとか異世界行つて世界救つてそうだなどか考えたことはあるけど本当に起ころのかこれ)

ハジメは、これが創作物でよくある異世界転移であると認識せざるを得なかつた。本当は夢であつてほしいというのが本音中の本音だが、五感を通して与える情報が、彼にこれが夢ではないと残酷に告げる。

「ようこそ、トータスへ」

自分たちの知らない、老人の声が聞こえてきたのはそんなときだつた。

聖教教会教皇、イシュタル・ランゴバルドと名乗る老人が言うには、自分たちは光輝を勇者とし、その同胞たちとして召喚されたらしい。イシュタルとあの場にいた信者であろう人たちに案内され、ハジメたちは最初にいた大広間から長テーブルがいくつも並ぶ別の大広間へと通される。上座に近い席へ愛子先生や光輝たちが座り、ほかの皆さん次々と座る。その中で、ハジメや美穂は最後方の席へと座ることにした。

「おい風華……」

「……離したら、ころす」

「あはは……風華、南雲先輩が困っちゃつてるよ？」

ただ一人、風華だけはハジメの手を力強く握り、彼から離れようとした。

風華がまだ不安がつてているのはハジメでなくとも一目瞭然だ。しかし、何もわかつていらない状態で下手に動くことも危険だろうとハジメは考えていた。

「……フウ」

「……！」

少しかがんと妹と目線を合わせ、昔呼んでいた名前で呼ぶ。

「お前の気持ちはよくわかる。でも今は、今だけはがまんしてくれ。兄ちゃんは離れないから」

「……んう」

「よし、いい子。それに、山上さんも近くにいる。彼女が強いのは知ってるだろ？」

「そうよ。風華の敵は、あたしが全部殴り飛ばす！」

山上美穂の実家である山上家は、自分たちの街の大きな拳法道場を営んでいる。そこの一人娘である彼女は、女性という体格的なハンデがありながら道場一の実力者だ。スポーツなど何もやつていないうハジメが相対しても十秒以内に負ける自信がある。

ハジメたちの説得により、風華はようやく手を離した。それを確認した彼らも席に着く。

ハジメ、風華、美穂の順に座る。風華は、ハジメが座るとすぐさま隣に座り、最大限椅子をハジメに近づけて手を握っていた。

全員が席に着くと絶妙なタイミングでメイドさんたちがカートを押しながら入つて来る。

これがベターなところか、とハジメは飲み物を給仕しているメイドさんを眺めながらそう思った。

ちなみに、今のやりとりはクラスメイトどころかこの場にいるほとんどの人を見ており、男子の嫉妬全開の視線でハジメの胃がキリキリしていることに、彼は必要な犠牲だつたと考えることにして胃痛を受

け入れていた。

そして、それ以上に強い、先ほどの壁画とは別ベクトルの視線によつて、ハジメの口からはハハハと乾いた笑いがこぼれていた。何故か妹はその視線を受けてふんすつと静かに勝ち誇っていた。何故だ。

時は進み、夜。

ハジメたちは王宮で開かれた晩餐会に参加していた。

地球の洋食と然程変わらない料理を食べつつ、トータスの人々と親睦を深めるクラスメイトたちをハジメは集団から離れた壁際で眺めていた。

金髪美少年であるランデル王子がしきりに香織に話しかけているところを見ながらハジメはここまでに起きたことをぼんやりと思い出していた。

あのあと、イシュタルは自分たちを呼んだ経緯を説明した。

長つたらしかつたし転移物にありがちなテンプレだつたのでざつくり言うと、このトータスという世界は人間族と魔人族の戦争が百年単位で続いており、今までに戦力が拮抗していたが、魔人族側が魔物を使役しだして負けそだから、神エヒトの呼んだ自分たちに人間族を救つてくれというものだ。

つまりは戦争をしろと言つてゐるのだ。当然、こちら側の唯一の人である愛子先生は反対した。

ここからが問題だつた。

「お気持ちをお察しします。しかし……あなたの方の帰還は現状では不

可能ですか

イシュタルはそう言つた。その言葉に生徒全員が凍り付いた。

イシュタルが言うにはこうだ。

僕らを召喚したのは人間ではなくエヒト。自分たちが呼んだわけではない、人間族に異世界に干渉する魔法は使えないという。

ようは帰れないし帰せない。その事実に愛子先生は脱力し、生徒たちもパニックになりだした。

ハジメはこういった展開の創作物をよく知っていたので多少は落ち着いていた。

しかし、隣に座る後輩組はそうもいかなかつた。いくら強い美穂でも実際に殺し合えと言われて出来るほどの覚悟は無いのか強張った表情をしており、風華はまた震えが強くなりとうとうハジメの膝の上に移動して兄へ安心を求めていた。

そこで、生徒たちに希望が降りた。

天之河光輝だ。クラスどころか校内一のカリスマと言つてもいい彼のリーダーシップは、おびえて收拾のつかなかつたクラスメイトたちを瞬く間にまとめ、冷静さを取り戻させた。

ただし、戦争に参加するという形で。

「へつ、お前ならそう言うと思つたぜ。お前一人じや心配だからな。
……俺もやるぜ？」

「龍太郎……」

「私は戦争なんて反対よ……」

「雲……」

「それでもあんたを放つてはおけない……私もやるわ」

「雲！」

「え、えっと、雲ちゃんがやるなら私も頑張るよ！けど……」

いつものメンバーが光輝に賛同するが、香織は不安げに自分から一番離れた席を見やる。視線の先には未だ震える風華の姿だ。

香織からすれば、風華は同じ異性を取り合うライバルだ。だからといつて風華を邪険にしているわけではないし、むしろ仲良くなりたい存在だ。

もつとも、風華からすれば、兄に近づく女として敵視しているが。でも兄の昼事情を密告してくれることは正直助かつてる。

「香織……大丈夫だ、彼女たちもみんなも俺が守り抜く。俺は世界を救つてみせる！」

「はい！ ありがとうございます！ ……やつすい言葉」

「……」

美穂からは返答があつたが、風華はガン無視を決める。それを照れ隠しと受け取つたのか、光輝は気にせずクラスメイトたちを鼓舞し再び希望を与える。

自分たちを殺し合いへ誘う希望。しかし、絶望の中の一つの光に生徒たちは疑うこともせず、その光に縋つた。

あとはもう止まらない。愛子先生は最後まで止めようとしていたが結局押し切られてしまつた。

そこからはトントンと話は進んだ。ハイリヒ王国の王宮へと移動し、国王に謁見し、自己紹介を受けたのちに晩餐会が開かれている。

そこまで思い出して、ハジメは深いため息をついた。

「絶対に何も気づいてないでしょ天之河くん」

少なくともハジメは気づいていた。

イシュタルが事情を説明するとき、光輝を観察し、どう言えば光輝が賛同し、かつ、自分たち全員が戦争に参加することを促すように話していたことに。

そして、彼の通りに事は進んだ。駆け引きも何も無く進んで、拍子抜けだったのではないだろうか。

創作だろうが現実だろうが、ああいつた立場の老人はあなどれないということか。トップにいるということは、自分たちにはない長年の経験と観察眼という武器がある。それは、時として武力以上にやつかいなものだ。

「……にい」

「つ！風華……」

風華の声で、ハジメは現実へと意識を戻した。

気が付けばいつのまにか妹が目の前にいた。少し離れたところにはこちらに手を振る美穂の姿もある。

自分を見上げる風華を見て、申し訳なさで心がいっぱいになる。自分は風華を守らなくてはならないのに、戦争に参加させてしまった。

守れるだろうか？肉も、力も口クにないようなこの腕で？

呼吸が荒くなる。

小さな赤い紅い華を幻視する。してしまった。

脚に力が入らない。膝が崩れ落ちる。

今になつて、ハジメが心の底で蓋をしていた死という恐怖が溢れてきた。あるいは、今まで目をそらしていた現実に目を向けたということだろうか。

「ごめん……」

目頭が熱くなるのを感じる。口からはひたすらに謝る言葉しか出てこない。

何故あそこで反論しなかつたのか、それは自分に力が無かつたからだ。自分があの場を治めてみろと言われても無理だという自信しかない。

「ごめん……!!兄ちゃん、が、こんな……」

「……大丈夫、フウはここにいる」

静かに泣き崩れる兄の頭を妹は撫でる。

「……にいがいるならフウがいる。にいならフウを絶対守ってくれる」

「……ああ、やつてやるさ」

確証も何もない言葉がハジメの心にのしかかる。それをハジメは受け入れた。

誰も気づかない壁際でのやりとり。

それを不安げにずっと香織は見ていた。

最弱のステータス

「……知らない天井だ」

ハジメたちが異世界トータスに来て初めての朝が来た。

晩餐会が終了した後に案内された部屋は「豪奢」の一言に尽きた。部屋の内装はファンタジー物あるあるな感じだろうと思つていたハジメの予想は豪快に、というか豪華に外れた。

誰が天蓋付きベッドがあるなんて想像するだろうか。勇者である光輝がこの待遇ならまだわかるが、所詮おまけで召喚されたハジメの部屋にこれがあるなら全員の部屋にもあるだろう。

予想外すぎる情報に愕然として、案内してくれたメイドさんの言葉を生返事で返しつつ、フラフラと吸い込まれるようにベッドに倒れ込んで「あ、フツカフカ」という感想が出たところでハジメの記憶は途切れていた。

異世界に召喚されたり、妹の前で泣いたりと人生史上最大に色々とあって疲労が尋常じやないほどだったのだろう。

身体を伸ばしながらベッドから身を起こす。いくら寝心地がかつたとはいえ、慣れないところで寝たせいか身体が硬く、頭も痛い。いや、頭痛は昨日泣いたせいだろうか。

一先ず、備え付けの洗面所で顔を洗つて目を覚ます。さっぱりとしたところでどうしたものかと思い、何となく部屋を出る。

外で待機していたメイドさんにぎよつとしつつ、次の予定までの時間を見ね、今がまだ早朝だとということを知る。なんせ、自分のスマートフォンは教室の机の上に置いてきて手元に無いし、一日が24時間という保証もないから時計を信用することも難しい。一応、腕時計の短針は7と8の間を指しているが早朝ということは現在時刻と時計が合つてない証拠だろう。

その後、ちょっと庭園まで、と言かける。そのことにメイドさんはただ一言「かしこまりました」と頭を下げた。

「綺麗だな……」

庭園の様子は、これまたファンタジーにありがちなものだった。大きな噴水にベンチ、地面は芝生で覆われており、自分が見たことの無い花が咲き誇っている。

まさに自分が画面越しに見ていたヴァーチャルのような光景。しかし、身を屈めれば芝生に触れることが可能であり、身体を優しくなでる風は花の香りをハジメに届ける。

つまり、これは現実に起こっていることであり、昨日のこともまた現実なのだ。

戦争。自分の世代は教科書でしか知ることのなかつたこと。それ自分たちが、それも異世界ですることになるなんて思つてもいかつた。

改めて、自分が戦わなければいけないことにハジメの心は不安がのしかかる。

殺しなんてしたくないし、死にたくない。ゲームでは何度もしていしたことだが、いざ現実にやるとなると、怖気づいてしまう。

だが、ハジメが恐れているのは風華がいなくなることだ。彼女を無事に地球に帰すことがハジメの目標だ。

それでも最悪の状況をどうしても幻視してしまう。当の本人から昨日励まされたばかりだが、彼はまだ紅いイメージを払拭できないでいた。

「クソッ止まれ、止まれよ……！」

ハジメの腕が一人でに震えだす。それを抑えようと必死に力を籠めるが震えが止まることはない。

「あら？ 貴方は……」

「ツ！」

突然後ろから話しかけられ、振り向く。

そこには金髪碧眼の、ハジメより少し年下であろう少女。

ハイリヒ王国第一王女リリアーナ・S・B・ハイリヒの姿があつた。

「あの、お気分がすぐれないのですか？ 酷い顔色です。」

「い、いえっ！ 大丈夫です！ それでは自分はここで！」

リリアーナ心配する言葉をやや食い気味に否定し、ハジメは逃げる
ように立ち去つた。

「あっ……」

庭園にはやり場のない手を伸ばすリリアーナだけが残つた。

朝食は、特に何が起こることもなく、ただただ時間が流れていった。

あのあと、部屋に戻つたハジメを待つっていたのはいつも通りの無表情で椅子に座つていた風華だつた。

何をしていたのか聞かれたので散策と答えると彼女は「……ふーん」と答え、「……明日から一緒に連れてく」と言われた。

これにより、ハジメの思わずところで朝の散歩が日課に加わつてしまつたが、まあ健康に良いからいいか、と彼はそう思うことにした。
そして、朝食が終わつて少しした今、光輝を始めとした勇者一行に訓練と座学が始まろうとしていた。

「よし、全員に配り終わつたな？ このプレートは、ステータスプレートと呼ばれている。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書もある。これがあれば迷子になつても平氣だからな、失くすなよ？」

非常に気楽な話し方をするこの男性は、ハイリヒ騎士団長、メルド・ロギンスという。この彼が率いるハイリヒ騎士団が生徒たちに訓練をつけるらしい。

集まつた生徒たちに団員たちが銀色の小さなプレートと針を配つ

て行く。

「プレートに刻まれた魔法陣があるだろ？一緒に渡した針で傷を作つて、そこに血を垂らしてくれ。一滴でいいぞ？それで所有者が登録されるから、あとはステータスオーブンと言えば自分のステータスが表示されるはずだ」

メルドの言葉に従い、生徒たちは魔法陣に血を垂らす。すると、プレートが一瞬淡く輝き、文字が表示された。恐らくこれがステータスなのだろう

各々が自分の表示されたステータスを確認する。ハジメも自分のステータスを確認した。

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：1

天職：鍊成師

筋力：10

体力：10

耐性：10

敏捷：10

魔力：10

魔耐：10

技能：鍊成・守護・言語理解

自分の名前とステータスが表示される。思わずハジメの口からおお、と声がもれる。

「うわっすつごーーい！これどうなつてるんですか？」

ハジメの横で、興奮したのであろう美穂がメルドに勢いよく質問する。メルドからの答えは簡潔に一言だった。

「ああ、全くわからん！」

「ずこーー！」

自分はわからないと堂々と言ひ放つメルド。彼は一人虚空でズツコケた美穂を見やりながら言葉を続ける。

「なんせ、そのステータスプレートは神代に作られたアーティファクトの類だな。ああ、アーティファクトってのは現代じゃ再現出来ない強力な魔法道具だ。なんでも、神々が地上にいた時代に創られたとか言われている」

「なるほど、これはそういうもののなのかな……」

光輝たちが一先ず納得したところで、今度はステータスについて説明される。

「じゃあ、説明だ。まず最初にレベルがあるだろう？それは各ステータスの上昇と共に上がる。その数値がその人間の限界、つまりは到達できる領域の現在値を示していると思ってくれ。今のところ確認されている最大レベルは100で、どいつも人間として極限の能力値を発揮している」

「レベルが上がるからステータスが上がるってわけじゃないんだな」「そういうことだ。ステータスは日々の鍛錬で上昇するし、魔法や魔法道具とかで上げることも出来る。それと、詳しいことはまだわかつてないが、魔力の高い者はステータスが高くなりやすい。魔力が身体を無意識に補助しているってのが有力な説だ」

そこまで言つて、一呼吸おき、メルドは説明を続ける。

「次に、天職つてのがあるだろ？それは言うなれば才能だ。末尾にある技能と連動していく、その天職の領分においては無類の才能を発揮する。だが、転職持ちは人数が少ない。主に生産職が持つ非戦闘系なら百人に一人、ものによつちやあ十人に一人は持つてるものもあるんだが、戦闘系は本当に少ない。千人に一人、中には万人に一人つてのが普通だ」

そこで、ハジメは己の転職を見る。鍊成師、という単語から某鍊金術師の漫画を想像し、何となくだがどうやつて戦うかのイメージが脳裏に浮かびあがっていた。

しかし、ハジメのイメージはメルドの次の言葉で瞬時に固まつた。

「あとはステータスだが……まあこれは見たまんまだな。大体レベル1の平均は100くらいだな。でもまあ、お前たちならその数倍から數十倍は高いだろう！あ、それとステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練内容の参考にしなければならん」

「ん？間違いかな？」と一瞬耳を疑う。

ステータスプレートをにらみつける。しかし、数値は何も変化することではなく、ただひたすらに平均的なステータスを表示している。

じやあ他の人はどうなんだと周りを見渡したところで、光輝がステータスを報告する。メルドから驚きの声が上がった。数値の詳細は不明だが数値が三桁のステータスがあるらしい。おまけに、技能も普通は二つ三つしか表れないらしく、彼がそう言うということはかなりの数の技能があることがうかがえる。

そうして次々と報告していく生徒たち。

光輝が特別なんだろ、いや、そうであつてくれ。

そう思つていたハジメの願いとは裏腹に、光輝ほどのステータスではないが明らかに平均な者はいないとわかるメルドの反応。表れた天職の説明をするときの内容も戦闘系ばかりだ。

報告を聞くたび、ハジメの顔が絶望に染まる。視界がぼやけ、呼吸が乱れる。

兄の異常な様子に、妹はそれが何かを察した。無言で握られる手の感触でなんとか正気を取り戻す。

やがて、残るはハジメと風華と美穂だけとなつた。

ハジメはメルドへステータスプレートを渡す。そのときの彼の心境を例えるならば、断頭台へ登る無実の死刑囚といったところだろう。

メルドも、ハジメの様子を訝しげに見ながら、ステータスプレートを受け取つた。

彼はハジメのプレートを何度も、何度も何度も見返し、ハジメへプレートを返した。

「まあ、そのだな。鍊成師ってのは、要は鍛冶職のことだ。その名のとおり、鍛冶をするときに使われる技能だな」

歯切れ悪く説明するメルド。その様子にハジメを目の敵にしている檜山たちが食いつかないわけがない。

「おいおい南雲よお。お前のそれって非戦闘系か？鍛冶職そんなんのでどうやつて戦うわけ？メルドさん、その鍊成師ってのは珍しいんすか？」

「……いや、鍛冶職人の十人に一人は持っている。國お抱えの職人は全員持つていてるぞ」

「うわっ完全に裏方じやねーか！お前ここでもつかえねーやつじやん」

「……やつてみるさ。何にでも使い方はあるだろ」

ハジメは、檜山の絡んできた手をぶつきらぼうに払いのける。その反応にイラつとしたのか、檜山はハジメからステータスプレートをひつたくつた。

「そこまで言うならいいステータスを！し・て・ん？だ……ろう……なあ？」

突然言葉に詰まる檜山。取り巻きたちはその様子にどうしたのかと訝しむ。

次の瞬間、爆笑し出した檜山は取り巻きたちの方へプレートを笑いながら放り投げる。

「だつはははは!! 見ろよ、こいつ全部10だぜ!!
「え、まじ!?……ほんとだ！なんだよ！完全に一般人じやねえかこれ！」

「無理だな！防御系スキルあつても肉壁にも使えねーよこいつ！」

その言葉に次々と笑いだす生徒が増えしていく。当のボロクソ言われているハジメは、その様子をどこか諦めたような目で見ていた。

メルドたちの苦々しい顔にも気づかず笑い続ける小悪党組。リーダー格の檜山は、ここで香織に惚れているというのだ。しかし、彼の行動はほとんど彼女の好感度を下げるものであり、それは今も尚マイ

ナス記録を更新している。

香織の心はもう我慢の限界だ。笑う生徒を止めようと動きだそうとしたところで、風華が動きだす。

彼女はまだ笑い続ける檜山に近づき、

「あ？ なんだてめえ、んがどああ！」

彼の股間目がけて全力で足を振り上げた。

風華の行動に場は鎮まる。男性陣は、檜山の暴れ具合から被弾箇所のダメージを想像し顔を青ざめ、女性陣も思わず（うわあ……）と今回だけは同情する。美穂を中心とする、風華がハジメへ抱く気持ちを知っている者はよくやつたと頷いていた。

「風華ちゃん……」

ハジメをかばうように立つ風華。彼女の目は潤んでおり、その小さな身体は悲しみと怒りに震えていた。

されば、誰だつて良い氣はしないだろう。

「お？ 風華に手え出すつてんなら、あたしが相手になりましょか？ て
言つても風華がやらなきやあたしがやつてたけど」

なんか立上がつた檜山へ、美穂の拳が顔面に寸止めの形で繰り出される。それにびびつた彼は情けない声と共に尻餅をついた。

小悪党組4人分の殺氣が美穂一人へ襲い掛かる。当の本人はそれを何でもないかのように平然と受け止めて睨みかえしていた。

「そ、」までだ

それまで傍観に徹していたメルドが口を挟む。

彼もハジメと檜山たちのやりとりを不快に感じていた。しかし、それと同時にハジメがこの集団でどういった立ち位置にいるのかを知る機会だとも考え、彼は観察することを選んだ。

そして、場を鎮めるならここだろうと彼はこのタイミングで介入する。

「それ以上やりあうなら、俺もこいつを抜かなきゃならん」

そう言つてメルドは腰から下げる剣を鞘ごと抜き、地面へ突き立てる。突き立てた音はけつして大きくないが、檜山たちにプレッシャーを与えるにはそれだけで十分だった。

メルドはハジメへと向き直る。

「確かに、鍊成師は鍛冶師が持つ天職だし、とても戦闘系とは言い難いし、ステータスが低い者がほとんどだ。だがな、今俺が持つてる剣も、鎧も、そんな鍊成師たちが作り上げ、整備してくれているものだ。そして、これらが無きや俺たちは満足に戦うことも出来ない。ある意味、戦闘系の天職以上に大切なものだ」

メルドは、ハジメの肩に手を置き、励ますように話す。

「非戦闘系の天職はそれぞれの仕事場が戦場だ。なにも前線に立つて戦うことだけが戦いじゃない。お前さんの言うとおり、何にだつて使いい道はあるし、それは何一つ欠けちゃいけねえ」

それに、これは誰かを護る力もある。その言葉は、風華を護り切れないと絶望していたハジメの心に深く響いた。

「護る力、か……」

「……にい以外に護られる気はない。あとついでに美穂も」
ハジメの小さな呟きは風華だけが聞き取れた。

二人のステータス

「さて、そんじゃあ最後に一人のステータスを見させてくれ」
ハジメのステータスについてのあれこれがひと段落つき、メルドは風華と美穂にステータスの提示を求める。

「はいはーい。んじゃあたしからで」

美穂はそう言うと、メルドにステータスプレートを渡す。
美穂のステータスはこうだ。

山上美穂 16歳 女 レベル1

天職：拳士

筋力：80

体力：60

耐性：40

敏捷：80

魔力：5

魔耐：1

技能：格闘術・腕力強化・脚力強化・聴力強化・縮地・見切り・消音・言語理解

天職は龍太郎と同じ拳士だ。しかし、彼と違い魔法に関するステータスはハジメ未満の低さだった。

「何と言うか……清々しいほどに近接特化だな」

「えつへへ～やることがわかりやすくていいでしょー」

「ああ、確かにわかりやすい。わかりやすいんだが……」

「ま、みなまで言いなさんな。魔法なんて覚えるの面倒だしインファイトに邪魔だし、なんかされる前に殴り飛ばせばいいっしょ」

(うんうん)

美穂のその言葉に、メルドだけでなく聞いていたほとんどの人が

ええ……と引く中で零だけは密かに共感していた。

彼女も、美穂と同じことを考えていた。切断に必要なのは、得物の切れ味と剣士の技量だと彼女は考えている。説明を受けたときに、武器の切断力を上昇させる魔法に適正があるとも教えられたが、そんなものを使わなければ斬れない剣など、零は求めていない。

まあ、必要とされれば、使えるものは使うが。

胴を斬れば生物は死ぬ。極論、首を刎ねればそれでいいのだ。

「そ、そうか……戦闘経験がありそうだが一応、訓練には参加してもらうからそのつもりでな」

（果たして意味があるかどうかだがな……）

はーい、と元気よく返事をする美穂。そんな彼女の様子は一見、格闘技能を持つているだけの女子高生といったところだ。

しかし、メルドと一部の騎士団員は戦場で実際に殺し合った経験と勘から彼女の実態を完全ではないが見抜いていた。

この少女はヤバい。

ステータスの差から、今すぐ模擬戦をやつても負けることはないだろう。しかし、ステータスの値が同じだつたらどうだ？ 齢を重ね、完成された肉体と技量を持てばどうだ？

そして、それが模擬戦ではなく実際の戦場で相対したとき、自分は生きているか？

勝てるか、ではなく生きているかと思つてしまつたことに、メルドは心の内で戦慄する。

これは零にも感じたことだ。零の方は美穂よりも上手く隠していきたが、美穂に至つてはそれ以前に隠す気がないようにも思える。

（この子たちがいたチキユウという世界はこんな子供が多くいるのか……？）

メルドは一瞬、そこまで考えてからいや、それはないか、と頭を振つた。こんな子供がゴロゴロいるならここにいる者の半数以上が零や美穂のような気を出しているはずだ。光輝たちからはそれを感じられない、彼女らが特殊なんだと彼は思うことにした。

余談だが、ハジメは美穂の「魔法なぞ當たらければどうということ

はない」発言に、

(いやそれ広範囲攻撃されたときどうするんだよ……)

と、思っていた。

「では、最後は君だ」

「……はい、どうぞ」

最後に風華が自分のステータスプレートを渡した。

小鳥遊風華 16歳 女 レベル1

天職：支援師 ≈ ≈

筋力：5

体力：10

耐性：5

敏捷：10

魔力：120

魔耐：80

技能：支援 ≈ ≈・支援補助・魔法耐性・言語理解

肉体面に難があるが、魔力関連は優秀なステータスだろう。実際のところ、風華は運動があまり得意ではない。

しかし、メルドは天職を確認した瞬間、ステータスには目もくれず、技能欄を確認し出した。

「支援師……だと……!?」

思わず口からこぼした言葉に待機していた騎士たち、特にベテランの者に動搖が走る。生徒たちや、ついでに訓練する予定でここにいた新人騎士たちは、その明らかな動搖に疑問を感じた。

「あの……支援師？ つてそんなにすごいものなんですか？」

代表として、光輝がメルドに質問をする。

「あ、ああ……支援師は、その名のとおり支援、つまり強化魔法を使える天職だが、この天職が扱う魔法は、天職や技能が強化される。例え

ば、お前さんの天職である勇者が対象の場合、お前さんが持つ技能のうち、勇者に関する技能が強化される」

「あれ？ それって私の付与術師はどう違うんですか？」

別の質問を投げたのは、天職が付与術師であつた吉野真央だ。

「そうだな、ちょっとややこしくなるがいいか？ まず、付与術師たちが使う支援魔法は対象者のステータスを強化するものだ。それに対して、支援師は、ステータス面ではなく技能面、つまりは技を強化するものだ」

訓練用の的を頼む。メルドが指示を出すと、程なくして、藁と棒で作られた案山子が五体、縦一列に等間隔で配置された。

「彼の者まで刃を届かせよ……飛刃」

案山子から離れた位置で、メルドは訓練用の木剣を構え、詠唱と共に案山子へ向けて剣を振るう。

それを受けた案山子は、先頭の一体だけがぐらぐらと揺れ、そして倒れた。

「今見せたものは、勇者や剣士といった、剣を扱う天職が持つ剣術技能の魔法だ。今撃つたものは先頭の案山子にだけ当たり、倒れるようにななり威力を低めに調整した。これに付与術師の支援が入ると、同じ魔力消費での案山子が碎ける。なんなら、余波で後ろの2、3体に影響も出るだろう」

「では、今の支援師が強化したら？」

光輝の質問に、メルドは「恐らくだが」と前置きし、答えを出した。
「恐らくだが……あの案山子が全て碎け散る。さつきのと同じ魔力消費で、だ」

「……は？」

「もちろん、これは推測でしかない。支援師という天職は数が少なく、それも歴史上に片手で数えられるくらいだ」

「歴史上！ 現在ではなくですか！」

「ああ。そして、その誰もが数々の偉業を支え、名を残している」

その言葉に生徒たちは絶句し、次々と風華の方を見る。

今の言葉が本当なら、風華を使えば誰もが天之河光輝のように、い

やそれ以上の力を持つ勇者になることが可能だろう。

今の風華は、誰もが欲しがる黄金の果実だ。

「つ……！」

彼女の置かれた立場を理解してしまい、その身を案じる眼。自分が絶対的強者になろうというギラついた欲望の眼。自分よりも優秀な能力に対する嫉妬の眼。

この場にいる全員の、さまざまな思惑を孕んだ視線を風華は受け、身を震わせる。

気持ち悪い、気持ち悪い、気持ちワルイ、キモチワルイ!!

生理的に受け付けられない、欲の数々。その目線に、表情に出さぬよう努めているが、彼女が怯えているのは一目瞭然だ。

しかし、その目線はすぐに遮られた。

「やめろ。風華が嫌がる」

ハジメが、先ほどとは逆に、風華を護るように立ち、正面からの視線を受け止める。

風華が視界から外れたことによつて、一部の生徒は正気に戻つた。
「南雲お、そこどけや」

しかし、檜山たちといった、まだ諦める気のない者もいる。

「そのステータスで俺らに勝てるつてのか？無理に決まつてんだろうが！」

「だろうな。でも、僕もただで負けてやるつもりはない……もう一度だけ言うぞ」

「やめろ」

その瞬間、檜山たち、いや、クラスでのハジメを知る者全員に寒気が走る。

何故だかはわからない。しかし、彼らは一瞬、ここにいる者全員が赤い海に沈んでいる姿をイメージしてしまった。

もし、今風華に危害を加えれば、ハジメは躊躇無く殺すだろう。そう断言できるだけの威圧感を彼は放っている。

「落ち着け！ 支援師についてまだ重要なことがある！」

メルドの静止の言葉に、ハジメは先ほどまでの敵意はどこに行つたのか、普段と同じような様子へと戻つた。緊張が緩み、一部の生徒は安堵のため息をついた。

風華は目の前の兄にとっさに抱き着く。

「はあ……なんで、こうもキレやすいんだお前たちは……」

これが最近の若者つてやつか……？ と心の中で呟き、遠い目をするメルド。ちなみに、彼も騎士団長という立場ながら、若者の括りに入るような年齢である。

「支援師について一番重要なこと。それは、支援する対象が一つしか選択できないこと。そして、一度決めたら変更できないことだ」「一つだけなんですか……!?」

「ああ、そうだ。過去の文献にもそう記録されている」

その言葉に、光輝たちは思わず再び風華の方を向きかけるが、全力で自制心をかける。

「誰を支援するかは、支援師本人が選ぶものだ。しつかりと考えて……」

「……ならもう決まってる」

「?!」

一生ものの選択を即決する風華。美穂は知つてた、という顔で頷いていた。

「は……早すぎる。考え方直すんだ！ メルド団長も言つてただろう！ 風華、君の技能は貴重なものだ。みんなと話し合つて何にするかを決めないと！」

「……私は、にい以外についてく気はない」

風華のその宣言は、何にするかを言つているようなものだつた。

「ま、まさか……南雲を……鍊成師を選ぶのか!? 非戦闘系にはその力

は必要なのか!?

「光輝、やめなさい」

決断を止めようとした光輝を、零が静止する。

「これは彼女が決めたこと。あなたにそれを止める権利はないわ」

「零……けど」

「けどもでもも無し。風華ちゃん、やつちやいなさい」

風華にウインクする零。そのしぐさに、風華は自分の選ぶ道を宣言した。

「いや～南雲先輩やるねえ～男だねえ～」

「……ん」

全員のステータス開示が終わったあと、生徒たちは一時間の休憩を挟んでいた。

なにせ、先ほどの時間だけで、教師側も生徒側も濃い時間を過ごしたのだ。休憩無くして次の予定へはとても進めない。

「あれは将来が楽しみだなあ～」

「……ん」

「……ほんとにどしたの風華? さつきから元気ないよ?」

風華の顔は相変わらず無表情。だが、美穂は風華の微妙な表情で気が沈んでいることに気づいていた。

「……大丈夫」

「いやそれダメなやつ……はいはい、今は聞かないであげる」

「……うん」

風華は言えないでいた。

ハジメが風華をかばつたとき、彼女は、誰よりも正確な姿をイメージしていた。

優しい兄の姿ではない。冷酷に、淡々と人を殺す殺人鬼。

例えるならば、魔王といったところだろう。
風華は、兄が遠くへ行つてしまふのではないか、と不安を募らせて
いた。

支援師との訓練

ハジメたちが異世界トータスへ来て四日が経過した。

二日目に座学、三日目に全員共通の基礎訓練。そして今日は、基礎訓練に加えて各自の天職に合わせた立ち位置の戦闘訓練が行われる日だ。

戦闘訓練が始まり、クラスメイトたちは各々の天職に見合った武器を持ち、振るう。といつても、この場にいる者はつい最近まで戦つたことがない普通の学生だ。しかし、生徒たちの訓練へのモチベーションは、メンバーの中心的存在である光輝が積極的に参加しているためかとても高い。

それに、ステータスの成長速度にも目を見張るものがあった。
全ステータスが高水準の光輝はただでさえ高いステータスを基礎訓練だけで20ほど上昇させ、他の生徒たちもそこまで行かずとも基本的なトータスの人間の成長速度を超えていた。

ハジメを除いて。

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：1

天職：鍊成師

筋力：11

体力：11

耐性：11

敏捷：11

魔力：11

魔耐：11

技能：鍊成・守護・言語理解

ステータスだけである。行っている訓練メニューは同じなのにこれである。この成長速度の低さにはメルドも思わず首をかし

げていた。いくら一般人でもここまでステータスは3前後は上昇する……らしい。

だが、メルドが言うには守護スキルがステータスを一時的に上昇させるものらしい。しかし、これも中々の曲者だった。

このスキル、守護対象者を守護する際にステータスが上昇するというものなのだが、発動条件の守護対象に自分自身が含まれていないのだ。さらに守護するために攻めるといったカウンターには使えず、本当に守ることにしか使えない。

よつて、この技能が発現する者は、首都防衛や要人警護の職に就いているものが多いらしい。

そして、肝心な鍊成だが……。

「はあ、はあ、はあ……」

「なるほど、落とし穴か……だが」

「範囲が、狭い……」

王宮内部の近接戦闘組が使用している訓練場の片隅。そこには、地面に座り込むハジメ、それを支える風華、二人を監督しているメルドの姿があつた。メルドが勇者である光輝ではなく、ハジメに付いているのは、風華という支援師の対象になつてているからである。支援師の能力は過去のデータが少なく実力が未知数だ。そのため、何が起きてもいいように、騎士団トップの実力を持つ彼が光輝たちの訓練の後に監督することになった。

彼らの目の前には、鍊成で作られたばかりの落とし穴が3つ。トラップに使えると思い、鍊成してみたのだが、ハジメの目の前には直径、深さ1mほどの穴しか空いていなかつた。その他にも地面を隆起させて攻撃する方法も思いつき、試してみた。これはいい線を行つた攻撃だつたが、三本目を作つたところで、ハジメの身体は魔力切れによつて地に伏せた。

というのも全て、魔力の低さが足を引っ張つていた。

なにせ、ステータス上でたつたの11しかないのだ。日常生活に支障はないが、こと戦闘方面に使うとなると圧倒的に足りていない。

「……ん」

そばで待機していた風華が、ハジメに本日五本目の魔力ポーションを渡す。ハジメは自分の息が整つたところでそれをいつきに飲み干した。

「ありがとう風華……んぐつ、んぐつ、ぶはあ……」

「……にい、休もう」

「大丈夫、まだやれるさ……」

「いいや、少し休憩だ。何度も言っているが、無理をしてもいいことなんて何もないからな」

ポーションの飲み過ぎもな、とまだやろうとするハジメを、風華とメルドは止める。

「俺たちの世界では、鍊成師は鍛冶しかしないというのが常識だからな。俺には正直こういった発想は無かつた。これが支援師の支援を受けてどうなるのかはかなり気になるな」

「この調子だと望み薄ですけどね……あたつ」

そう自嘲気味に呟くハジメの頭に風華がチヨップを一発入れる。

「……大丈夫、にいならやれる」

「風華……そうだな、風華が支援してくれるんだ。きっとうまくいく」「ん！」

風華なりの喝がハジメに入つたところで、彼は立ち上がる。

「メルド団長、再開します。今度は風華も一緒です」

「わかった。支援師の支援は俺もこの目で見るのは初めてだ。慎重にやつてくれ」

「はい」

ハジメは返事と共にしゃがみ、地面に手をつける。その背に風華がそつと手を置いた。

「……彼の者を支え、助け、英雄へと至らせよ……支援」

詠唱と共に風華の手が輝きだし、ハジメへと力が流れ込む。

その光景に周囲で見ていた生徒や騎士が「おお！」と色めき立つ。

そして、ハジメの身体に魔力が襲い掛かる。

(なんだこれ!? 力が……溢れてくる、いや制御出来ない!?)

「みんな離れて！」

「ツ!? 総員退避!!」

ハジメの叫びとメルドの警告に騎士たちは近くにいた者をかばいながら退避する。

直後、城下町まで響く轟音と土煙が周囲にいた者を襲つた。

「……ああ」

朦朧とする意識のなか、ハジメは目をさました。全身を被う感触から、ぼんやりとした頭で、彼は、今自分が何か柔らかいもの、恐らくベッドに寝かされていると朦気に理解する。

(いつの間にか気絶してたのか……何やつてたんだつけ)

彼は自分が意識を失う直前の光景を思い出していた。

爆音。

爆発。

そして、すぐに腕の中に誰かを抱いて……

「そうだ！ 風があつだああ!?」

ハジメは、気絶する直前の光景を思い出し、風華を探そうと身を起こす。そうとする。そうしたところで身体に痛みが走る。

全身を襲う痛みを経験したことのない彼は驚き、ベッドへと沈ん

だ。

「……んう。なあに、どうしたの……つて、ハジメくん!？」

その衝撃で、ベッドのわきでハジメの手を握つて眠つていた香織が目をさました。

「あだだだ……白崎さん? いつたい、何が」

「よがつだよおおおおお!」

「ゞ)つふいお!?

事情を聞こうと、今度はゆっくりと身を起こそうとしたハジメの身体に香織は勢いよく抱き着く。その衝撃で彼は再びベッドへと沈むのであつた。

「あがあああああ、いい香りいででであ!?」

「うううううああ……」

予想外の衝撃と女の子特有の香りに、ハジメの頭は混乱するが、自分の懐から聞こえる泣き声にはつとなる。

そして、自分はそれだけの心配をかけるようなことをしたのだと理解した。

とにかく、話しを聞くためにもまず、ハジメは香織をなだめることにするのだった。

「白崎さん……大丈夫? 落ち着いた?」
「うん……ゞ)めんね南雲くん。迷惑かけちゃつて……」
あれから約十分後。

そこには、ベッドの上で胡坐をかくハジメと、ハジメにかかついた布団に被つて体育座りをしている香織の姿があつた。

ハジメの説得によりどうにか心を落ちさせた香織は、先ほどまでの自らの行いに羞恥を感じ、さつきとは別の意味で錯乱していた。
(ああああ何やつてんの私は何抱き着いてるのハジメくんは怪我人で

しょしかもどさくさで名前で呼んじやつたしお願いお願い氣づかない
でああああ、あ、ハジメくんの匂い……）

「あの、本当に大丈夫？」

「ひやい！ 大丈夫！ 大丈夫だから！」

そう必死に弁明した彼女は、一度深呼吸をつく。そして、布団から顔を出し、ハジメの顔を真剣な顔で見据える。

「それじゃあ話すね。あのあとなにがあつたのかを……」

ハジメたちが訓練場の片隅で訓練していた頃、香織たち後方組の訓練は丁度休憩に入つたところだつた。

とりあえず、一息つこうと香織が自分の水筒に手をかけたところで、爆発音が鳴り響いた。

「な、何？！」

「爆発だ！？ 方角は！」

「多分あつち！ あれ、でもあつちつて確か南雲たちの……」

「ツ！ 南雲くん！ 風華ちゃん！」

その方角にハジメたちがいると知つた香織は、周囲の生徒が引き留めるもそれを無視し、一目散に駆け出す。

現場についたとき、そこには他者をかばいながら地面に伏せている騎士や、メルドの姿。

「なに、これ……」

そして、先ほどまで見ていた訓練場とは全く別と言える惨状だった。

大小さまざまな大きさの穴が至るところに出来ているかと思えば、地面から先端が鋭く尖っている岩がいくつも生えている。その岩も、さまざま角度に飛び出しており、中にはどう力を入れればそうなるのかわからないほどにねじれた形状の岩もある。

魔物が襲ってきた後だと言われても納得する具合の荒れ具合。

「全員無事か!?」

土煙が未だ晴れない中、メルドが確認のために叫ぶ。各々が声を上げることで無事を主張するなか、肝心の二人の声が聞こえないことにメルドは訝しむ。

「ハジメ！返事をしてくれ！ハジメ！」

やがて、土煙が晴れる。

そこには風華を抱きかかえてかばい、岩に背中を貫かれているハジメの姿があつた。

「南雲くん!?」
「小鳥遊!?」

ハジメの影に隠れて風華の様子が見えづらいが、恐らく気絶している。ハジメに至つては明らかに意識が無く、出血も酷い。誰がどう見ても重症だ、早急に治療せねば命に関わるだろう。

「美穂！」

「わかりました！」

ハジメがおかげでいる状況を即座に理解した零は、救出のために美穂と共に武器を振るう。

救出自体はすぐに終わり、騎士団の回復部隊から二人に回復魔法を使用された。

ハジメがかばっていたおかげか、風華に大きい傷はなく、せいぜいかすり傷がついているくらいだった。しかし、ハジメの傷は大きく、傷は一応塞がつてはいるが、確実に跡が残るだろう。

「……ん、うう……」

風華は軽傷だつたためか、すぐに目をさます。

「風華ちゃん大丈夫!? いつたい何があつたの!?」

「…………あ、にい。にい、どこ!?」

香織の質問を朦朧とする意識で聞いていた風華は突如、顔を青ざめ、辺りを見回す。

彼女の探し人はすぐに見つかる。横たわり、魔法をかけられている兄に妹は、必死にその身を揺さぶり起こそうとする。

「にい！返事をして！？してよ！ねえ！？」

「危険です、さがつて！」

患者の安全のため、風華を引きはがす看護担当の団員。

それでも彼女は諦めず、ハジメの元へ向かおうともがく。

「にい！にい！にい――――！！！」

地球での彼女を知る者が今まで聞いたことがない悲痛な叫びが訓練場に響いた。

二人の決意

「そつか……そんなことが……」

草木も眠る丑三つ時。

月明りが窓から差し込む、青白い部屋でハジメは香織の話しを聞く。

「うん、風華ちゃんも結構錯乱してた。あんなに大きな声初めて聞いたよ」

「それで……風華は？」

「治癒師の人気が睡眠魔法で眠らせて何とかしたよ。目が覚めたあとも自分のせいだつて自分を責めてた」

「そうか……」

「……風華ちゃん、もう少しで封印されそうだつたの」

「そんな！なんで!?」

まさか、風華が封印されそうになるとは思わず、ハジメは香織に迫る。思い人の顔が急接近したことに香織は若干頬を赤らめた。それでも、ハジメの目を見て言葉を紡ぐ。

「王国の偉い人たちが風華ちゃんを、支援師を危険に思つたの。光輝くんやメルド団長が必死に止めてくれてなんとかなつたんだけど……」

香織はそういうが、その先を言うことに抵抗してしまう。実際の内容はひどいものだつた。

元々、国の上層部は、幻ともいえる天職である支援師が非戦闘系の天職である鍊成師、それも無能とも言える最弱のステータスを持つ者の支援にまわつていることを良く思つていなかつた。

その無能が支援を受けた結果が、荒れ果てた訓練場を一瞬で作り出す程の力の暴走だ。上層部は反逆が起きた場合、その力が自分たちに振るわれることを恐れたのだ。

表向きは国民の安全。しかし、その裏は自分の保身。

風華の処遇を決める場でそれに気づいていたのは、メルドと、生徒

代表として出席していた光輝たち勇者パーティーの内、香織と雲だけであった。メルドは、その力を魔人族へと放てば戦争に勝てる、と反対を主張。

そのときの彼の苦々しい表情を香織は忘れる事はないだろう。「風華は悪くないじゃないか！悪いのは力を制御できなかつた南雲じやないんですか！」

光輝も風華の封印に対して意見を言つていたが、それがこれである。香織が怒りを抑えることに全力を尽くしたことは言うまでもない。

しかし、ここでハジメの最弱ステータスが役に立つた。いくら錬成が強くなろうが、無能ステータスが変化することはない。それに、耐久が低いのだから物量で押せば殺すことはたやすいだろう。

それに、エヒト神が召喚した勇者は封印に反対している。今、彼らの機嫌を損ね、敵対するわけにはいかない。

そう判断した上層部は、勇者である光輝が反対していることもあり、これが初の試みだつたこと、次同じことが起これば風華を封印するという判決を下し、一先ず封印することを取りやめたのだった。

それを知らないハジメは、壁に背を預け、全身から力を抜く。

彼は、風華の支援魔法が失敗したとは思わない。原因があるとすれば、自分の錬成技能が風華の支援に追いつけなかつたのだろう。

無言でベッドに拳を叩きつける。その手を香織は、悲し気に見つめる。

「僕に……僕にもつと力があれば！こんなことにはならなかつた！なんでだ！なんでだよ！」

彼は己の無力さを呪うように、何度も何度も叩きつける。

「南雲くん……でも」

「なんでこんなに弱いんだよ！こんなステータスで何が守れるつていふんだ。僕に、力が、ちからがあれば……」

「……南雲くん？」

何をすれば強くなれる？何をすれば風華を守れる？

ただ守るだけじゃダメなんだ。だつたら逆だ。風華の障害を全て排除すればいい。

「排除すれば、殺せばいい。

天之河のように、もつと殺せる力があれば……。

「そうだ、守れないならいつそ……」

「ツダメ！ いかないで！」

ハジメの目に狂気に満ちる寸前、香織はハジメに抱き着き、押し倒した。その衝撃でハジメは正気を取り戻す。

「あ、白崎……さん？」

「えつあつー、ごめんね急に!? でも、なんだが、南雲くんが遠くに行っちゃいそうで……」

（私、なんで……？）

ハジメの目を見たとき、香織は変わり果てたハジメの姿が連想された。

ただひたすらに強さを求め、他者を見捨て、殺すことも厭わない冷たい目。

それは、自分が恋焦がれた南雲ハジメの姿ではない。

自分でも予想外の行動をしたことに香織は自分に問うが、今はその疑問を彼女は置いておく。

「とにかく！ 南雲くんが弱いなんてことはない！ あの場に南雲くんよりも強い光輝くんがいても、雪ちゃんがいても！ それでも風華ちゃんを守れるのは南雲くんだけだよ！」

「で、でも！」

「それに、暴力みたいな力じや、誰も守れない。南雲くんの守護技能は風華ちゃんのためのでしょ？ それとも、その技能は飾りなの？」

「……違う、飾りなんかじゃない」

「そうだよね？ だつたら、風華ちゃんを守る勇者は光輝くんたちじゃない。南雲くんなんだよ」

香織の言葉で、ハジメはようやく落ち着き、決意する。風華を守るためにの力を得ることを。

ハジメが決意した顔を見て、香織はヨシッとうなづいた。

「今は、雲ちゃんたちが風華ちゃんのところで行つてゐる。雲ちゃん、面倒見いいからきつと大丈夫。南雲くん、明日ちゃんと話すんだよ」

「うん、わかつてゐる。ありがとう、白崎さん」

明日、しつかりと話し合う。そのためにハジメは今は眠ることにした。

「……ところで、白崎さん？」

「何かな？」

「いつまでこうしているおつもりで……？」
抱き着いて

「あつごめんね重かつたよね……よいしょつと」

「い、いやそんなことはつて、何故に布団を被つてゐるのでしようか
……」

「私、今日はここで寝るよ？それにもし、何かあつても治癒師がいるなら安心でしょ？」

「いや、確かにそれはありがたいけどそれとこれとは……」

「それとも……私じゃ嫌？」

「あ、いや……（いえ！そんなことは決して！）」

「なら大丈夫だよね、それじゃあおやすみ！」

「ちよつ待つて!?せめて床に布団敷かせて!?僕がそつちで寝るから

!?

ハジメの衝撃むなしく、香織はがばつと毛布を被つてしまつた。
童貞

どうやつて寝ればいいんだ……とハジメは頭を抱えながら布団に入るのであつた。ちなみに、勢いで押し切つた香織は香織で顔が真つ赤だつたりする。

「あ、それと南雲くん丸一日眠つてたから、それだけ心配かけたこと忘れないでね？」

「そういう大事なことは最初に言つてよ!」

ちなみに、疲労が抜けきつてなかつたためか、結構ぐつすり彼は寝れた。

その日の朝。

「……やつぱねむたい」

ハジメは、寝ぼけまなこをこすり、ぼんやりとした頭で朝を迎えていた。

ハジメが起きたのは普段朝食をとる時間を少し過ぎた頃だった。隣で寝ていたはずの香織の姿は無く、テーブルには先に朝食をとりに行くことと無理をしないでという旨の記された書置き。

とりあえず、制服に着替えようとベッドから移動する際に嗅ぎがない、義妹とは別の女性の残り香に思わず心臓がどきどきする。

実のところ、彼が異性と同じ布団で寝ることは初めてではない。

週に1、2回は風華が寂しいからと言つて勝手に入つてくるのだ。それこそ、幼少期に小鳥遊家でお世話になるときは必ずと言つていいほど一緒に寝ていたわけだが、流石に今となつては、そろそろ一人で寝れるようになつてほしいと兄として思う。

それを断れないし、断らないハジメもハジメだが。

そして、義妹と寝慣れているからといつてそれが女性全般に通じる訳ではない。というか風華以外の女性と寝たこと自体初めてだ。

それはともかく。

ハジメが食堂に顔を出したときのクラスメイトの反応は様々なものだつた。

誰も目をあわせようともせず無視する者やこちらをにらみつける者、こちらをちらちらと見てやめてを繰り返す者。

あまりよく思われてないけど当然か、と彼は思う。まあ、あれだけ暴れた挙句に自分の義妹を封印の危機に晒したのだ。そりやこうもなるか。

そして、その義妹の姿はここにはない。彼は、食事を終えたら部屋に行つてみることを決めた。

「南雲。目が覚めたんだな」

居心地の悪い中、朝食を終えたハジメに声がかけられる。声の主はしかめつ面の光輝だつた。その後ろには龍太郎と、申し訳なさそうな顔をした香織の姿もある。

「おはよう、天之河くん。色々と迷惑かけちやつてごめんね」

「单刀直入に言う。これ以上風華と関わるな」

「……それは、いくら迷惑をかけたからといって聞けるものじゃないね」

「ね」

「そんなことを言つてる場合じゃない。君が力を暴走させたせいで彼女は危険に晒された。能力の都合上、君の傍にいないといけない彼女は一番危険な場所にいるんだぞ！」

「なら、練習すればいいでしょ。一度と暴走しないように」

「だがその低いステータスでは守るのに役不足だ！風華を守るならステータスが高い俺たちといるべきだ」

「ツ光輝くんそれは！」

「それが言いたいだけだつたら、僕は行かせてもらう」

「どつこいしよ、とハジメは椅子から立ち上がる。

「待て南雲！話しあまだ」

「僕にもやらなきやいけないことがある。それこそ練習とかね」

ハジメは、後ろであれこれ言う光輝を無視し、スタッタと食堂を出る。あのままだと自分から殴りかかりそうだ。

「おはよう南雲くん。少しいいかしら」

そんなハジメにまたもや話しかける者。

零がそこに立っていた。

ハジメと横に並ぶ零。二人は王宮の廊下を歩いていた。

目指すのは風華の部屋である。場所はそう遠くはない。

「……風華のことをありがとう、八重樫さん」

「別にいいわよ。私はやりたいことをやつただけ……風華ちゃん、自分で責めてたわ。にいに会えない、会いたくない、ともね」

「それでも、会わなきやいけない。風華は悪くないんだ。悪いのは

……制御できなかつた僕だよ」

「さつきの光輝との話し？食堂の外まで聞こえてたから知つてる。ん

で、言わせてもらうけれど、役不足なんてことないわよ」

ステータスプレートを見てみなさい。そういわれたハジメは自分のステータスの存在を思い出し、確認する。

色々なことが起きすぎて確認を怠った彼を待っていたステータスに彼は目を見張る。

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：2

天職：鍊成師

筋力：13

体力：40

耐性：40

敏捷：13

魔力：60

魔耐：40

技能：鍊成「+地形操作」・守護「+鉄壁」・言語理解

光輝のようにオール三桁といったおかしい数値ではないが、それでも以前に比べて劇的に上昇している。さらに、派生技能までもが発現しているではないか。

この変わり様にハジメはステータスプレートを振つてみたり、逆さにしてみる。

その様子がどこかおかしかったのか、零は笑いをこらえていた。

「なん……だこれえ!？」

「ふつくくく。あなたが搬送されるときに落ちたのを拾つたの。そのときにプレートが更新されて、思わず見ちゃったの」
勝手に見てしまつてごめんなさい、と彼女は謝るが、その言葉はハジメの耳を右から左へ流れしていく。

そして、ある考えに至る。

魔法使いが剣を振るよりも魔法を練習する方が成長出来るように、

鍊成師は鍊成技能を使うことをした方がステータスを成長させやすいのではないか？

あとでメルドに相談してみようと彼は思った。

「とまあ、あなたはちゃんと成長している。守護技能だつて派生技能が出ているし、風華ちゃんをしつかりと守れるわよ」

そう言つて彼女は立ち止まる。

目の前には、風華の部屋があつた。

「あとは頼むわよ、お兄ちゃん？」

ハジメの背中をポンと叩き、雲はどこかへ行つてしまつた。

コンコンコン、と扉を三回ノックする。

「風華、入つてもいいか？」

扉から返つてくる返答は無言。鍵はかかつておらず、扉を開けることは可能だ。

八重樫さんのフオローが無ければ、鍵がかかつて面会謝絶だつただろう。そう考えると彼女に頭が上がらない。

「入るよ」

彼は無言を肯定と受け取り、部屋に入る。

部屋の内装はハジメの部屋と変わらず、この数日で見慣れた調度品に、見慣れた天蓋ベッド。

そのベッドの上には毛布を被つた丸い小さな塊が乗つている。

ハジメはベッドへと近づく。その塊は小刻みに震えていた。

無言でベッドに座り、塊の上に手を乗せる。その震えは止まり、

そこからか細い声が聞こえてくる。

「……にい？」

「どうした？」

「……怒つてないの？」

その言葉に彼は吹き出しそうになる。まるで、母親の説教を恐れる子供のようだ。

「どこに怒れつていうんだい。そんなこと無かつただろ？」

「だつて！フウが支援しなきや、にいが傷つくこと無かつた！フウが失敗したから、にいが死んじやうとこだつた！」

「大丈夫。兄ちゃんはここにいるよ」

「……フウは悪い子」

言葉を遮るように風華をあやすように撫でる。ヒートアップしかけた風華の心が少し落ち着く。

「フウは悪くない。自分のやることをやつただけだよ」

「……」

「兄ちゃんだつて、鍊成を制御できなかつた。悪いのは兄ちゃんだ」

「……それは、にいも同じ。にいは悪くない」

包まつていた布団から風華が顔だけ出す。赤く腫れた目元と、泣いたあとで綺麗な顔が台無しだつた。

「……にいはやることをやつただけ。でも、フウからいなくなることは違う」

「じゃあ、そうならないように強くならなきやな」

布団から身体を全部出し、風華はハジメに抱き着く。

彼女も彼女で、自分の非力を嘆いていた。

自分は、支援師は、パートナー^兄がいなければ意味がない。そのパートナーが傷つく姿を見ていることしかできないのは歯がゆい思いだ。

「……もし、フウより先に死んだら、フウも死んでそつちに行く」

「それだけはやめる。やめてくれ」

「じゃあ、もう戦うような危険なことはしないで」

「それは無理だ、フウ」

その声にハジメを見上げる風華。ハジメは彼女の目を見て言う。

「兄ちゃんはフウを危険から……敵はもちろん、もしかしたらこの国からも守らなきやいけない」

「……ん」

「そのために兄ちゃんは戦わなくちゃいけない。けれど、僕は弱い。

風華の助けがなきや何もできない。だから、一緒に強くなろう」

「……!!」

「僕が鍊成で風華を守つて、風華はそれを支援して僕を守る」

「ん!!」

「二人で強くなろう」

たつた二人だけの部屋で、兄と妹は互いに護り合うことを決意した。

「……ところで、にい？」

「な、なんだい？」

「……ほかの女の匂いがするのはなんで？」

光のない目がハジメを貫く。風華はそんな彼のブレザーを取つ払い、シャツのボタンを外す。

そこから覗く肩には、小さな赤い跡がついていた。絶妙にハジメから見えない位置にそれはあり、兄は気づいていない。

そして、彼女は確信する。匂いの正体はいつも兄にすり寄る敵のものだと。

「ふ、ふふ」

「あの～風華さん？」

「……にいい……覚悟お……!!」

浮氣者（勘違い）には鉄槌を。

兄の首筋に妹は噛みつく。情けない叫びが一つの区画に響いた。

その後、メルドに会つたハジメは自分の無事を告げる。

メルドもメルドで、風華が封印されるかの会議の際、ハジメと風華を戦争の道具にするようなことにしてしまつたことを謝罪する。ハ

ジメは、そこで風華が想像以上に危ないことになっていたことを知る。

それならば、とハジメは先ほど自分が思いついたことを話す。メルドの方も失敗したことの原因に心当たりがあつたためか、なんとかしてみせると胸を張つた。

そして、翌日の早朝。

「おい、がきんちょお！さつさとそこの鉄取つてこいい！」
「は、はいいいいい！！」

彼は、熱い熱い鍛冶場の中で、重い鉄の塊を運んでいた。

想像力と義妹の愛情

ハジメは、ハイリヒ王国お抱えの鍛冶工房でアシスタントを始めた。

普段は生徒たちが訓練場で訓練している時間だが、ハジメはたつた一人集団から外れ、この場にいる。

彼が一人でここにいるのは、ハジメがメルドに頼み込んだあることに関連していた。

それは、自分に鍛冶を教えてくれる人をつけてほしいということだ。

彼は自分に必要なことは、鍛成を使いこなすことだと考えていた。メルドも同じことを考えていたのか、ハジメの考察を裏付けるような説明をしてくれた。なんでも、魔法学院に通う生徒が、自分の身に合はない上級魔法を無理やり唱えようとして失敗し、暴走するケースが稀にあるらしい。

とにかく、ハジメの頼み事は、その日の夜に返事が返ってきた。流石に時間がかかるだろうと考えていたハジメは、その返答の早さに驚いた。さらに、その相手がかなりの大物であった。

それが、今ハジメと共に武器を作っている、ハイリヒ王国直属筆頭鍛成師ウォルペン＝スタークだ。

ウォルペンがハジメを受け入れた理由は、ハジメが異世界から召喚された鍛成師というのが主な理由だ。

異世界人唯一の鍛成師、さらに非戦闘系の天職だといふくせに戦場に出ようとし、訓練だけであそこまでの騒ぎを起こす。これは興味が湧いてくる。

また、王国お抱えの鍛冶師が年々老化により減少しており、そのため若手の後継者が一人でも欲しい、といった思惑もあった。

ハジメが工房に到着し早速、彼はトータスでの鍛冶をハジメに教えた。

トータスでの鍛治は、ハジメが思つていた以上に地球で行うものと然程変わらなかつた。

玉鋼を熱し、鎌を振り下ろす。違うところは、工程の合間に鍛成が使われることだ。作業によつては、鍛成を使い続けるといった工程もある。

また、鍛成する際もただ、打つた鋼に鍛成をしたらいい、という訳ではなかつた。実際やつてみると魔力のコントロールに結構な集中力が要求される。雑に扱えれば雑なものが出来上がるし、それは今まで打つてきた時間が水の泡になるようなものだ。

鉄を打つときにも当然だが技術を要求される。鍛成をかけるときの素体が悪ければ、それなりのものしか作れない。

では、玉鋼といつた素材に直接鍛成を行い、加工することは可能かと言われると可能だつた。しかし、それは日常で不自由無く使用出来るレベルが限界であり、戦場で振るう武器には向かない。また、魔力を多量に消費するのでコスパが悪いといつた面もあつた。

ここへ来て二、三日経つたある日、それをやれないかと聞いて、やつてみろと小さな鉄の塊を渡された。それを、小さな鉄の塊をナイフに直接鍛成するのに半日かかり、その結果、粗悪な物が出来上がつたのは彼の記憶に新しい。

「ぜえ、はあ、はあ、はあ……」

「ま、こんだけ出来りや上出来だ。初心者ならもう一段悪いやつが出来るものんだが、お前さんの場合は想像力の強さがそこを補つたつてとこか」

深夜、工房の片隅で肩で息をするハジメに、ウォルペンは言う。

「これでわかつたら。鍛成技能は結局のところ鍛冶を便利にするものだつてことだ。鍛冶が鍛成を手伝うんじやない、鍛成が鍛冶を手伝うもんだ」

「……はい」

「お前さん、その鍛成を戦闘に使うつてんだろ？ 難しい道だつてのはわかつてんだろうな」

「それでも、僕がやらなきやいけないです」

ハジメは、顔を上げ、ウォルペンの目を見て言う。

「その嬢ちゃんか」

「……はい」

その日、たまたま来ていた風華を見て言う。彼女の隣には、護衛としてついてきた美穂の姿がある。風華は、夜遅くまで起きていたはず、テーブルに伏して寝落ちており、そんな彼女に釣られて美穂も寝ていた。

こうして見ていると姉妹に見えるほほえましい光景。それを守るためにもハジメには力が必要だ。

「風華のために必要なんです。改めて、僕に鍊成を教えてください」「……明日も早いぞ、今日は泊まつてけ。そこの嬢ちゃんたちも忘れんなよ」

「ありがとうございます！」

ハジメは鍛治と鍊成に集中するなか、風華も風華で支援師の訓練を行っていた。

といつても、風華の天職である支援師の支援は、ハジメがいなければ意味がない。そのため、風華に求められるのは、魔力の出力の調整だつた。

実のところ、訓練場での一件はハジメは自分のせいだと思い込んでいるが、風華の方にも原因があつた。それは、支援魔法を使用する際に魔力を入れすぎたことだ。

支援魔法は記録が少なく、さらに風華自身に魔力を使つたという経験はゼロだ。当然、魔力の加減なんて出来る訳がない。しかし、それによつて事故が起きたのは事実だ。

だからこそ、魔力の出力制御が必要となる。

「……ふう」

目の前にある、大きさ15cm四方の鉱石から手を離す。

風華の目の前にある鉱石は、魔色石という。魔力を流している間、表面の色が変色する特殊な鉱石だ。変化する色は鉱石によつて違い、魔力を通すまではわからない。

今、鉱石の色は鈍色。魔力が通っていない、素の鉱石だ。この鉱石に魔力を通すと青く光り、通す強さを増やすことで青から赤へ徐々に変化する。魔力出力制御の訓練にはもつてこいの鉱石だ。

風華の課題は、この色を一色のまま維持すること。

多ければ赤く、少なければ青く。鉱石の色はほんの少し加減を間違えればすぐに変化を表す。

「……これ、結構大変」

額に浮き出た汗をぬぐう。

風華は、これを毎日繰り返している。これを行うことで、魔力の正確な出力の感覚をつかむのだ。

今の風華は、青色ならば維持することが可能だが、中間の紫色やその先の赤色は、鉱石に込める魔力が多くなり、制御が難しい。今の兄の魔力量なら最大でも紫色くらいの魔力を支援に要求されるだろう。

「……そういえば」

兄の事を考えて、ふと思い出す。それは、休憩中のハジメとウォルペンの会話の中で、ウォルペンが言つていた言葉だ。

「いいか、鍊成をするのに最も大切なのは、想像力だ。自分がどういう形にしたいか、金属にどういう形になつてほしいか。それを強く想像しろ、そうすりやあとは魔力が自然と動いて

くれらあ」

大切なのは想像力。これは魔法関連の訓練に参加したときにも言われたことだ。

ふむ、と魔色石を見つめて考える。彼女は今まで、流す魔力の強さに集中していたが、実戦で魔力を流す相手はこの石ではない。南雲ハジメという人間だ。

魔色石に手を当て目をつむる。魔力が鉱石へ注がれる。

ならば、想像してみよう。石を兄だと。流すのは魔力ではなく、己

の気持ちだと。

(……にい)

笑う兄、寝てる兄、守ってくれる兄の背中、自身を抱きしめ、頭を撫でてくれるハジメ。

(……ああ)

ああ、その全てが愛おしい。その愛情全てを独占したい。その身体に守られたい。その腕に潰されたい。

(……やっぱり、好き)

風華が目を開けた先には、妖しく輝く紫色。

それに満足するように、彼女は薄く微笑んだ。

ハジメたちがトータスへ召喚されて約二週間が経った。

メルドに呼び出されたハジメは、風華と共にあの訓練場に立つてい

た。「それで、どうしたんですかメルド団長。急に、今日は工房まで行かなくていって」

普段とは違う指示にハジメは首をかしげる。

「それなんだがな。実は、明日からの訓練をオルクス大迷宮への遠征で行おうと予定している。今まで戦つてもらつた王都外の魔物とは全く比べ物にならない強さの魔物の巣窟だ。だからこそ、お前さんたちの力が必要だが、制御できなくて危機に陥るわけにはいかない」

「つまり、これは迷宮へ行くための試験ですか」

そういうことだとメルドは頷く。試験、という単語に二人の身体は思わず強張る。

ちなみに、光輝たちは王都外の魔物を相手に実戦経験を積んでいる。ハジメは、ウォルペンからの鉱石採取の依頼という形でたまに参加していたため、実際に戦闘したことは片手で数えるほどしかなく、

そのときは補助役に徹し、一度も支援魔法も受けていない。

というのも、これまた先日の事件が影響している。あのときは訓練場だからまだよかつたが、野外での事件を再現されると、間違いなく地形が大幅に変わる。それは、生物の生息域が変化したり、物の流通に影響を与える可能性が非常に大きい。そのため、メルドは中々支援魔法の許可を出せないでいた。

しかし、オルクス大迷宮という危険な場所で、出し惜しみはしていられない。なにより、二人の訓練の様子の報告から今なら大丈夫だろうというメルドの考えもあつた。

隣の風華と見つめあう。風華はハジメの目を見て頷いた。

「その試験、受けます」

「よし、わかった。では早速だが内容を説明する」

メルドはそういうと、訓練場を指さす。その先には地面につけられた跡があり、それは大きな円を一つと、小さな円を三つ描いていた。「あの円の大きさの穴を開け、それを戻し、今度は隆起させて最後に戻す。この四回の工程全てを支援魔法を受けて行ってくれ」

ごくり、と唾をのみ込む。

これはハジメと風華の二人の息が合わなければ達成できない試験だ。どちらかがずれれば、魔力はまた狂い出すだろう。

「……ん」

緊張するハジメの手を風華は握る。その手から流れてくる微量の魔力は、彼に大丈夫だと伝えるようだつた。

「……そうだな、ここでやらなくていいやるつて言うんだ」

早速、二人は大きい穴から取り掛かる。

ハジメが地面上に手をつき、その背に風華が手を当てる。

「……彼の者を支え、助け、英雄へと至らせよ……支援」

風華の詠唱と共に、ハジメの身体へ魔力がめぐる。

以前は、魔力が襲いかかる感覺だったが、今回は違う。身体中を風華の魔力が流れ、純粹に力が溢れてくる。

そして、どんな加減で魔力を流せばいいかを理解する。

(今なら、いける!)

「鍊成！」

地面についていた手から魔力を流す、イメージするのは指標通りの大穴。

流れた魔力は地面を輝かせ、徐々に素早く想像通りの形を形成していく。

「よしつ！」

「……ん！」

上手くいったことに兄弟はお互いの手を掲げ、打ち合わせる。

パチンッと小気味いい音が訓練場に響く。その様子を見たメルドは、これなら残りも大丈夫だろうと直感した。

彼の予想通り、ハジメと風華は、次々と課題を突破し、やがて隆起させた地面をもとの姿へと戻す。

そこまで！とメルドの声が響いた。

その日の夜、生徒たち全員にオルクス大迷宮への遠征が通達された。

ホルアドの夜

オルクス大迷宮

トータスに存在する七大迷宮の一つで、全部で百の階層が地下に伸びる巨大な迷宮だ。迷宮の中には王都の外など地上に生息する魔物より強力な魔物が闊歩し、それは階層が進むにつれて強くなる。

だが、強い魔物ということは、それに見合う質の魔石を持つているということであり、質の良い魔石ほど金になる。この迷宮を資金源とする冒険者や傭兵は数多くいるらしい。

さらに、魔物の強さは階層ごとに細かく分けられている。そのため、この迷宮は新兵の訓練兼魔石収集にもよく利用されるらしい。収集された魔石は、市場に流れるか、新米の魔術師が魔石を用いた魔法陣を作成する際の練習台に使われる。この魔石を用いることで魔術師たちは効率よく魔法を発動させることができるので。

馬車で移動中にされた説明を思い出しながら、ハジメは宿泊している部屋のベッドに寝転がっていた。その上にはハジメの腹を横断するよう寝そべる風華の姿があつた。一人の恰好は共に寝間着である。

現在、生徒たちはメルド率いる騎士団と共に、オルクス大迷宮の近くにある街であるホルアドに宿泊している。このホルアドは、大迷宮のすぐ近くということで冒険者に人気があり、王国直営の宿屋まである。その宿屋を御一行は利用していた。

寝転がりながら、ハジメは自分のステータスプレートを何とはなしに確認する。

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：3

天職：鍊成師

筋力：35

体力：50

耐性：45

敏捷：15

魔力：70

魔耐：50

技能：鍊成「+地形操作」「+精密鍊成」・守護「+鉄壁」・言語理解

ウォルペ恩の元でアシスタンントを続けた結果、鎧を振つたり重い鉄を運んだりすることが多かつたためか、筋力や体力といつた肉体的なステータスが主に上昇している。また、鍊成を本来の目的で使用することもかなりあつたためか、魔力の伸びもまあまあだ。敏捷にあまり変化が無いのは、走るようなことがあまりなかつたからだろうか。

派生技能に精密鍊成が出現したことに、ハジメはウォルペ恩に感謝しかない。彼の教えが無ければこの派生技能は出現しなかつただろう。

また、ウォルペ恩に鉱物の知識を少しづつ教えられていたため、今ハジメはメジャーな鉱石限定ならば鑑定技能無しで鉱石の判別が可能だ。戦闘の役に立つかは不明だがあつて損は無い知識だ。

「そういえば、なあ風華」

「……ん？」

「今のお前のステータスってどうなってる？」

自分のステータスを眺めていたハジメはふと気になつたことを腹の上の風華に尋ねる。その質問に、風華はハジメから降りて自分の荷物を取りに行き、そこからプレートを取り出しハジメに見せた。

小鳥遊風華 16歳 女 レベル：5

天職：支援師 《鍊成師》

筋力：10

体力：20

耐性：7

敏捷：25

魔力：220

魔耐：120

技能：支援《鍊成》・支援補助・魔法耐性・言語理解

相変わらずの魔法特化のステータス。それでも、肉体面のステータスが上昇しているのは確かだ。というのも、ハジメ以外の王宮訓練場組の全員が行う基礎訓練には基本的な筋トレも含まれており、それが結果を出しているということだろう。

その中で敏捷が特に高いのは、まあ……。

（逃げようとしてたんだろうなあ……筋トレ）

ハジメの思った通り、風華は筋トレからの逃走を毎回試みていた。しかし、逃げることに成功したところでそれをわかっている美穂にその都度捕まり連行されていた。というか、風華の初期の敏捷値ならば誰でも捕獲は容易いだろう。

「魔力すごいな。これだけあれば明日は余裕かもな」

「……にいも、結構伸びてる」

「それでもあんまり強くはないだろ。風華がいなきや基本的に戦えないし、そもそも裏方の鍊成で戦おうつてんだからステータスはまだまだほしいさ」

風で聞いた噂だが、光輝のステータスはオール200だとか。この成長率の差は何なのかとハジメが考えだしたところで、風華にポスッと叩かれる。

「……にいは、にい。にいは頑張つてる」

「……ありがとな」

義妹からの励ましにハジメは、「そうだな」と思い直す。自分は自分、光輝は光輝だ。どれだけ強さに差があつても、自分のペースで成長していくべきだ。

「……そして」

「うん？」

「……フウも頑張った」

「そうだな、えらいぞ」

「……だから」

そう言つて風華は、再び自分の荷物を漁る。ハジメの頭に？が浮かぶ中、そこから取り出した物を風華はハジメに突き出す。

それは櫛だった。それを見て、彼は何をすべきかすぐに理解する。

「はいはい」

身体を起こし、櫛を受け取る。胡坐をかいたハジメの前に風華は背を向けた。

まずは髪を手櫛で梳かす。義妹の髪を梳きながら、ハジメは地球での出来事を思い出していた。

風華の髪を梳かすことは昔からハジメの仕事だ。最初は小鳥遊家にお世話になるとき限定だったが、それ以外のときも要求されることが多くなり、最近は週に3～4回は頼まれている。最初はいきなり櫛を入れて、痛いと怒られていたが今では手慣れたものだ。

彼女の背を流れる長い黒髪。その色艶は綺麗なもので、触り心地もさらさらとしていて大変良いものだ。邪魔にならないように纏めたり短くしたりないのか？と昔聞いたことがあるが、彼女はそのままがいいらしい。

程よくほぐれたかな、と手櫛をやめ、一旦髪から手を離す。そばに置いていた櫛を取ろうとしたところで、扉をコンコンとノックする音が部屋に響く。

現在時刻は深夜と言つてもいいところだ。こんな時間に誰だろうか？と思つたがすぐに扉の先から叩いた主の声が聞こえる。

「南雲くん、起きてる？白崎です」

来訪者は白崎香織。

兄の手櫛に微睡んでいた風華の目がクワツと見開かれた。

鍵を開け、扉を開けたハジメの前には白いネグリジェにカーディガンを羽織った香織の姿があつた。

普段の見慣れた制服とは違い、生地の薄いネグリジェという恰好が香織の育ちの良さを制服以上に分かりやすく表現している。さらに、羽織っているカーディガンはそれを覆い隠すどころか前面に押し出す手助けをしている。

それに加えて、ハジメと香織の身長差の関係から、ハジメが香織を見下ろす構図になつていて。それはつまりハジメが香織を見ようとすると、彼がどうしようとの目に立派に実つた果実が、それも果皮から上半分を露出した果肉が写つてしまふ。

そして、白色というところがじつによくない。目を凝らせば内側を透かして見れそうなところが大変よくなすばらしい。

彼女のどこか思いつめた表情も相まって、結論、大変魅力的な光景が彼の視界を占領していた。

「し、白崎さん、どうしたの？こんな夜更けに？」

緊張で若干声が上ずる。今の香織の恰好は、思春期男子にはかなり刺激が強かつた。

「その、少し南雲くんとお話ししたかつたんだけど……お邪魔だつたかな？」

苦笑いしつつ疑問形で終わつた香織の言葉に一瞬？を思い浮かべたハジメだが、直後にその背を冷たい視線が突き刺さりハツとなる。例えるならば、背中に氷柱を入れるどころかぶつ刺された感じだ。

「……にーいい？」

背後から兄を呼ぶ声がする。

ギギギと擬音のしそうな動作でハジメは振り向いた。

そこには、ベッドではなく、真後ろに張り付くように立つて風華の姿があつた。

「うえい！」

まさか真後ろにいるとは思わなかつたハジメは僅かに飛び上がる。風華が二人を見据える目に光は無く、ただ闇が広がるのみ。伸ばされた腕はハジメの腕をつかんで全力で握りしめていた。

「な、なんでしようか、風華サン？」

掴まれた腕は痛くはないが、その目から目線を外せない。やつとの思いで顔を横に逸らしてみれば、義妹に向けて笑顔で返す香織の顔。何故香織はあれに対して笑顔が出来るのか？ハジメの思考は混乱と恐怖に埋め付くされる。

「……続き」

そう言つてハジメの顔に向けて櫛を突き出す。ちなみに、もし顔に届いていたら目つぶしは確実の方向だ。

震える手でそれを受け取るハジメ。それを見た風華は香織に一度手招きをし、ハジメをベッドへと引っ張つていく。

「それじゃあ、お邪魔します」

香織はそう言つて部屋に入ると扉をギイと閉じた。

備え付けのテーブルセットに香織が座る。ベッドへ連行されたハジメはとりあえず正座しようとしたが、風華の「……胡坐」の一言で胡坐をかく。その組まれた足に風華は座り、後ろの兄へと頭を突き出す。

どうやら、この姿勢での続きを義妹様は御所望らしい。ハジメは髪を梳きやすいように上体を後ろに傾け、髪に櫛を入れた。

「ごめんね、こんな状態での話になっちゃって」

「ううん、気にしてないよ。それにしても南雲くん上手だね」

ハジメの手際の良さに香織は意外だと驚く。

「そうかな？風華にしかやつたことないからわからないけど」

「風華ちゃんの顔を見ればわかるよ。とても気持ちよさそうにしているもん」

香織から見える風華の顔は、先ほどのものとは全く違い、香織が来る前のように安らいでいる。

そして、香織を見て勝ち誇ったようににんまりと笑う。

いいだろう、ここは私だけの特別だ。とでも言うかのようだ。

その様子を、小動物を愛でるような目で見る香織だが、内心ではそれを羨ましがっていた。

(いいなあ、南雲くんにお世話をされてて。私もやつてもらいたいなあ……)

なんとはなしに自分の髪をいじる香織。その様子を見て風華は香織の内心を理解していた。

「それで、白崎さん。話しつてなにかな? 明日のこととか?」

「あ、うん。それなんだけどね……」

「……どうしたの」

ハジメの声で香織は再び思いつめた表情になり、顔を俯く。そのままに流石に疑問に思つた風華が聞く。

「うん……私、明日が不安で仕方ないの。明日、全員が生き残つて帰れるのか。無事に終わってくれるのか不安なの」

「それは……僕たちだって不安だよ。でも、みんな強くなつてるし、メルド団長だってついてるしきつと……」

「さつきね、夢を見たの」

「……夢?」

「そう……南雲くんと、風華ちゃんがいなくなる夢」

その言葉にハジメは思わず櫛を動かす手を止める。風華も、神妙な顔つきで続きを促していた。

「さつき眠つてたんだけどね……みんな、一つの道を歩いていたの。でも、一人の姿がどこにもなくて、振り返つてみると……」「……みると?」

「……一人だけ後ろにいて、だんだん奈落に落ちていって、最後にはいなくなつちゃうの」

「それは……」

香織の見た夢の内容にハジメは声を失う。

「夢は夢だつてわかってる。だけど、目が覚めたときにもし、二人がないんじやないかつて思つたら、どうしても一人の顔がみたくつて

……

香織は風華の右手を取り、懇願するように包み込む。

「南雲くんは、生きて帰つてくるよね？風華ちゃんのこの手は現実のものなんだよね！」

「落ち着いて、白崎さん」

「……ん、落ち着け」

興奮する香織の手に、二人は両側からそれぞれの手を重ねる。

「あ……」

「僕たちはちゃんとここにいるし、明日も生き残る。この世界で死ぬつもりはないよ」

「……死んで、たまるか」

香織を安心させるように、二人は静かに声をかける。それでもなお、香織の不安気な表情は晴れなかつた。

「じゃあさ、何か約束をしようよ」

「約束……？」

「そう、そのために明日を絶対に生き残ろうっていう約束」

「……ん」

約束という言葉に香織はキヨトンとし、少し笑う。

「それってさ、私が決めてもいいの？」

「もちろん、僕と風華に出来る範囲のことにならだけど何でも」

「……ん？」

兄の「何でも」という言葉に妹は嫌な予感がした。

香織は少し考えるそぶりをすると、突如顔が赤くなり、首をブンブンと横に振る。それが落ち着いたのか、彼女は口を開いた。

「それじやあ……まず風華ちゃん」

「……ん」

「結構ありきたりかもしれないけれど、一緒に買い物に行かない？実は色々と行つてみたいところが多くつて」

「……まあ、それくらいなら」

そして南雲くん、とハジメの顔を見やる。風華とは別の雰囲気の美貌に彼は少し緊張する。

「南雲くんには……その、膝に乗らせて……」

「だめ！」

香織の言葉を風華は遮るように叫ぶ。

「そこはフウの、フウだけの……！」

風華の嫌な予感は的中していた。彼女は、自分がけの特別が無くなるかもしれないと危機感を感じ、渡すまいと兄に抱き着く。

「……白崎さん、ごめん。流石にハードル高いかも」

風華の頭を撫でながらハジメは少し困った笑顔を浮かべた。

「そつかあ……じゃあ、髪を梳いてもらいたいかな。どんな感じか興味あるし」

「それくらいなら。あ、でも風華にしかやつたことないから上手くできなかつたらごめん」

「……ん」

約束が決まつたところで、風華が小指を差し出す。日本での約束事といえばやはりこれだろう。

それを理解した二人も小指を出し、それぞれの指に絡める。

指切りをする三人。その指はしばらく離れるることはなかつた。

「それじやあ、そろそろ寝なきやね」

「うん、そうだね」

「……おやすみ」

……。

「……風華ちゃんつて南雲くんと部屋違うよね？」

「うん。だから髪を梳き終わつたら送つてこうかなつて」

「……ここで寝る」

……。

「……連れていったほうがいい？」

「お願いしようかな」

出来る限りの抵抗虚しく、香織は風華を抱きかかえ、ハジメの部屋をあとにした。

そして、その様子を無言で眺める者が一人。壁に拳が叩きつけられた。

オルクス大迷宮

「うおおお！」

オルクス大迷宮第一層。

そこでは、召喚された勇者たちの戦闘訓練が行われていた。

大広間を戦場に、光輝は聖剣を握り先陣を切る。零と龍太郎がそれに続き、後方では香織と、彼女の友人である谷口鈴と中村恵理が魔法の詠唱を始める。

彼らの武器の先には灰色の毛玉。毛玉といつても、大きさは彼らが知るそれとは明らかに大きく、その数はとても多い。

「ちつこいつらちよこまかと！」

龍太郎の振るわれた拳は、毛玉を捉えることはなく、地を抉る。攻撃を躊躇した毛玉は、動きを止め、その姿を見せる。

彼らが相対している魔物は、ラットマンネズミ男と呼ばれる小型の魔物だとメルドから説明されている。ラットマンという名に相応しい素早さは、龍太郎の拳に当たることなく彼を翻弄している。

「くそつ当たらねえ！」

「落ち着くんだ龍太郎！メルドさんが言つたとおり、奴らはすばしつこいだけだ。落ち着いて対処すればやれる！」

攻撃が当たらないことに苛立ち、狙いがどんどん荒くなる龍太郎を、別のラットマンを切り捨てた光輝が諫める。その言葉で彼もどうにか落ち着こうと、深く息を吸つた。

その無防備な姿を責め時と判断したのか、ラットマンは龍太郎へと襲い掛かる。そして、その素早さを活かした突撃が彼の急所を食いちぎろうと飛び上がった。

直後、灰色の小さな体躯に、真正面から龍太郎の拳が振るわれた。逃げ場の無い空中で振るわれた拳は、衝撃を余すところなくラットマンを襲い、吹き飛ばされる。直線上にいた他のラットマンを二、三体吹き飛ばし、飛んでいったラットマンは壁に激突し、潰れてピクリとも動かなくなつた。

「なるほどなあ……こつちから殴つて当たらねえならあつちから来て

もらえばいいってか」

一匹片付けた彼は、残ったラットマンを挑発するように手を招く。挑発された拳句に仲間をやられたことに憤り、ラットマンたちは龍太郎へと襲い掛かる。

「いくぜええ！」

先ほどとは違い、数の増えたそれを相手に彼は己の手足を振るう。「よし、いいぞ龍太郎！」

その様子を見て大丈夫だと判断した光輝は、己もリーダーとして戦いに貢献すべく、聖剣を振るいらットマンへ切りかかる。

彼が龍太郎と違い、攻撃を当てられているのは剣と拳というリーチの違いと、彼自身が握る聖剣の能力だ。

その能力は、一定範囲の敵を弱体化させ、自身の身体能力を強化させるというもの。これにより、ラットマンは自慢の素早さを十全に発揮出来ず、逆に強化された光輝に切り捨てられる。

もちろん、聖剣があるから攻撃が当たるというわけではない。これは彼自身の実力あつての結果だ。

飛び道具を持たないラットマンからすれば、攻撃のために近づくことは死を意味し、かといって何もしなければ、逆に接近され切られてしまう。まさに積みという状況だった。

では、同じく剣を持ち、聖剣の加護も無い零はどうか。

結論から言うと、彼女が一番の異常だった。

剣を一振り、首が飛ぶ。剣を二振り、身体が裂ける。

彼女が振るう剣は確実に急所を捉え、相手に生きることを許さない。

敵を見据える彼女の目は、冷静に冷酷に、敵の動きを見切る。

それに加えて、誰も彼女の動きを捉えられない。いや、見えてはいるが、認識出来ない。

彼女がラットマンへ迫っているのはわかる。だが、その過程をメルドですら認識出来ていなかつた。

それはラットマンも同じようで、ラットマンも零の動きに全くついていけてない。

そこに一つも言葉は無く、黙々と彼女は斬り殺す。

その姿は敵だけではなく、味方にもどこか恐怖させるものがあつた。

やがて、形勢不利だとわかつてきたのか、ラットマンたちは逃走すべく後退を始める。

「「暗き炎渦卷いて、敵の尽く焼き払わん、灰となりて大地へ帰れ——螺炎」」

その逃亡を許すまじと、香織たち三人が炎の渦を同時に放つ。渦に巻き込まれ、断末魔を上げるラットマンたちは、灰と化し、全滅した。広間いっぱいにいたはずのラットマンは僅かな時間で全滅、これにはメルドも苦笑いしかない。

割とあっさりと倒されているが、これでも王都近辺の魔物よりはよっぽど強い。新人たちはあの素早い動きに慣れるまで結構時間がかかるものだが、彼らはすぐに対処してみせた。

「あ、うん、よくやつたなお前ら！だが、後衛組は少々やりすぎだ。次は魔石を残して回収することを考えてくれよ？……零もな。あれじやあ魔石が碎けちまう」

「うつ、はい……」

「わかりました。……魔石を残さなきやいけないのは面倒ね」

香織たちが反省するなか、その光景を他の生徒たちと同じようにみていたハジメはふと呟く。

「これ、僕たちいる……？」

その呟きは、ほかの生徒たちほぼ全員が思つたことであった。

「ああ……流石です、零先輩……お姉様……」

そして、己の剣を振り血を払う零の姿を、美穂は恍惚の表情で見ていた。

彼らはするすると迷宮を下る。

階層が浅いことと、迷宮のマッピングが完全に終わっていることで想定外の事態が起ることもなく、順調なペースで進めていた。

生徒たちは交代しながら戦闘を行う。それはハジメも例外ではなく、彼は風華は絶対としてその他のメンバーに美穂を加えた三人のチームを組んでいた。

他の生徒たちは光輝たちのように五、六人のパーティを組んでいるが、何故ハジメたちだけが少ないのか。その原因は、ハジメの戦闘スタイルにある。

ハジメが基本としようとしているのは、風華の支援で強化された鍊成による地形操作だ。そのため、後衛に然程影響は無いが、前衛職からすればいつ足場が無くなるかわからないという恐怖が付きまとった。接近戦の最中に地面が突き出したり、穴が開いてくるのはたまつたものではない。

そのため、今回の訓練では、ハジメ・風華と組むのは、両者と特に親しく、なおかつ前衛職である美穂が組むこととなつた。

「それじゃあ、さつきと同じようにいこう

「……ん」

「りょーかいです」

オルクス大迷宮第十五階層。

本日何度目かのハジメたちの手番が回ってきた。

相手はこの階層の主であるヒュージヘッジホッグと呼ばれる魔物だ。全身を被う無数の針はとても硬く、丸まつて転がる攻撃は単純に厄介だ。それに加えて、針を飛ばす攻撃も所持しているらしい。ここまで戦つていた敵とは違う強敵だ。

「グオオオオオオ！」

ヒュージヘッジホッグが敵を見据え、威嚇の雄たけびを上げる。その最中にハジメたちは可能な準備を進める。

「——支援」

「えーと、何だっけ。あ、そうだ。敵を碎き、なぎ倒す力をここに。重撃」

美穂が前衛、残る二人が後衛に配置する。風華がハジメに支援を、美穂がどうでもいいように強化魔法を自身へと付与する。

実際のところ、美穂の魔力の伸びは本当に微々たるものであった。それでも、魔力が無いわけではないから最低限は習得しておけと言われ、何とか強化魔法を一つ辛うじて覚えたくらいだ。

ヒュージヘッジホッグとハジメたちの距離は離れている。ヘッジホッグは身体を丸めると回転を開始し、そのまま突撃を仕掛ける。美穂へ迫る針球。しかし、美穂は焦ることなく構える。

「鍊成！」

ヘッジホッグが戦闘開始位置から半分程進んだところで、四方八方を岩がせり出し、ヘッジホッグを捕らえる。ヘッジホッグはその場で岩を削りながら回転するが、削られるたびに鍊成で補強される。やがて、回転力が尽きた針球は動きを止めた。

ハジメたちのチームの戦い方がこれだ、ハジメが風華の支援を受けたまま鍊成の地形操作で敵を拘束する。そして、隙が生まれたところを美穂が直接トドメを刺す。場合によつては、ハジメの鍊成で敵を直接倒すこともある。

弱点としては、魔法属性の攻撃が行えないことと、美穂のように壁となる前衛職が必須なことだろう。メルドの話しでは、魔法攻撃のみが通用する魔物もいるらしい。この三人でそれらを相手にする場合は圧倒的に不利だ。

他にも、鍊成を行う際の地質も関係はあるだろうが……それらはパーティメンバーを変更すれば済む話しだ、今回の訓練では、ハジメたちの戦闘スタイルを他の生徒たちに見せ、連携のイメージをつかんでもらうことメルドは考えていた。

体勢を整えようにも固定されてヒュージヘッジホッグは動くことができない。どうにかしようと球体がもがく姿はかわいらしいところ

ろがあるが、その姿を美穂は見逃さない。

「ソイヤツ！」

美穂は真上から拳を叩き込む。その攻撃は硬い針をものともせず碎き、柔らかい身体に直接ダメージを与える。くぐもつた悲鳴が針球から漏れる。

「そんじゃあ、お願ひします！」

「わかつて。鍊成！」

一発入れた美穂は即座に離脱。それを見たハジメは、動けない針球に今度は真下から岩を突き出す。

「グエアあ！」

上から強い衝撃を入れられた拳句、下からも重い衝撃を入れられたヒュージヘッジホッグは空中に飛ばされ、体勢を崩す。

それを、美穂は、ハジメがヘッジホッグを囮うときに作った足場から飛び上がり、襲い掛かる。

「これでえ……」

襲い掛かる美穂にヒュージヘッジホッグは気づいたがもう遅い。初見殺しと呼ばれる針飛ばしも腹部を晒しているせいで射線に入らない。

「どどめえ！」

見事な空中回し蹴りがヒュージヘッジホッグの腹部へ突き刺さる。その衝撃によりヒュージヘッジホッグは壁まで飛ばされ激突し、物言わぬ骸となつた。

階層主をものとしない彼らに、生徒たちは唖然とする。

敵を倒した美穂がニコニコ笑顔で手を振る。

ハジメたちもそれに合わせて、手を振るのだつた。

迷宮の罠

オルクス大迷宮第二十階層。

生徒達は、今回の訓練の目的階層にたどり着いた。

「よし、ここが二十層の入り口だ。朝のミーティングのとおり、この階層の一番奥までたどり着くことで今回の訓練を終了とする。油断するなよ、無事に帰るまでが訓練だ」

これまで、ほとんどの魔物を一蹴してどことなく楽勝ムードが漂つていた一同は、その言葉に気を引き締める。

マツピングが完了しているとはいえ、迷宮内が危険なことに変わりはない。それに、そろそろトラップの内容が凶悪になつてくる頃だ。移動する度に騎士団員が前もってトラップの確認をしていたおかげで一度も引っかかるずに済んでいるが、何が起こるかはわからない。「みんな……こも無事に乗り切ろう。誰一人欠けずに帰るんだ！」

メルドに続き、光輝の鼓舞が皆に響く。彼の高いカリスマ性のおかげで彼らの士気は上々、これだけ高ければ魔物に遅れを取ることはないだろう。

全員が無事に帰る。これはハジメも同じ気持ちだ。

「風華、頑張るよ」「……ん」

風華がハジメの手を握る。そこに不安感といった感情は無く、絶対的信頼があつた。

本日最後の迷宮攻略が始まった。

第二十階層は入り組んだ細い通路が広がる迷路だ。通路の幅は二、三人が通れる広さがあるところもあれば、一人づつしか通れないような狭い道を通りぬく必要があつた。

戦闘になれば武器も満足に振ることが出来ず、陣形を組むことも出来ない。加えて、分帰路がいくつもあり、入念な準備をしなければ、道に迷いやがて食糧が尽きてたちまち帰らぬ人となるだろう。

自由に好きな場所に転移する魔法が神代には存在したらしいが、現代では失われた技術だ。転移するようなことがあれば、それはほぼ100%が迷宮のトラップだろう。そのため、迷宮から帰るために歩いて戻るしかない。

また、食糧が無いからといって魔物の肉を食すこともアウトだ。魔物の肉には魔石が変質させた魔力が浸透しており、それは人間にとつては猛毒だ。食べれば身体が内側から崩壊し、死に至る。

道中のメルドの解説では、まだこの階層では通路に魔物は出現しないらしい。そこは本当に幸いだ。そのため、この階層最大の敵は、先述のとおり迷宮の複雑な構造だろう。

一行は狭い通路をゆっくりと進む。大人数で進行しているおかげで、遅々として進むしかないのだ。

同じような風景が続いていることで、生徒たちはどんどん疲労がたまっていく。小部屋に着くたびに休憩を取っているが、そろそろ限界だろう。

ステータスがいくら高くても、メンタル面が直結しているわけではない。

「この先がこの階層の最奥だ。次で最後だ、気張れよ！」

小部屋に着いて休憩する生徒たちにメルドは言う。その言葉に彼らはギリギリ残っていた気合いを入れ直す。

「風華、大丈夫？ ほら、水いる？」

「……ん」

床に座り込む風華にハジメは水筒を渡す。彼女はこくんと頷きそれを受け取る。

水筒を傾け、こくこくとゆっくり水分を補給する風華。彼女の顔は疲労が隠せず、横になればすぐにも寝れそうだ。迷宮内部の空気の重さがそれを増長させる。

彼女は思う。帰つたら今度はちゃんと体力づくりをしよう、と。

実際、風華はここまで何度もハジメの背中のお世話をなっている。

第八階層までは自力で歩いていたのだが、一度背負われてからは徐々に間隔が短くなつていった。

女子生徒であろうと、ここまで道のりは風華以外全員がしつかり自分の足で歩いている。ステータスの恩恵もあるが運動系ではない香織ですら、それは同じだ。

たつた一人背負われている恥ずかしさはあるが、風華はこの際にハジメの背中を存分に堪能していた。

風華は、すぐ隣で休むハジメを見る。

ウォルペンの下で肉体労働を続けていたためか、ハジメの身体には、トータスに来る前と比べると筋肉が程よくついていた。この調子で成長すればいい感じの細マツチヨもありえるだろう。

背負われたときにつつそりと胸筋や二の腕を触つて確かめたが、兄の肉体は少しガツシリしてきた。昨日も思つたことだが、あの強くも優しさを感じる力で撫でられたときの心地よさは今まで以上だ。

もしも、あの腕に抱きしめられたら、潰されたら、どれほど気持ちよいだろうか……？

「……フフツ」

さりげなくハジメにもたれかかる。どうした？と気にかけてくれる兄。

「……あと少し。がんばろ」

「ああ、頑張るぞ」

今は、もたれかかるだけだ。

(いいなあ)

それを見ている香織は、やはり風華をうらやむ。

彼女の位置は集団の先頭の部隊。ハジメたちの位置は最後方と言つてもいい。両者の位置は両極端だ。

本音、というか当然とも言えるだろうが、彼女もハジメの背中のお世話になりたかった。

しかし、自分は生徒たちを導く光輝のパーティメンバーだ。生徒たちの中核である自分が隊列を乱すのが不味いことは彼女も理解している。疲労具合こそ、同じ後方メンバーの恵理どどつこいどつこいだがステータスの恩恵で風華程ではない。

それでも、風華が羨ましい。自分もハジメに甘えたい。

「……いいなあ」

「口から洩れてるわよ」

彼女も思つていなかつたのか、隣にいた零に指摘されハツとなり口を手で覆う。

キヨロキヨロと首をなるべく動かさず、目だけで周囲を確認する。他の生徒たちは、各自の休憩に手一杯で香織の呟きに気づいた者はいないようだ。ほつと胸をなで下ろす。

最も、香織がハジメに抱く気持ちにはほとんどのクラスメイトが知つてゐるのだが。

「まあ、気持ちはわかるわ。それでも、ここは何があるかわからない迷宮よ。今は抑えてちようだい」

「う、うん。そうだよね。……でもなあ」

油断するな、という零の忠告。香織もそれは理解してはいるが、どうしてもハジメたちが気になつてしまふ。

そういう零は、壁にもたれかかるように座り、じつと通路の奥を見据えている。剣を抱きかかえ、柄に手をかけておりいつでも抜刀が出来るように構えている。思えば、彼女は迷宮に入つてからずっとこの調子だ。

零はちゃんと休憩出来ているのだろうか。香織はそれを聞こうとした。

「休憩終わり！最後の部屋に行くぞ！」

そこで、メルドの号令が響き渡る。それと共に生徒たちは準備を始める。

「行きましょう」

そういうと零は立ち上がる。

その親友の姿を、香織は追うのだつた。

二十階層の最奥は、鍾乳洞のような柱が天井だけでなく壁からも生える複雑な地形だった。鍾乳洞の森とも呼べるかもしれない。この先が二十一階層に続いているらしい。

「!!皆、警戒するんだ！見えないけれど何かいる！」

部屋に入った瞬間、気配感知で何かを察したのか、光輝が鞘に収まつた剣に手をかける。

「光輝の言う通りだ。こここの魔物は擬態しているぞ！周囲を注意深く観察しろ！」

光輝だけでなく、メルドもそう言つたことで、生徒たちは警戒態勢に入る。

ハジメも、風華にいつでも支援を出来るよう手を握つてもらうことにした。

一行は警戒しながら鍾乳洞の森を進む。

そうしてどれだけ歩いたか。先頭を歩く光輝が剣を抜く。

「来るぞ、目の前だ！」

それと同時に、突き出た壁の一部が変色しながら動き出す。

敵の正体は、褐色の肌にゴツイ身体を持つゴリラだった。どうやらカメレオンのような能力を所有しているようだ。

「やつはロックマウントだ！あの腕に気をつけろよ」

メルドがそう言い切らないうちに、ロックマウントは光輝へと殴りかかる。すかさず龍太郎が前に出て突き出された拳を弾くが、光輝と雲は縦横無尽に生える鍾乳洞が邪魔で困ることが出来ない。

一方、ロックマウントも龍太郎を突破出来ずにいた。龍太郎は自分よりも大きい相手に、互角に戦っている。さらに、後方から強化魔法をかけられたおかげで、徐々にロックマウントを後退させる。

やがて、このままでは無理だと判断したのか、ロックは後方に飛び

上がり距離を取る。そして、後ろにのけ反るほど深く息を吸う。

その行動に嫌な予感を感じた光輝は距離を詰めようと足を前に出す。

しかし、ロックマウントは次の行動に移行する。

「グウガガガアアアアアアアアアア!!」

部屋全体が振動する咆哮が響き渡る。その威力は、最後方にいたハジメたちでさえくるものがあるほどなのだ。

固有魔法「威圧の咆哮」それが、この咆哮の正体だった。

固有魔法とは、魔法陣や詠唱を行えない魔物が一つだけ持っている魔法のことだ。今のように詠唱などが不要で即座に使用してくるため、魔物が油断ならない存在たらしめる能力だ。

この「威圧の咆哮」は、発する咆哮に魔力を乗せ、対象を麻痺させる能力だ。麻痺させる範囲はそこまで広くはないが、咆哮自体が後方まで届くほどの爆音もある。最前線で食らえればひとたまりもないだろう。

「ぐつ!?

「な、なんだこりやあ……」

「……ッ」

事実、前線にいた光輝たちは動けない。その様子を見たロックマウントは手近な岩を掴んで持ち上げる。

「ま、まさか……！ 風華、支援お願ひ！」

「ん！」

その行動から導き出される答えは一つ、あの岩を投げる気だ。それに気づいたハジメは、風華からの支援を受けて鍊成で壁を作ろうと考えるが、人壁が邪魔で前線に出れない。

「南雲先輩！ 三秒したらあたしの足元に足場！ 上へ！」

「ええ!？」

「いいから！」

焦るハジメに美穂から突然のオーダーが入る。

その意味を問いただしたいところだが、相手はもう投球モーションに入っている。聞いている暇はないだろう。

「ああもう！鍊成！」

ロツクマウントが岩を投げる。それは角度的に勇者パーティの後方メンバーを狙つてようで、香織たち目がけて飛んでくる。

ギリギリ麻痺の効果範囲外にいた香織たちは魔法で撃ち落とすと詠唱に入るが、それは予想外の光景に驚愕し、止められる。

飛んでくる岩が動き出す。それもまたロツクマウントだつたのだ。

「ヒイイ!?」

迫るロツクマウント。その顔はメスを喰らう獣のそれであり、女性としての危機を感じた彼女たちはおびえてしまい、魔法が発動されない。

そして、それは突如として軌道を変え、地面に激突した。

「あつぶな……投げられたのもあのゴリラとかありなの？」

激突させた者の正体は、後方からハジメの足場で飛び上がってきた美穂だつた。彼女は奥のロツクマウントが投擲したものを叩き落とそうと飛び出したのだが、それが別のロツクマウントだとは彼女も思わなかつたらしい。

落とされたロツクマウントは動くことが出来ない。そして、その隙を逃さず向かう者がいる。

「死になさい」

白刃一閃。零が振るつた刃は魔物の首と胴を斬り離す。切断面から吹き出た血が彼女を赤く汚し、その臭いに零は顔をしかめる。

「貴様……よくも香織達を……許さない！」

そして、ここにも怒りに震える若者が一人。香織たちがやられかけたことでキレた光輝だ。

彼は詠唱を始め、聖剣に光が集まつていく。

「——天翔閃！」

光輝が剣を振ると、光が軌跡を描いて飛んで行く。その光は逃げ出そうとするロツクマウントを切り裂き、壁まで巻き込んで崩壊させたところで止まつた。

「ありがとう美穂ちゃん。おかげで助かつたよ」

「いやいや、何でもないですよ」

光輝が、考えなしに大技を使い、メルドに怒られている中、香織は美穂に礼を言う。

「あれ見て！何か光つてる！」

崩落した壁を見ていた鈴が、土煙の中で何かを見つけた。声に釣られて全員がそこを見やると、青白く発光する水晶が壁から咲いた花のようになっていた。

その輝きにハジメは見覚えがある。ウォルペンの工房の一角に置かれていた石と全く同じものだろうか。

「確か……グランツ鉱石」

「ほお、よく知ってるな」

口から出たハジメのつぶやきをメルドは拾う。

「あ、はい。ウォルペンさんの工房に一欠片だけあつたんです。本来は鍛冶よりも贈り物とかアクセサリーに利用されることが多いとか……」

鍛治には使わなそだということはハジメも一目見てわかつた。なんでここにあるのかを聞くと、人からのもらい物らしい。

「贈り物があ……」

ハジメの説明を聞いていた香織は、その輝きに魅入られる。彼女もこういつたものに興味はあるのだろう。

そして、ちらりとハジメを見る。その熱のこもった視線は、残念ながら本人には気づかず、別の人物が気づいた。

そのハジメは、ふと疑問に思つていた。

あの鉱石、綺麗すぎないか？と

グラント鉱石の硬度はまだ知らないが、それにしたつて傷が無さすぎるのだ。あそこは光輝の放つた斬撃が直撃した場所だ。斬撃が届いていなかつた、と言えばそれまでだが、だとしても壁の崩落には巻き込まれるだろう。のような生え方ではどこか欠けても、というか

欠けていないとおかしい。

「……にい？」

檜山たちが鉱石の回収に向かい、それをメルドが止めるが彼は無視して崩れた壁をすいすい登る。

ハジメは考える。

「聖絶」という結界を張る魔法がある。それをかけられていたとしたら？何故？そう考えると真っ先に出る答えがある。

「罠……！」

「団長！トラップです！」

ハジメの声は、罠を見破る魔法道具「フェアスコープ」を覗いていた団員の声と重なる。

その警告は一足遅く、檜山の手はグランツ鉱石へと触れた。

直後、彼らの足元に魔法陣が展開される。

メルドの撤退という指示もむなしく、彼らは召喚された日のように光に包まれた。

奈落へと

光が晴れると共に、低空から地面に落とされた衝撃が彼らに走る。ハジメは、とつさに抱いていた風華を解放し、周囲を見渡す。そこは、巨大な石造りの橋の上だつた。橋、と言つても手すりも縁石も無く、ただの平べつたい石と言つてもいいだろう。橋の両端にはそれぞれ上り階段と奥への通路が確認できる。

周囲からの環境音は一切聞こえない。彼らの武具がこすれる音と、緊張の息が聞こえるばかりだ。

水音が無ければ、水辺で感じるような湿り気も感じられない。橋から落ちた者は地面に叩きつけられて赤い華を咲かせるであろうことを、周囲を警戒する彼らに想起させる。

あるいは、奈落の底へ誘われるか。

いずれにせよ、生きてる保証は無い。

「……にい、ここ……」

「風華、絶対に離れないで」

ハジメには一つの確信があつた。

ゲームにありがちな強制転移トラップ。まさか、転移しただけでおしまいなんてことはないだろう。

そう、この後よくある展開としては……。

「お前達、すぐにあの階段まで急げ！」

メルドの号令が生徒たちへ響く。彼らはそれに従おうと動き出すが、もう遅い。

橋の両端に魔法陣が展開される。

階段側からは、肉体を持たず骨だけで動く無数の魔物。

そして、通路側には、それらを呼び出した魔法陣よりはるかに大きい陣が展開される。

それは、四つの足で地を踏みしめる巨大な魔物だつた。頭部には炎を放つ二本の剛角。鋭い爪と牙を持つ巨体は、彼らがこれまで見てきた魔物よりはるか数段上の警鐘を頭に響かせる。

「炎を放つ角、鋭い爪と牙を持つ巨体。ま、まさか……ベヒモス……な

のか

巨大な魔物を見たメルドの口から、絶望の混じつた声がこぼれる。

「グルアアアアアアアアアアアア!!」

ベヒモスと呼ばれた魔物は、それに応えるかのように雄たけびを上げる。巨体に見合った通りの大きな咆哮は骨の魔物……トラウムソルジャーの方を見ていたものたちの視線を釘付けにし、恐怖を抱かせる。

その咆哮からいち早く我に返ったメルドは団員たちに指示を飛ばす。

「アラン！生徒たちを率いてトラウムソルジャーを突破しろ！カイル、イヴアン、ペイルは全力で障壁を張れ！光輝、お前達はアランと共に階段へ迎え！」

「メルド団長、俺たちもやります！あのでかいのが一番ヤバいはずです！だつたら……」

「ダメだ！あれば本当にベヒモスだとしたら今のお前達どころか俺でも勝てん！やつは六十五階層に巣くう魔物。かつて最強と言われた冒険者ですら相手にならなかつた化け物だ！さっさと行け！逃げるぞ！」

「それでも！」

メルドは光輝たちにも逃走の命令を下すが、光輝はそれに反対し残り、戦うことを決意する。

「まだわからんのか！お前達はここで死ぬわけには……ッ!!」

メルドと光輝の言い争いはベヒモスの突進によつて遮られる。

橋を激しく揺らし、突進するベヒモス。その突進は彼らとの間に現れた障壁にぶつかり、止められた。

「——聖絶！」

騎士団員たちが詠唱を終え、障壁が張られる。魔法陣は現状用意できる最高級のもの。さらには三人が同時に使用することでそれは絶対の防護となる。

ベヒモスと障壁が衝突し、今まで以上に橋が揺さぶられる。その衝撃でベヒモスの足元が粉碎されるが、魔物は突進することを諦めず、

再度突進を仕掛ける。

部屋全体に衝撃は再び走った。

「はああああ！」

美穂が放つ強烈な蹴りが、トラウムソルジャーの上半身を吹き飛ばし、動かぬ骨へと変える。

階段を目指す生徒たちは階段を目指して走る。

アラン一人では彼らの混乱を収めることは難しかったが、零と美穂の二大戦力が前に出て魔物を倒すことで道を切り開き、その道を生徒たちが続くことでどうにかしていた。

しかし、状況は良いとはとても言い難い。彼女たちは確かに強いが、広範囲を攻撃する手段を持つておらず、目の前の敵しか倒すことができない。そして、彼女たちが倒す間にも倒し損ねた魔物たちは襲いかかる。

二人としては、自分たちが道を切り開き、周りを囲もうとする敵を倒してほしかったのだが、そう上手くはいかず、統率の取れない彼らでは敵を倒しきれていない。

せめてこっちに光輝がいれば。今、彼が持つ統率力と広範囲の攻撃力が最も必要なのが、彼は依然として、メルドの元でござねている。この状況に気がつかない彼に零の心の中で苛立ちがつのる。

そうこうしているうちに、道の中ほどまで来たところで彼女たちが危惧していたことが起こる。

トラウムソルジャーたちに周囲を取り囲まれてしまつた。
「まずいわね……」

また一体の首を刎ねた零が言葉をこぼす。

統率力は最低、最高戦力である勇者パーティも、戦っているのは零のみで、香織と龍太郎は光輝の説得のためにここにはいない。

美穂が自分のどちらかが殿を務めるべきだった。そう後悔しても、今更遅いだろう。

トラウムソルジャーが一斉に剣を振りかぶる。

「鍊成！」

直後、橋の縁にいた骨の塊が彼女らの視界から姿を消した。

魔物たちを排除したのは、ハジメの鍊成による地形操作だった。ハジメは、橋に手をつき、地形を操作してトラウムソルジャーを滑り落とす。風華の支援を受けたそれは、瞬く間に魔物を排除していく、やがて両サイドにいたトラウムソルジャー全てが奈落の底へと落とされた。

これで、生徒たちを取り囲む魔物は前方と後方のみとなつた。

「はあ、はあ、はあ……」

ハジメは肩で息をする。支援込みでもこの範囲の鍊成は厳しく、加えて風華がこの緊迫した状況で支援の強さの加減を少し多くしてしまい、それがハジメの身体に負担をかけていた。

「はあ、はあ、みんな、これで敵は前と後ろだけ！今だよ！」

風華から魔力ポーションを受け取りながら、息も絶え絶えにハジメは叫ぶ。

眼前の脅威が急激に減ったおかげか、生徒たちも次第に統率力を取り戻していく。

「……にい、ごめん」

ポーションを飲むハジメに風華が謝る。ハジメはそれに対して何でもないと軽く手を振る。

「大丈夫、それよりも次を頑張ろう」

「……ん」

トラウムソルジャーがどんどん倒され、残る脅威はあの**べ**かぶつだけだ。

そう考えていたハジメの思考を、迷宮の惡意はあざ笑う。

再び展開される魔法陣。

その中から現れたトラウムソルジャーの群れに、生徒たちはまたもや絶望の淵へと落とされた。

(やつぱり、天之河くんが必要なんだ……！)

そう考えた彼は駆け出す。天之河光輝の元へと。

一方、ベヒモスを食い止めるメルドたちは、そろそろ限界を迎えるとしていた。

障壁には至るところに亀裂が入つており、それを補強するためにはメルドと、それを黙つて見ていられなかつた香織がフォローに入つている。魔力の量が生徒たちの中で上位にいる香織がいるおかげで、メルドが想定する以上に障壁は維持できているが、破られるのも時間の問題だろう。

「ダメ……そろそろ、限界……！」

「香織！俺も手伝う！」

「んなこと言つてる場合か光輝！今の俺たちじやこいつの相手はできないつて言つてるだろ！」

香織の悲鳴に、光輝が助けに入ろうとするが、それを龍太郎が止めようとする。

普段は光輝に従つてゐる彼が反対するのは珍しい。

「でもそれじゃあメルドさんたちが！俺は誰一人犠牲を出してはいけないんだ！」

「それでもだ！なんのためにメルドさんが俺たちを逃がそうとしてるのかわからねえのか！」

残ることを主張する光輝と逃げることを主張する龍太郎。二人の言い争いは平行線を辿る。

勇者は想う。誰も欠けず、笑顔でいることが自分の正義だから。

拳士は知つてゐる。勝てないとわかっているモノと戦うことの恐怖を。

そして、第三者の声が両者の間に入る。

「天之河くん！」

その正体はハジメだつた。その後ろには、ハジメを追いかけてくる風華の姿も見える。

「な、南雲!?なんでこんなところに……」

「ぐだぐだ言つてないで早く戻れ！」

光輝の言葉を遮り、ハジメは声を荒げて生徒たちの方を指さす。

そこには、多数のトラウムソルジャーに囮まれながら戦うクラスメイトの姿があつた。僅かに混乱が治まつたおかげがある程度戦うことができるが、物量に圧されてじり貧だ。

「あれがまだ見えないか!?みんなが無事に帰るためにリーダーの君があそこに必要なんだ!」

それを見た光輝は呆然とし、すぐにはつとなつて自分の役割を理解する。

「お前達、下がれ！」

しかし、それを理解したところで判断が遅い。

メルドの怒号と共に障壁が完全に破壊される。その衝撃がその場にいた彼らを襲う。それに吹き飛ばされた彼らは、丁度風華がいる位置まで転がつていった。

「いい！」

風華はハジメに駆け寄り、抱き起こす。幸い、ベヒモスから一番離れていたからか彼はすぐに立ち上がることが出来た。

しかし、最前線で障壁を張つていたメルド達は傷を負い、すぐには動けなさそうだ。とくに、メルドはとつさに香織をかばつたのでその分傷も多い。

結果的にベヒモスから距離を取ることが出来たが、状況は全くよくなつていらない。ベヒモスの巨体からすれば、数歩歩いて踏みつぶせるだろう。

「どうすれば……どうすればやつを止められる……!?」

「……僕があいつを押さえる」

「南雲くん!？」

眼前の絶望に光輝の思考が混乱状態に陥りかけたとき、ハジメは己が足止めすることを提案する。その自殺行為とも呼べるようなことに、香織は思わず叫ぶ。

「な、何を……」

「南雲くん死ぬ気なの!?私との約束忘れちゃつたの!?」

光輝の疑問の声を遮るように、香織はハジメに詰め寄る。その目には涙が浮かんでおり、ここが死地真っ只中でなければドキッとするも

のだが、ハジメはどうにか冷静に香織の肩をつかみ、目を合わせる。「僕は死ぬ気も無いし、忘れなんかするものか。白崎さん、理由ならちゃんとある」

そう言つてハジメはベヒモスを見やる。

「多分メルド団長たちに障壁を張る力は残つてない。天之河くんたちにはみんなのところへ行つてもらわなきやいけない。だつたら、僕が鍊成であいつの足を止めるしかないんだ」

「じゃあ私も残る！ 私なら障壁を張るだけの魔力は残つてるよ！ だから……」

香織は反対するが、ハジメは首を横に振り、言葉を続ける。

「白崎さんにはみんなを回復させてほしい。僕たちの中で、白崎さんが一番回復魔法を上手く使えるんだ」

「でも……」

彼女はそれでもと言葉を続けようとする。しかし、それは背後からの振動に遮られる。

「南雲……頼む」

メルドと一人の団員に肩を貸す光輝が近寄つてくる。すぐそこには龍太郎が光輝と同じようなことをしている。

彼女だつてわかっている、選択肢がその一つしかないと。

香織は、ハジメに抱き着く。唐突に来た女の子特有の柔らかさにハジメは流石にドキッとしてしまう。

光輝たちは撤退の準備を進めている。もう時間はない。

「香織！ 早く！」

「……約束、もう一つ増やしてもらうからね」

「……わかつた」

その言葉を聞いて香織は抱擁を解き、最後に「死なないで」と言うとクラスメイトの元へと向かつた。

「……にい」

「フウも、早く逃げるんだ」

「……嫌。あと、帰つたらお話し」

「……はい」

風華からの冷たい視線に、ハジメは頷くことしかできなかつた。最も、風華がいなければ無理だと思つていたのだが。

「それじゃあやるよ、全力でお願い！」

「ん！」

ハジメは地面に手をつき、風華がその背に手をそえる。

二人のいつもの構えに、ベヒモスは構わず突進を仕掛ける。

そして、ベヒモスがハジメたちの目前まで迫つたときだ。

「鍊成！」

ハジメの詠唱と共に、ベヒモスの身体はずぶり、と橋に飲み込まれていつた。

ハジメは、橋の強度を変化させることでベヒモスの足を埋める。ベヒモスは脱出しようともがくが、それは底なし沼のようで、もがけばもがくほど自重でどんどん埋まって行く。

しかし、階層主はただ埋まつているだけではない。

息を吸う動作をするベヒモス。その動きに嫌な予感がしたハジメは、即座に壁を作り、二人はとっさに耳を塞ぐ。

その後、魔物は咆哮を上げた。

「グルアアアアアアアアアアアアアア！」

超至近距離での爆音。それは先ほど戦つたロツクマウントの比ではなく、壁越しで耳を塞いでいてもなお鼓膜が破れたのではないかと二人に錯覚させるほどの威力だった。

地面から手が離れ、鍊成が止まつたところでベヒモスは脱出しようと自らを拘束する橋に亀裂を入れる。その音を耳で感じた二人は、急いで鍊成と支援を行い、再びベヒモスを拘束する。

他の生徒たちがどうなつたのか、確認する暇などなく、二人は拘束を続ける。

そして、この攻防が何度も繰り返され、二人の魔力ポーションが尽きかけたときだつた。

「もう大丈夫だ！二人共、急いで戻れ！」

メルドからの声が届く。どうやら、時間稼ぎはこれで終わりらしい。

その頃には、ベヒモスの身体は顔を含めた半分ほどが橋に埋まっていた。普通の魔物であればここまでやればそう簡単には出れないだろうが、相手が相手だけにハジメは油断することなく頭部を埋める部分を特に強くする。

そこまでしてから、ハジメは風華の手を引き走り出す。その直後、ハジメの頭上を越え、数々の魔法攻撃がベヒモスに殺到する。

これならいける。

走りながら振り返りその様子を見てハジメはそう確信する。後ろを振り向く。それが、彼が犯した失態だった。

ベヒモスに殺到する火球の一つがハジメへと向かう。それは、途中で風の魔法を取り込み、巨大な火球へと変化する。

ハジメがそれに気づいたのは、己へ迫る熱が強くなつたときだつた。

「え——」

ハジメへと迫る火球。回避はどうやっても不可能だ。

しかし、それに当たつたのはハジメではなく、彼を突き飛ばした小柄な少女であつた。

燃え上がる少女は、魔法が直撃した衝撃で橋の外へと叩き出され

る。

「風華あ！」

その後を追うように、少年は橋の下に広がる奈落へとその身を投げた。

直後、ベヒモスは頭部が埋まっていてもなお、鬱憤を晴らすように切り札である角の赤熱化を発動させる。

と落ちていった。

この日最大の戦闘は、少女の悲鳴で幕を閉じた。

奈落の底

オルクス大迷宮第六十五層……からさらに下層へと至る大穴。

最後に誰かが落^ハ下して以来、しばらく来訪者のいなかつた大穴を、二人の人物^{風華}が大量の瓦礫を伴つて落ちていた。意識無く燃え上がる者とそれを必死に追う者。

(くそ二屢かない……!)

落下する身体を空気か叩き 声が出ないハジメは炎に届かないことに焦る。先に落下したのは風華であり、このままではどうやつても届かないだろう。重力を操る魔法でもあればこんな距離なんてすぐに縮められるのだが、そんなもののハジメの知識には無いし、あつても使
用できるかとても怪しい。

(どうやれば……ん?)

彼の視界にあるものが目に入る。それは、自分たちと同じく落下する数々の瓦礫だった。そこで彼の頭にアイデアが浮かぶ。

必死に手足を動かし、どうにか瓦礫に接触した彼は身体にかかるGで潰れた身体から声を出して詠唱を唱える。

—— 錬成…… !】
直後、錬成によつて変形した瓦礫はハジメの身体を勢いよく射出し
た。

先ほど以上に身体にかかる負担に思わず呻く。しかし、それに見合
う成果は獲得できた。

燃える坂をノシノは抱き寄せる そして 离さないよのはしごかりと抱きしめる。

二〇

風華を燃やす炎がハジメの身体に容赦なく燃え移る。守護技能の発動判定に引っかかったのか、ハジメの耐久や魔耐が上昇するが、それは炎が生み出す熱と、燃え上がる物からまでは守ってはくれない。それは風華も同じだつた。彼女の高い魔耐があつてなお、剛火球を防ぎきることは叶わず、全身を被う炎が肌を、毛髪を焼き、ダメージ

を与えている。

風華を抱きしめたハジメは、自分を下にするように身体を反転させる。そうしたところで二人は流れていた滝に突入し、ハジメはそこで意識を失った。

その頃、奈落より上では、残された者たちが迷宮の内部を駆けていた。ハジメと風華が落下したことのショックで倒れた香織を鈴と恵理が二人掛かりで運び、メルドたち高レベルの騎士たちが前衛、光輝や零といった生徒たちの中でステータスの高く、まだ戦える者たちが取りこぼしを相手していた。

休みなく駆ける彼らに交じり、剛火球を作り出した彼は、笑い転げたい衝動を抑えて、表情を悟られぬよう顔を俯かせる。

ハジメたちが孤立し、なおかつ不慮の事故が起きて仕方ないと判断されるシチュエーションになつたことで即興で思いついた作戦だつたが、上手くいった。彼が何度も、何度も脳内でハジメを殺すイメージしていたからこそその成果だろう。

オルクス大迷宮に挑むまで、彼はストレスを満足に発散できず、ため込んでいた。香織に好意を寄せられて、見てるだけでムカついてくる南雲は訓練場での事故が落ち着いてからずつとどつかの工房に引きこもりっぱなしで邪魔のしようがなかつたし、ならば自分に一撃かましやがつたクソガキはと言えば、常にもう片方のクソガキか八重櫻が常に傍にいるせいで手の出しようがない。

あんな訓練だけで別次元の殺し合いをやりだす奴らを真正面から相手するなんて死んでもごめんだ。

目の前にいるのに何もできない苛立ち。それを代わりにいた根暗野郎（名前は忘れた）にぶつけてもそれは晴れない。やはり、恨みの対象に直接ぶつけなければ意味はない。

そんなときに天から舞い降りたような絶好のチャンス。自分が招いたおかげでもあるため、クラス中からはヘイトを集めていそうだが、土下座の一つでもすればあの勇者は許してくれるだろう。

そして、あいつらは奈落の底へと落ちていった。最初は南雲を燃やし落とすつもりだったが、クソガキがかばつたおかげで外してしまった。まあ燃え上がる様は爽快だつたし、南雲もその後を追つて落ちていつたため結果的には良いだろう。

彼にとつての幸運は二つ。一つは、彼の適正魔法が風であつたこと。風魔法最大の強みは火や水と違い、視認しづらいことだ。加えて、適正があることで他の魔法よりも扱いやすかつたおかげで、剛火球を作り出すことが出来た。火球は他の奴らも放つていたため、適正が風の自分は早々疑われることはないだろう。

もう一つは、化け物コンビ^{美穂と零}がベヒモスへ魔法攻撃を放つ彼らをトラウムソルジャーから守るために、それらの対処に集中して、彼らを見ていなかつたことだ。もし、見ていたとしたらばれて殺される未来しか見えない。魔法知識の無い美穂が見ていたとしても直感で殺されうるだろう。

やつた。自分は憎いやつらを排除出来たのだ。一瞬しか見えなかつたが、熱に苦しむクソガキの表情と、それを必死になつて追う南雲の表情は最高だつた。

しかし、奴らが落ちたあとの香織の悲鳴。あの悲鳴から伝わってくる悲壮感だけが気に入らない。

自らが好意を寄せる少女の悲鳴が頭の中で再生され、彼はそれまでしていた笑みを抑える表情が無になることを感じた。

「ガハッ！」

後頭部と背面に突如走った衝撃により、ハジメは意識を回復させた。周囲は暗く、流れる滝の水音が周囲に響いており、腕の中にはしつかりと抱きしめられる少女の姿が確認できる。

痛みに呻きながら上を見やると、流れ落ちる滝がそこにはあつた。どうやらあの水流に運ばれてここまで来たらしい。

「つ！ 風華！」

彼は腕に抱く少女を見て言葉を失う。意識を失っているが、辛うじて息はある。落下の衝撃も、ハジメの守護技能が全て受け止めたため、落下によるダメージは無いだろう。

しかし、まだ無事と言えるのはここまでだった。

全身は酷い火傷跡に覆われており、焼け溶けた服が肌に張り付いているところもある。長く、美しかった黒髪は燃え落ちてチリチリになってしまい、髪の長さも長くて今までの半分といったところだ。呼吸もしているとはいえ呼吸音が怪しい。

その少女をハジメは優しく、それでも力強く抱きしめる。流れ落ちる涙が少女の焼けた肌に落ちる。

美しかった少女の面影はどこにも残つていなかつた。

それでも、生きている。生きてくれている。

それだけでもハジメには嬉しかつた。

ハジメは風華を背負い、奈落の底を歩き進む。

ハジメの荷物は、滝に流されても、さらにそこから落下したにもかかわらず幸運なことに残つていた。中の携帯食糧などはボロボロだし、水を入れていた水筒は砕けて使いものにならなかつたが、何もないよりはましだろう。一方、風華の荷物は炭となつて焼失してしまつていた。食糧は一人分、助けが来る保証はないが全てを風華に与えればどうにかなるだろう。

滝に流されたのは本当に幸運なことだつた。それが無ければ風華は焼死していたし、自分も守護技能込みでも落下エネルギーに耐える

ことが出来なかつただろう。

今、彼が求めているのはとにかく絶対に安全だと言えるような休憩場所だ。この奈落の大迷宮にそんなところがあるかどうかは疑わしいが、探さなければ、見つけなければ風華が危険だ。

彼は魔物を警戒しながら進む。やがて、複数の道に分かれる分岐点に突き当たつた。さて、どの道を進むか。正直どれを選んでも未知なことに違いはないのだが、彼は一瞬だけ考える。

直後、ハジメはどの道を選ぶでもなく、通路の端に身を隠した。
(何かいた何かいた何かいた!?)

視界の端で何かが動いた気がした。風もないここでそんなものは魔物以外ありえないだろう。それはすぐに姿を現した。ぴよこぴよこと跳ねる一羽のウサギ。しかし、その姿は人型とウサギの中間のようで、大きさも地球のものよりもはるかに大きく、地を蹴る発達した足は赤黒い色に染まっている。

見るからにヤバい魔物。そもそも、ここはベヒモスがいた第六十五層よりもはるかに下だ。下手したらベヒモスよりも強いやつがうじやうじやいることも考えなければいけないかもしれない。

ウサギはその場で何かを探るように鼻を動かし、周囲を見渡す。その様をハジメはじつと息をひそめて観察する。理想は、奴がどこかへと去ってくれることだが、いったいそれには何分何秒待てばよいのか。

やがて、通路の奥からウサギへと一匹の白い狼が襲いかかる。更に二匹、三匹目の狼が時間差をつけてウサギへと飛びかかつた。明らかに劣勢のウサギ。捕食されるのは時間の問題だろう。しかし、ウサギは焦ることなく、不気味な足で地を蹴り飛び上がる。

そして、地球のウサギが发声しそうな可愛らしい声で一鳴きすると狼の頭部を蹴り飛ばし、狼の首をへし折り絶命させる。

ただでさえ地球の食物連鎖からは考えられない光景にハジメは目を疑うが、更に驚愕する光景を彼は目にする。

空中で狼を蹴り飛ばしたせいで、身動きが取れないはずのウサギはそのまま何もない空間を蹴り飛ばし、身体の向きを変える。そして、

残り二匹いる狼を瞬時に一匹目と同じ末路を辿らせた。

空中蹴りを披露したウサギは満足気に着地した。あまりの光景に某大乱闘じやねえんだぞ、と毒づきたい気持ちを抑え、ハジメはじつと動かない。動けば、ウサギに自分がいることを悟られては自分はもちろん風華だつて一撃だ。

そう思つた直後だつた。

「…………う」

背中の少女からかすれた、けれどもしつかりと聞き取れる呻き声があがる。その声があがつたところを聞き逃すウサギではなく、ハジメは自分の心臓が氷つく錯覚に囚われる。

最愛の少女の最悪のタイミングの目覚めだつた。

ウサギの赤い目がハジメを捉える。その視線をハジメはただ受け止めることしかできなかつた。

両者の間に沈黙が訪れる。

「…………に……い…………どう、なつ」

そこへ、風華が状況を把握しようと焼けた喉から絞り出すような声で沈黙を破る。

直後、ハジメは風華を抱きしめて転がり、そこへウサギの足が地面を碎いて突き刺さつた。

ハジメはそれを確認することなく一つの通路をひたすら走る。途中で壁を鍊成して道を塞ぐが、それもウサギの障害にならないのか、破碎音が後ろから響く。

「…………ッ！ッ！」

「口を閉じて！舌噛むよ！」

何かを言いたげな風華が必死に声を出そうとするが、ハジメはそれを制し、走り続ける。守護技能でステータスが上昇していなければ、とつこのとうに二つのミニチが大小そろつて出来上がつていただろう

う

壁を鍊成し、碎かれる。それを繰り返す鬼ごっこは、次第に鬼ウサギが追いついてきた。

破碎音はすぐそこだ。ここまでか。そうハジメが思つたとき、突如

壁を破碎する音が途絶えた。

「何だ……？音が、止んで」

「にい逃げて!!」

思わず足を止めたハジメは、風華の声と共にその判断が間違いだったことを理解する。

最後の壁が粉碎、いや、切り裂かれる。

切り裂いた主は、ウサギではなかつた。

そこにいたのは、例えるならば熊が一番適切だろう。両腕に長い爪を持つ熊は、ハジメたちを追つていたであろうウサギを咀嚼しながらこちらを見やる。赤く染まつたウサギを飲み込んだ熊は、ハジメたちに向けて腕を大きく振りかぶつた。

ハジメはとっさに風華をかばい飛びのく。

直後、攻撃が当たつたわけでもないのにハジメの左腕がキレイに切断された。

「が、ああああああああああああああああああああああああ!!!!」

それは、彼の人生で一度も味わつたことのない痛みだつた。

自身を襲う予想外の激痛に、ハジメは地面をのたうち回る。それでも風華を離そうとしないのは兄としての矜持だろうか。

「支、援……！」

かすれた声で風華がハジメに支援をかける。最初に支援を行つたときのような、加減無しの魔力がハジメを襲う。その支援に、ハジメは反射的に地面に鍊成をかけた。

彼が心からイメージするのは、ここから逃げること。すぐさま彼らの直下に穴が作られ、二人は落ちる。

暴走した鍊成は、彼の心情を体現するように、穴を塞ぎ、別の穴をいくつも開ける。そのうちの一つを、ハジメは左腕を襲う激痛に耐えながら這つても進んでいた。

（腕が何だ、風華は、もつと、苦しい思い、をして、いたんだぞ）

（耐えろ、耐えろ、耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ！！）

必死になつて進む彼は、義妹のその身を案ずる視線に気が付かない。激痛に苦しむ彼の顔を、彼女は直視できなかつた。

「……ごめ、な……い。……んな、さい……ごめんなさい」

かされた声で風華の口から言葉がこぼれる。

逃げている道中で彼女は理解した。自分があそこで目覚めなければこんなことにはならなかつたと。

やがて、小さな空間に彼らは出る。霞む視線で辺りをハジメは見やる。

周囲からは水がちよろちよろと流れるような音しか聞こえず、ここに入る道も、ハジメが作った穴しかなさそうだつた。

自分が求めた安全地帯がここにあつた。

そのことを理解した彼は張り詰めた緊張と、意識が遠くなつていくことを感じた。

傍らの少女が、自分のことを何度も呼んでいる気がした。

奈落のひと時

「に……い……」

前にのめり込むように倒れるハジメを、風華はとっさに支えようとする。しかし、小さな彼女ではハジメを支えきれず、ドシャツともつれるように地面に倒れ込む。

「あギッ……!!」

地面に叩きつけられた衝撃とハジメの力の無い身体の重さが、火傷だらけの彼女に痛みを与える。喉を焼かれ、悲鳴も満足に出せない彼女は、その痛みにかすれた悲鳴を出し、もがき続ける。

やがて、痛みに少し慣れてきた頃、風華は覆いかぶさるハジメの身体を見た。

自分の炎でところどころ焼けた服から露出する肌は、自分程ではないが火傷跡が見える。切断された左腕からは今もなお、赤黒い血を彼の身体から流し続ける。他にも、身体中の至るところに擦り傷や切り傷、打撲の跡など、彼の身体は満身創痍といつても過言ではなかつた。そして、全てがぼやけて見える。どうやら、自分の視力も、失明とまではいかないが、ほぼ機能していないらしい。

「…………ッ!? ゲホッ！ ゴホッ！」

治療しなければ。そう思った彼女は治癒魔法の詠唱を唱えようと口を開く。効果があるかはわからないダメ元の挑戦だった。しかし、彼女の口からは血液混じりの咳しか出ない。

(こんなとき、あの女なら何とか出来るのかな……)

治癒師である香織ならば、風華が使う治癒魔法よりも効果は大きいし、今の状況でも詠唱が少ない分、風華より唱えやすいだろう。しかし、今この場に香織はいないし、自分では唱えることも出来ない。物資もほとんどが失われている。このままでは兄も自分も助からないだろう。

風華はこの絶望的な状況に、気が遠くなつていくのを感じた。

「ああ……」

全身から力が抜けていく。兄の身体がより一層自分に沈み込んで

いくのを感じる。その重さと新たな痛みは風華の身体にどこか心地よさを与えていた。

兄の腕の中で死ねる。最愛の人と二人きりで静かに死ねる。絶望の中の唯一の希望に、彼女が目を閉じ、その身を委ねる。

そこでようやく、ちよろちよろと水が流れる小さな音が彼女の鼓膜を叩いていることに気づいた。

水だ。

それを理解した瞬間、彼女の乾いた喉が、生存本能が水を求めだした。本能に従い、風華はゆっくりと首を巡らせ音を探る。

音が壁に反響して見つけづらかったが、どういうわけか強い魔力の反応があり、方向を見つけることは容易かつた。音の大きさからどうやら、小さな水流のようで、距離もそう離れてはいなさそうだ。

それを確認した彼女はハジメの身体からゆっくりと抜け出し、ふらふらと床を四つん這いに進みながらそれに近づく。

壁を伝い流れ落ちる水を手探りで見つけ、両手で掬つて喉へ流す。次の瞬間、彼女は先ほどと同じ行動を何度も繰り返していた。

おいしい。自分が今まで飲んできた水よりもはるかにおいしいと感じる。

一心不乱に水を飲み続ける彼女は、ふと、何かに気づき、その手を止めた。

水に触れていた手の火傷がよくなっているのだ。その他にも、全身を襲つていた痛みは無かつたかのように引き、視力も元通りとまではいかないが、先ほどよりも良く見えている。

「……すごい、なにこれ」

思わず出た声にはつと喉を触る。かすれた声しか出なかつた喉が治つている。

「……これなら」

これなら兄を治せる。そう判断した彼女はすぐにハジメをゆつく

りと水源まで引きずり、一番怪我の酷い左腕に水をかける。すると、みるとみるうちに腕の出血が治まり、傷が塞がつた。これで失血死は免れた。

あとは水を飲ませれば兄も回復し目を覚ますだろう。しかし、彼女がいくら水を掬つて口元へ運んでも、彼の口の端からこぼれ落ちてしまう。

「……うん」

どうにか飲ませることが出来ないかと、彼女は考え、一つ方法を思いつく。彼女は即座にそれを実行した。

「……んっ」

彼女は水を掬い、その手を自分の口元へと持つていく。そして、水を含んでから彼に口づけし直接流し込む。

口の中の水がなくなつても、風華は口を離さなかつた。

数秒、あるいは数分経つて彼女は顔を上げる。

その頬には一筋の涙が流れていた。

「……」

こんなことで、兄への初めてのキスをあげたくなかつた。こんな奈落の底じやなくて、もつと幸せな中であげたかつた。

そう出来なかつたのが悲しくて、悔しくて、でも兄との感触はやさしくて。

彼女は静かに涙を流し続ける。

やり直すように、もう一度だけ顔を落とした。

ハジメが目を覚ましたのは、風華が水を飲ませてから十分程経った頃だつた。

「う、ぐぐぐ……いてて」

意識の戻つた彼の身体に痛みが走る。しかし、それは身体中の外傷からというよりは、固まつていた身体を動かす感じだ。床に毛布だけで包まつて寝たときに起きたときの感覚に近いと彼は思つた。

「……よつこらせえのぶつ」

ひとまず、寝た身体を起き上がらせようと両手で身体を起こそうとしたところで、彼はバランスを崩し再び元いたところへと戻る。再び身体に痛みが走るが、頭部だけにはやわらかい感触が返ってきた。

「……ん」

身体のバランスの異常や、後頭部の柔らかさなどの情報の多さに混乱するハジメの頭上から聞きなれた声がした。周りが暗くて見えづらくて気づかなかつたが、誰かに膝枕されていたらしい。

そして、ハジメと一緒にこの場にいる人物は一人しかない。

「あ、風華……」

「にい……」

膝の主は風華だった。彼女は、ハジメの傷が塞がつたことを確認すると、糸が切れたように意識を失っていた。

ハジメの視界に、黒い人影が入る。それが風華が上から覗き込んでいるというのはわかるが、周囲の状況が全く把握できない。

「そうだ、明かり……」

「……っ」

その咳きに、風華の身体が一瞬震えるが、腰のポーチを探ろうとした彼はそれに気づかなかつた。彼は探ろうとしている手が右腕だけで、自分の左腕が存在しないことによく気づく。

そして、そうなつた原因も思い出した。

「あ、ああ、あいつが……あいつが、腕、腕……」

ハジメの身体が恐怖で震える。奴がこちらを見る目が、こちらに迫る奴の腕が、千切れ飛ぶ自分の腕が、飛び散る己の鮮血が彼の思考を侵食していく。

「ああ、ああああ

自分を覗く影に奴の赤い目が現れる幻覚が見える。失われた左腕が幻肢痛を訴える。その痛みに耐えるように、彼は身をよじらせた。そのとき、彼の頬を風華の手が包んだ。その手の感触がいつもの柔らかさと違い、どこか力サカサ、ゴワゴワとしていることに彼は違和感を覚え、正気に戻つた。

「あ、え、風華……？」

「……にい、大丈夫。ここに怖いの、いない。風華だけ」

そのとき、彼はようやく自分のしようとしていたことを思い出す。

再びポーチを探る。ポーチはところどころ破けており、中の物はいくつか落としたからか無くなっていたが、運よく目的のものは見つかった。

彼は握ったものに魔力を込める。すると、魔力に反応したそれは青色に弱く発光し周囲を照らす。彼が今使用したものは魔光石という鉱石だ。風華が訓練に使用していた魔色石とは違い、魔力を込めれば強い光を数秒間発し続ける石だ。純度の高いものは目くらましに使用されることもある。

その急な光に風華は思わず腕で目を塞ぎ、ハジメはその光景に言葉を失う。

彼女の焼けてボロ布同然だつた服は、逃げるときにほとんど失われたのか、溶けた布の纖維が身体にはりついているだけの十分裸といえる恰好だつた。その見える肌は全て火傷跡に覆われており、彼女の小柄であまり発達のない身体に痛々しさを残す。その火傷跡はどういうわけか奈落の底に来たときよりも良くなっているが、それがこの少女がこの傷と一生つきあつていくことを示しているように彼は思えた。

何故、彼女がこんな姿にならなければいけなかつたのだろうか。

「……っ！ 見な……いで……」

「え、あつえつ!?」

風華の恥じらいの混じつた小さな声は、その身体を悲し気な表情で見ていた彼を正気に戻すのには十分すぎるものだつた。

魔光石の効力が切れ、辺りは再び暗闇に包まれる。

「……」

二人の間に沈黙が流れる。

やがて、ハジメの頭がゆっくりと降ろされ、柔らかい感触が無くなつた。

「……あの、風華さん？」

「……ふふ、ふふふふ」

頭上から聞こえる義妹の笑い声。長年の付き合いの彼はそれがヤバいもの、もつと言えば王国での訓練でやらかした後に会ったときのよりもヤバいことを理解する。

あかん、これやけになつたときのだ。

起き上がろうとした右腕と左肩が彼女の両腕に押さえられる。腹部の辺りに何かが乗つかる感触が伝わる。

「…………にいい？」

「は、はい」

「そこから動いちゃダメだからね？」

「ごめん待つてわざとじゃないんですけどどうか待つて助けてええええ

!!!!

小さな空間に、男の叫びが木霊した。

ちなみに、彼は全力で抗い、どうにか守りきつた。
頑張つて、守り切つた。

奈落生活

奈落生活1日目

と言つても、日の光の届かない暗い奈落の底では日付感覚などないので、目が覚めたら次の日ということにした。奈落に落ちたり魔物に襲われたりと肉体、精神共に疲労の激しい一日だつたと感じる。そこにはもちろん（アホな）決死の攻防も含まれている。あの攻防が落ち着いたあとはふつと意識が消えるように眠つた。

奈落生活2日目

全身を襲う痛みで目を覚ました。下に何も敷かずに寝るのは徹夜でゲームをしたときに何度も経験しているがやはり慣れるものではない。ポーチを枕の代わりにすればよかつたかなと思つたが、ただでさえ破損具合が酷いのがさらに酷くなりそうだ。何かに使えるかもしないので出来るだけ使えるようにするに越したことはないだろう。自分の右腕を枕代わりにして寝ている風華が目覚めたあとは、今後の方針について話し合つた。と言つても自分たちのレベルで出来ることは何もなく、じつとして救助を待つということになつた。

いや、それしか出来なかつたというべきか。そして、残された食糧も心許なく、二人で節約しても数日しか持たないだろう。とりあえず全体の2／3を風華に渡し（といふか押し付け）、残りを自分が受け取つた。その日はその食糧の約1／10を食べて寝た。残りの食糧は全て風華の方に回す予定だ。

奈落生活3日目

微かなうめき声に目を覚ました。声の主は風華だつた。苦悶の表情で熱い、痛い、と訴えている。全身の火傷は例の不思議な水のおかげで治つていると思うが、幻痛症状だろうか。自分自身を抱きしめてもがいている風華を片方しかない腕でそつと抱きしめた。痛みから逃れようと必死に振るわれる義妹の腕が自分の身体に小さなひつき傷を残していく。目を覚ましたあとの風華は泣きながら謝つていた。苦しいのは風華なんだ、謝る必要なんてないんだと諭すと、次第に落ち着いていき、泣き疲れたのか再び風華は眠りについた。今の内

に予定通り自分の食糧全てを風華に着せた自分の上着のポケットに入れる。その日は不思議な水を飲んで過ごした。やはり水だけでは空腹感はどうにもならないが、人間、水さえあれば一週間は生きられると聞いたことがあるし、夏休みとかで母の手伝いをしていたときは食事がエナドリだけという経験もしたことがあるし何とかなるだろう。ましてやこの水はただの水ではない。もしかしたら一週間以上持つかもしれない。

水を飲みながら、ふと自分の左腕があつたところを見やる。途端に自分とずっと一緒にあつたものの消失感が痛みと共に襲ってきたので精神衛生上よくないと思い、すぐに目をそらして忘れようと無理やり寝た。

奈落生活4日目

バレた。速攻でバレた。何がバレたって風華に全部食糧を渡したのがバレた。何でも、自分が寝ている間に食事を取ろうとしたとき、妙に量が多いことを不信に思い、自分のポーチを見てみれば中身が空だつたことで発覚したらしい。目が覚めたらすぐに説教されながら食糧を全部口に突っ込まれた。まさかこんなことで食糧が全部なくなるとは思わなかつた。とりあえず次からは一気に渡すんじゃなくて少しづつ渡そう。口に突っ込まれたものを吐き出すわけにもいかないので観念して咀嚼しながらそう考えていると、それもバレてまた怒られた。何故だ。

奈落生活5日目

いつかはこうなるだろうとは思つていたが、予想以上に早い食糧全ロストである。流石にどうしようもないでのこの日は水を飲んで過ごした。

奈落生活6日目

水。水。水水

奈落生活7日目

水水水水水 m-i-z-u 水み zu m-i ずみ z

奈落生活8日目

食糧を探しにここから出ることにした。

「食べられそうな木の実とかあればいいんだけどな……」

「……でもここ岩ばつか」

ハジメたちが奈落の探索を始めて1時間ほど経過していた。なぜ、彼らが安全な隠し穴から出て、危険に身を冒しこんなことをしているのかというと、風華の行動に原因がある。

奈落生活8日目。己の口元に違和感を感じたハジメが目を覚ますと、そこには自分の腕をハジメの口に当てている風華の姿があつた。虚ろな顔で、己の左手で右手首を掴んで前腕を彼の口に押し付けているその目は全く正気を保っていない。まるで、というか明らかに自分を食べさせようとしている。必死に声をかけて風華を正気に戻したハジメはすぐに思った。

このままではいけない。急いで食糧を探さねば。

そのハジメの提案を風華は最初は渋つていたが、考えてみればそもそもで食糧を全部消費した原因是自分が暴走したせいだったのでの案に従つた。どのみち、現状維持では発狂して死ぬだけだろう。

という訳で彼らは出来る限りの準備を行い、奈落の底を探索していった。

(ナイフが無くてよかつた……)

岩陰に隠れて周囲を警戒しながら目覚めたときの光景を思い出し、ハジメはそう思う。風華のあの様子では冗談抜きに自分の腕を切断してハジメに食べさせていたかもしれない。

二人は奈落の底を歩き続ける。求めるものは食べられそうな植物だ。なにせ、ここに生息している動物といえば確實に魔物。そいつら相手に正面どころか側面からやりあつても勝機がないのは数日前に経験している。ならば木の実などの魔物ではない食糧を探すのが一番だ。

しかし、探ししても探しても視界に広がるのは岩肌ばかりで植物なんてありそうな気配もない。ウサギが生息していたことを考えると植物がありそうな気もするが、草食のそいつは地球のウサギである。もしかしたら、ここのはやつは肉食なのかもしれない。というか食えそなものが見つからないので、あのウサギは他の魔物を喰らう肉食だと考へるしかないだろう。

肉、肉だ。

そんなことを考へていたら急に肉が食べたくなってきた。そういうえばウサギの肉はおいしいと聞いたことがある。もし、地上に戻ったらウサギ肉を扱っているお店を探すのもいいかもしれない。

空腹で少しほんやりとする頭が思考を当初の目的から脱線させるなか、ハジメの視界にそいつらは現れた。

それは、奈落の底に来た初日にウサギに蹴り殺されていた二つの尾を持つ狼だった。それらは4頭で群れを形成しており、こちらに背を向けて前へ歩いている。

すぐさま、さつと岩陰に身を隠し、考へを巡らせる。

なるべく会いたくなかった奴の一種だと思う。正直、4頭を相手に無事でいられる自信が無い。出来れば単独行動しているやつがいい、あのときのウサギのように。そう考へて、ウサギはウサギでの狼を複数相手に無傷で立ち回っていたことを思い出す。あれはあれで勝てる気がしない。となると、ハジメたちが見てきた魔物で残っているのはクマくらいだが、あれは完全に論外だ。

兄がうんうんと頭を悩ませるなか、風華はふとアイデアを思いついていた。

「……にい」

「ん？ どうした風華？」

「……あれ、食べよ？」

「……え？」

風華の言うあれとは間違いない、さつき見つけた狼のことだろう。しかし、奴は狼だ。たつた二人で、ましてや子供の力で勝てるだろうか。

「……いいこと、思いついた」

奈落の狼……二尾狼の狩りは集団、そして待ち伏せで行われる。彼らはこの階層では最弱の存在であり、それは彼らも理解している。そんな彼らが生きるために格上を喰らう術は、単純に数で攻めることだ。数で優位に立てば、どんな相手でも次第に圧せる。

最終的に1匹でも残つて勝てばいい。それが彼らの生き方だ。

そして、彼らにはその利点を十分に活かす能力を持つている。それは動物版の念話とも言うべき能力だ。これを利用することにより彼らは高度な連携を取り、狩りを行う。

ハジメたちが最初に目にした群れは、まだ若く、連携が浅かつた群れであった。また、ウサギの方も中の上に位置する個体であつたため、あの狼たちは運が悪かつたとしか言はほかない。

では、この群れはどうか。彼らはこの奈落の底を過ごして長い群れだつた。野生の勘を頼りに、相手を殺せるか無理かを判断し、やれそ娘ならば喰らう。そうして生きてきた群れだ。

そして、彼らは今回も狩りを成功させるため、狩場を見つけて待ち伏せる。その狩場を通った相手を襲うのだ。

ウサギが一羽、狩場を通り……あれはダメだ、身体も大きいし、動きも軽やかで警戒してなさそうに見えるが、それは罠だ。あれは無視すべきだろう。

しばらくしてから二羽目……身体は小さいし、警戒心がまるで感じられない。若い個体だろう。

あれならいける。そう判断した群れのリーダーは他の狼に指示を出す。

程なくして、狼は二尾に雷を纏わせウサギに襲い掛かる。哀れな獣の悲鳴が狩場を木霊した。

「……生き残っちゃつたな」

「……じゃあ、ウサギも、食べよ」

その狩りの様子を壁の中で見ている者がいた。ハジメと風華である。

風華のアイデア。それは、魔物同士の殺し合つたあの死体を漁夫の利しようというものだ。奈落生活の中で、あの隠し穴にたどり着くまでに起きたことは聞いているので知っている。ならば、あのときのようにもうサギとかに狼を殺してもらい、死体の一つくらいこつそりと持ちだそうというものだ。

しかし、それは狼が狩りに失敗していることが前提になつてゐる。今のように狩りを成功させた場合はどうするのか。それに対する風華の答えはこうだ。

「……ぱっくんちよ」

そう言い彼女は両手を合わせる。

まあ、つまり。

「……支援」

「鍊成！」

こういうことだ。

狩りを成功させ、獲物を捕食していた狼たちは突如、地面に飲み込まれる。とつさに飛び退こうと脚に力を入れるが、脚は大地を蹴ることなく、むしろもがけばもがく程に飲み込まれていく。

まるで、アリジゴクに囚われた蟻の様だ。

そして、狼の全身が地面に飲み込まれる。直後、全身を強い圧力が何度も何度も彼らを襲つた。

ハジメたちによつて狼が4頭と、ウサギが飲まれてから十分程の時間が経過した。

「もういいかな？」

例の水の入つた石容器の中身を飲み干し、それを投げ捨てつつハジメは背後の義妹に振り返りつつ聞いてみる。それに彼女はこくんと

領いた。

作戦は簡単、地面を鍊成し獲物を飲み込ませ、その中で万力のように圧し潰す。これだけだ。高ランクの魔物は単純に硬いので、地面を鍊成して槍を作るくらいでは口クにダメージが入らないだろう。しかし、大地の圧力ならば流石に通じるのではないか。そう考えて彼らはこの作戦に出た。念のために持つてきた水の入った石容器は今飲み干したのが最後だし、これが通じなかつたらお手上げだ。果たして結果はどうだろうか。

地面を鍊成して狼たちを掘り起こす。狼は全て絶命していた。

それを見た二人は喜ぶよりも、すぐにそれらをまとめ、今まで以上に警戒しつつ隠し穴へと戻る。

帰り道は何事もなく、彼らは無事に戻ることが出来た。安全なところへ戻れたことを確認し、二人はパチンと手を合わせる。

足元には二尾狼4頭とウサギの死体。

彼らは食糧を手に入れた。

トラウマ

彼らの前には肉がある。それも動物5頭分と中々な量の肉だ。

「……どつちから食べる？」

着々と魔法陣の準備をする風華が、鍊成して極限まで鋭く作った石のナイフで魔物の肉と毛皮を分けているハジメへと問いかける。それに対する彼の答えは決まっていた。

「そりやあもちろんウサギからだろ。狼より美味そудаし」

それは捌く前から彼が決めていたことだつた。狼とウサギ、どちらの肉が美味しそうかと大衆にアンケートを取つたら、恐らく大多数の人間がウサギと答えるであろう。肉食動物より草食動物の方が美味しそうというイメージがしやすいのも、彼にウサギ肉への期待を膨らませていた。

ただ実際のところ、肉は狼の食べかけ、加えて電撃で仕留められたので焦げ臭い上に下処理もしていないので獣臭さも倍。ブツシユ。しかも狼を仕留める際にウサギも巻き込まれていたのでプレス戦法で色々とぐちやぐちやになつているのだが。

それでも、やっぱりウサギ肉が先だ。

「……準備出来た？」

そろそろいいかな、と思つたところで作業を見ていた風華から声がかかる。彼は分ける作業を止め、予め用意していた石の棒に先に捌いていたウサギ肉を刺していく。

捌く、と言つても魔物は死体になつても魔物だつた肉があつさり柔らかくなるなんてことはなく、死体になつてもその身体は多少軟化していたがほとんど硬いままだつた。おかげでウサギを捌くだけで結構な重労働だ。

「よし、そんじや焼くか……でも無理はするなよ
ん、とうなずく義妹を不安な目でハジメは見る。

最初、ハジメはこの肉を生で食べるつもりだつた。肉の生食は色々怖いものがあるが、ここには例の不思議な水がある。何が起きてもうごり押しで行けるだろうと彼は考えていたのだが、それに待つたをか

けたのが風華だった。

「……生は危険」

「でもそれしかないだろ。他にどうするんだ」

「……焼く」

「え」

「……焼いて食べよ」

「いや、でも」

「焼くの」

「あつはい」

彼女の主張には異を唱えたかつたハジメだが、風華の勢いに圧され、それに対応するしかなかつた。

物を焼くのに使うものは火だ。しかし、風華をこの身体にしたのもまた火である。自分の身を焼かれるという体験をした彼女からすれば、炎自体がトラウマになつていてもおかしくはない。見ただけで精神的な悪影響がある可能性も考えられる。ハジメがあえて焼いて食べるという選択を除外したのにはそういうた考え方もあつた。

しかし、風華は自らが焼くと主張した。彼女にも思うところがあるのである。

「——顕現せよ、火種」

完成した魔法陣に風華が詠唱と共に魔力を流す。起動した魔法陣の中心に炎が現れる。火種を起こす魔法といつてもその大きさはちよつとした焚き火ほどはあるだろう。

彼女が火を使うことが決定したあとも、ハジメはせめて火付け役はやらせてくれと食い下がつたが、それも彼女に却下された。

簡単な話し、風華の筋力では魔物の肉を捌けないのである。道具はハジメが出来る限り最高の物を鍊成して作っているが、それを使うのは人である。ハジメが苦労してやつと捌ける硬さの肉を、風華がどうこうするのは不可能であった。

そのため、役割分担として火付け役が風華、肉分け担当がハジメとなるのは確定と言つてもよかつた。

「……」

ハジメが肉を置いている傍で、彼女はじつと炎を見ていた。己の身体に癒えない傷を残した元凶をただ見つめていた。

(……怖くない。怖く、ない。怖く、な、い。)

心の中で自分に言い聞かせるように、恐怖を抑えるように念じる。しかし、その想いとは裏腹に、その燃え盛る光が、熱が、恐怖へと変換され彼女の心を侵食して行く。

(……どうしたら、いいの)

次第に彼女に焦りが募る。

どうしたらこの恐怖を乗り越えられる?

「……あ」

そのとき、彼女は天啓を得た。

触れられるなら怖くない、と。

「……怖くない」

ゆらり、と手を伸ばす。

「……怖くない」

ふわり、と一步、足を進める。感じる熱が強くなつた。

「……怖くない」

もう一步進めようとしたところで、視界が不意に暗くなる。

「……?」

「風華、ここまでだ」

誰かに抱きしめられている。それがハジメによるものだと認識するのに、彼女は数秒の時間を要した。

「……ダメ」

「もういいんだよ」

「……嫌だ」

「風 k」

「嫌だ!!」

滅多に聞かない彼女の大声は彼を驚かせるには十分だつた。

それに驚きつつもハジメは風華を抱きしめる。彼女の小さな身体は震えていた。

この地に落ちて何度目かの抱擁。二人ボツチのこの地で安らぎを

得る一番の方法。

彼女の震えが落ち着くまで待つてから、ハジメは問いかける。

「……どうしてだ？」

彼は風華の目を優しく見て問う。彼女の顔は、恐怖とそれを必死に消そうとしている歪んだ表情をしていた。

「……」炎を怖がつてたら、ふうはにいの邪魔をする。にいが先に進めない

「確かに、この先で炎を使う魔物が出てくるかもしれない」

「……だから、早く恐怖を乗り越えなきやいけないの……このままじゃ、ふうはにいの足手まといになる。だから……」

「だからつてこんな無理をすることはないし、ふうが足手まといになることなんかない」

それに、と彼は言葉を続ける。

「ふうがダメなら僕はもつとダメだ。魔法は使えないし、鍊成するくらいしか取り柄がない。その鍊成もふうがいなきや役に立たない……前にも言つたろ、僕は弱いんだ。だから二人で強くなろうって」「……ん」

一先ず、彼は説得に成功したらしい。風華の表情がやわらかくなつて行く。

「先を急いで転んだら意味がない。ゆっくりと治していくこう」

「……ん、ごめん」

「さて、それじやあ久々の食事にしようか。そろそろ肉もいい感じに……あ」

「……ん？ あ」

ひと段落ついたところでハジメが焚き火の方を見やると、そこには明らかに焼きすぎて焦げている肉がそこにあつた。

彼が一番楽しみに期待していたウサギ肉である。

「あ、あああああああ!?」

「……にい、ごめん」

絶望に打ちひしがれる彼に風華は謝ることしかできなかつた。

奈落での食事

「……」

「……」

魔法陣の焚き火が静かに洞穴を照らす中、ハジメと風華は互いに背中合わせで座り、無言でウサギ肉をかじっていた。

焦げて真っ黒になつていたウサギ肉だが、少々大きめに切り分けていたおかげか完全に炭化してはなく、僅かだが食べられそうな部分は残つていた。

それでも味や食感は最悪の一言に尽きるのだが。

「……不味いな」

「……硬い」

焦げ肉のため、苦みが強いところまでは二人の想像通りだつた。しかし、下処理もしていないナチュラルな焼き肉の味というのは、便利な日本社会で育つたうえに、つい最近まで王国の豪華な食事がメインだつた二人には精神的苦痛を与えるには十分のインパクトがあつた。

その上、焼きすぎたおかげでとても硬く、飲み込むためにはよく噛みしめなければならない。そして、噛めば噛む程、溢れてくるのは血生臭さと獣臭さである。正直、食べられたものではない。せめて、塩の一つまみでもあればよかつたのだが、この奈落の底にそんなものが存在するはずもなかつた。

それでも、餓死するよりはましだ。二人は生き延びるという一心で黙々と肉を食していた。

それだけを考えなければ食つてられない、というのもある。

「くそぅ……地球に戻つたら真っ先に美味しいウサギを食つてやる……」

「……さんせー」

ある程度噛んでから、飲み込むにはまだ少々大きい肉の塊を不思議な水で流し込む。すると、口の中の気持ち悪さが途端に消えていく。この水がなければもつと苦しい食事になつていたかも知れない。

しかし、落ち着いた食事を取れたおかげで、彼に少し余裕が出来た

ことは確かである。

手元のカップの中身に目を落とし、続いてそれの源泉である水流に目を向ける。

その先には、青白い輝きを放つ球形の結晶があつた。最初は肉を一噛みするたびに水で喉に流し込んでいたので、すぐに足りなくなつてしまつたので、もつともらおうと思つて壁を鍊成で掘つたら出てきたのがこの結晶である。この水はその結晶から放出されているようだつた。

「僕の予想が当たつてたら、あれは神結晶で間違いないと思う」「……なに、それ」

風華の問いにハジメは、自分の知識を思い出すためにゆっくりと口に出す。

「ウォルペンさんに教えてもらつたことがあるんだ。大地を流れる魔力が何年も時間をかけて結晶化したもの……だつたかな」

それは、かつてウォルペンのもとで働いていたときに聞かされた話しだつた。今はもう全て失われたと思われており、古い文献でも少ししか知ることができないくらいの幻の結晶らしい。

彼も、鍛冶の役に立つかは知らねえがここまで珍しいならせめて一眼見てから死にてえもんだと笑いながら話していた。

「……じゃあこの水は？」

「そつちは神水って呼ばれるもので、神結晶に魔力がどんどん溜まつて魔力が飽和状態になると秘薬みたいな水になる……で合つてのはず」

ふうん、と背後の義妹が興味なさげに呟いたところで、会話が途切れる。丁度、ハジメの手元の肉が無くなつたので他に焼いていた肉を食べようと立ち上がつたときだつた。

「う……あつ……うア!?」

「!..どうしたふう……ガア!」

背後にいた風華が突然苦しみだした。その様子を見たハジメはすぐさま駆け寄ろうとし、突如、全身を激痛に襲われる。

彼らは激痛から逃れようとして叫び、転げまわる。どうにか、カツプの中に残っていた水を飲み干すと、全身を襲う痛みは引くが、再び激痛が襲いかかる。

「どう……して……」

「にい……にい……」

今まで彼らを何度も救つてきた神水の効果が無かつたことにハジメの思考が疑問と激痛でぐちやぐちやになる。しかし、彼を呼ぶ風華の声が、反射的に彼に正気を取り戻させる。

風華は彼に助けを求めて縋り寄る。彼の身体を抱きしめる力は普段の彼女からは想像もつかないほどに強く、ミシミシと彼の身体が悲鳴を上げる。

「待つ……てろ、今、み、水を……」

そういうと、彼はカツプを握りしめる。直後、彼の身体が激しく脈動を始めた。

「ガアアアア!」

ハジメの身体の底から急激な力が溢れ出す。彼が握っていたカツプはその握力に耐えられず粉々に碎け散り、破片が彼の手のひらに突き刺さった。

手のひらの痛みに構うことも無く、彼はようやく神結晶へとたどり着き、手で神水を掬うと己の血が混じるそれをすぐさま風華の口へ流し込む。風華がそれを飲むとき、勢い余つてかじりつき、手のひらの肉が持つていかれたが、その傷が即座に再生する。

風華に神水を与える作業を2、3回行つたところで、手のひらの傷から神水がしみ込んだおかげか、彼は少し正気を取り戻し、今度は自分の口元へと神水を運んだ。

神水のおかげで一瞬だけ痛みから解放されたハジメは、全身から力が溢れ出す感覚に奇妙な既視感を覚えていた。

どこで経験したのか。そう考えて、結論はすぐに出た。

(そうだ、初めて風華の強化を受けたみたいな——つ!?)

そこまで思い出したところで、三度、彼を激痛が襲う。

出来ることなら、狂って全部投げ出したい。いつそ、舌を噛みちぎって死んでやろうかとも思った。

しかし、その選択を選べば彼は死んでいても後悔するだろう。

彼女をこの奈落の底で孤独にするわけにはいかない。彼女と一緒に地球上に帰るために死ぬ訳にはいかないのだ。

風華からの自身への痛みが激しくなる。時折、何かが折れる音と共に新たな痛みが彼を襲うが、その痛みを上塗りするように一段上の激痛がそこを襲う。

風華の意識は無いようだつた。ハジメからの神水で気絶することが出来ず、激痛に耐えられなくなつた彼女は、考えることを放棄し、激痛に反応して叫び、力加減が出来ずに全力でハジメを締め付けるモノとなり果てていた。

やがて、ハジメを襲う激痛が治まり、風華からふつと力が抜け、ふらり、と倒れる小さな身体を自身の身体で受け止めたとき、彼はようやく意識を手放すことが出来た。

変化と捕食

悲鳴が響いていた洞穴は、今は静寂が支配していた。

火を起こしていた魔法陣は効果時間が切れたことで自然と鎮火されており、一帯の気温は下がっていく。

悲鳴の主たちは今や力尽き、壁にもたれかかり、抱き合つて眠つていた。

「……うう、ん」

そのとき、冷たい空気が風華の首筋を撫で、彼女の意識を覚醒させた。

「うつ……何が、あつたの……っ!？」

彼女は今の状況を把握しようと、自分が抱き着いているものから身体を離し、その正体に目を見開く。

「……にい……何で」

それは、真っ白になつたハジメだつた。

真っ白に燃え尽きた、という比喩表現ではなく、彼の頭髪は日本人らしい黒色が完全に抜けきつた白色に変色していた。

その他にも、食事前よりさらに増した筋肉は、彼の首から下をより細身の筋肉質へと変化を遂げさせており、身体中を走る赤黒いラインが禍々しさを感じさせている。その赤黒いラインは魔物らしいという印象を彼女に与えた。

自分の知る人物が急激に様変わりするというのはかなり大きな衝撃だった。この奈落の底に来てから焼け爛れた自分の姿を見た彼もこんな気持ちだつたのだろうか。

現実を受け入れるために風華はハジメの身体をゆっくりと見ます。

全身の筋肉は細身ながら無駄を削ぎ落した造形をしており、少し男らしくなつた彼の顔立ちと相まって逞しい印象を与えていた。そのとき、ハジメの身長がだいぶ伸びていることに気づいた。

あの激痛は身体を成長させるためだつたのだろうか。そう思つた彼女は自分の変化を確かめるために一旦離れて立ち上がる。

彼女は自分の身体を見下ろして、さまざま違和感をその身に感じた。

まず目に入るのは胸部だ。見下ろしたときに見える地面の面積が自分の記憶より狭く見える。彼女が密かに気にしていた起伏のあまり無かつた胸は少し大きく成長していた。続けて、脚や腕などを見て触つて確かめてみる。そのどちらも肉付きがよく、以前の彼女よりも女性らしさを感じさせる。パートへと変貌している。そして、これまたハジメと同様に赤黒いラインが全身を這っていた。

全身を被う火傷跡は相変わらずだが、焼けて張り付いていた衣服の纖維などは消えていた。その箇所をよく見てみると何かがあつた跡が見られる。

また、彼女の顔にかかる前髪は見慣れた黒ではなく、やはりハジメと同じような白色だ。これには少し彼女は落ち込んだ。ハジメの好みのキャラクターはロングヘアで黒髪のキャラクターが多いので、自分の黒髪は自信を持つて誇れる数少ないところだつたのである。しかし、色は変色してしまつたが、触つて長さを確かめると、いつもの長さまではいかないが全身が焼けたあとよりも伸びているようだつた。

全身を見回していると、彼女は自分の見下ろしている地面が以前より遠いことに気づく。ハジメほどではないが、やはり彼と同様に身長も伸びているらしい。ハジメに借りた上着の裾で隠れていたところが少しスースーしている。

一先ずの確認を終えた風華はかがみこんでハジメを眺める。そのとき、ハジメの身体がどれくらい変化をとげているのかということに風華は興味が湧いた。

二の腕の筋肉を人差し指でつついてみる。弛緩しているために柔らかいかと思ったが、思った以上に指は沈まなく、しつかりとした弾力を彼女の指先へと返してくる。

今のハジメは誰にも負けないくらい強い。

その確信を持ったとき、彼女は自分の本能が強く刺激されることを感じた。

「……っ」

声無き声が語り掛ける。

あれは強い。優れている。故に子を成し次代へつなげ。

それを理解した瞬間、体内のナニカがだんだん荒れ狂っていくのを感じた。

痛くはない、けれど苦しい。どうすればコレを鎮められる？

目の前で無防備に眠るオトコを見やる。

……ああ、なんだ。簡単なことではないか。

「……首、痛めたら、大変だから」

わざわざ言い訳じみたことを口に出して、彼女はハジメの身体をゆつくりと横たえる。

そうだ、これはただ彼を楽な姿勢にしているだけだ。

そう思いつつも彼女はハジメの右腕を広げ、その懷に自分の身体を横たえる。

「……ふあ」

ヤバい。今まで一番いい。

彼女の頭に柔らかくもしつかりとした感触が与えられる。その感触はハジメにしてもらっているときよりも、今まで使っていた枕よりも極上と言ふものだった。

ハジメの方を向いた彼女にハジメの肉体が目に映る。

彼女は自分の身体の奥がうずきが大きくなっていくことを感じた。

「……」

無言でハジメの腕から離れ、その身体を跨ぐ。

胸板に手をついたとき、しつかりとした手ごたえが彼女の手のひらへ伝わった。

その感触に心臓の鼓動が高まるのを感じつつ、ハジメの腹部へと腰を下ろす。

瞬間、彼女の脳天をゾクゾクとした感覚が突き抜けた。

ブルッと彼女は自身の身体を大きく震わせる。それが寒さからではないことは彼女自身もよくわかつていた。

倒れ込みそうな身体をハジメの胸板に手をついて支える。そのとき、彼の胸にある大きな傷跡に手が触れた。

それは、ハイリヒ王国の王城で起こした事故から彼女を守ったときに出来た傷だ。

自分のためについた傷。

その傷を見たとき、彼女は己の熱が一段と熱くなつていくのを感じる。

そつと、自身の身体を押し付け、傷跡を一回舐める。

「……しょっぱい。それに土の味。けど……」

もつとほしい、彼の全てがほしい。

そうして彼女はまた傷跡を舐める。

ぴちやり、ぴちやりと水音が小さく洞穴に響く。

彼女の頭は胸の傷から、首、頬へと移動していくた。

そのときだ。

「うう……風華……？」

ハジメの口からうめき声が聞こえた。どうやら目が覚めようとしているようだ。

そこで彼女は舐めることを一旦止め、彼の顔を見つめる。彼の目が開かれる。

「……あれ……？」

その目を見たとき、彼女の口から疑問の声が出る。

それは彼の瞳の色だ。その色は普段の黒ではなく、魔物のような赤に染まっていた。

「風華……なのか？ つそうだ、どこも痛いところはないか!? 気持ち悪くないか!?」

ハジメもこちらを認識する。変わり果てた自分の姿みて少し混乱しているようだ。

「……ん、大丈夫」

「そうか、よかつた……」

その問いかけにいつも通りの返答を返す。その答えを聞いて、ハジメはほつと安堵のため息をつく。

そのときの表情は彼女の理性の最後の壁を碎くには十分すぎる威力があった。

「ところで、そろそろどいてくれないか？いや、重たいとかじやなくて、ほら、その、色々と……」

バタバタと片腕を動かしながらしどろもどろになるハジメ。

その原因が自分を意識しているからということは火を見るよりも明らかだつた。

何度も見られた身体だが、成長したおかげかこんなにも意識してくれている。

それは自分にとって、ここまで生き残った最高級の報酬だ。

「あの、風華？聞こえてる？」

「……にい、好き。愛してる」

そういうと、彼女は激しく彼の唇を奪う。

本能のままに彼を襲つた。

「……やつちまつた」

壁に背もたれ、ハジメは頭を抱えて力なくうなだれる。

彼の投げ出された足には、太腿を枕代わりにして寝ている風華の姿があつた。

彼女の寝顔は幸せに満ちあふれており、その顔を見ているとハジメも自分の表情がゆるむのがわかる……のだが、やはり頭を抱えてしまう。

「やつちまつたなあおい……」

ハジメは、風華の頭を撫でつつ、自分が目を見ましたときのことを

思い起こす。

彼が目を覚ましたとき、目の前には、白髪に赤い目を輝かせる美少女が自分へ迫っていた。その少女が風華だと気づくのに彼は数秒を要したが、そこまではまあいい。

問題は、彼女が完全に捕食者の眼をしていることだった。それも、数日前のやけつぱちのものではなく、ガチなやつである。

これには彼も待ったをかけようとしたが、片腕がないハンデがあったとはいえ、彼女の力は思った以上に強く、彼にはなす術が無かつた。というか、束縛魔法を利用して自分を襲わせるのは流石にずるいと思う。

結局、ハジメは数時間にわたって彼女に食べられていた。

ぶつちやけ、後半辺りは自分でも積極的だったと思う。

だが、そのおかげで頭の中がある程度クリアになつた（なつてしまつた）のは事実だ。彼は何故こうなつたのかを冷静に考える。

実のところ、風華が自分に向ける感情には気づいていた。というか、少女漫画家の手伝いをしていて気づけないはずがない。

そして、自身もそれと同じような感情を抱いていることにも気づいていた。ただし、彼はその感情は表に出してはいけないと思つていた。

血のつながりは無くとも、兄と妹として育つた身としては、その一線は踏み越えてはならないところだと思って蓋をしていた。

それが外れていったのはいつからだろう。この奈落で過ごしていきたからか。あるいは、この異世界トータスに召喚されてからか。

もしくは、自分でも気づかないうちに外れていたか。

そして、この大迷宮で何度も死の淵を体験したことで、それが最後の一押しになつたのかもしれない。

「……決めた、もう逃げねえ。ちゃんと伝えよう」

常に死の危険がつきまとうこの極限の世界、自分がいつ足を踏み出すかもわからない。伝えずに死ぬだなんてまっぴらごめんだ。

風華が起きたら伝えよう。今は静かに寝てもらうことにした。

……最も、その原因の少なくとも半分は自分にあるのだが。

「それにしても……」

ハジメは自身の身体を見える範囲で見回す。

情事の際にも思ったが、身体の奥底から力がみなぎつてくる。それは、彼自身も信じられないくらいに変化した肉体と合わせて、彼に疑問を抱かせる。

「えらく変化してるな……魔物の肉を食った影響か?」

ペタペタと自分の身体を右腕で触つて確かめる。ウォルペンの下で働いていたときにも肉体の成長は実感できたが、ここまで急激な変化をした覚えは彼にない。

「ここまで来るとステータスの影響すぐそうだな……見てみるか」

そういうと、彼は辺りを見渡し、ポーチを探す。それはすぐ近くにあり、取ろうとするが、風華が寝ているおかげで微妙に手が届かないことに気づく。

「あー……どうするかな……そうだ、鍊成」

少し悩んだ彼は、地面に手をつき地面を鍊成、ポーチの下を盛り上げ、それを移動させて己へと近づける。

「よし、と。さてどれくらい変化してるかなーっと」

ハジメは、ポーチからステータスプレートを取り出し、自分のステータスを表示させる。

2倍くらいになつてるといいなあ、と彼は思いながら表示されたステータスを確認する。

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：10
天職：鍊成師

筋力	180
体力	400
耐性	180
敏捷	150
魔力	350
魔耐	300

技能・鍊成「+地形操作」「+精密鍊成」・守護「+鉄壁」・魔力操作・
胃酸強化・天歩「+空力」「+縮地」・言語理解

それは、彼の予想を大きく裏切り、5倍近く変化したステータス値と、身に覚えのない技能を彼に示していた。

「なん……だこれえ!?

誰がどう見ても異常な上がり具合に彼はたまらず声を上げる。

「……ん、どうしたの……」

その声に、膝の上の風華が目を覚ます。

風華を起こしてしまったことに、ハジメは、「あ、ごめん」と一先ず謝るのだつた。

告白とこれから

(どうしたものかなあ……)

ハジメは、目の前で座る風華の背を見ながらそう思つた。

風華が目覚めたとき、彼女は寝ぼけてボーッとしていたのだが、数分前までのことを思い出したのか、だんだんと顔を真っ赤に染め上げていった。すぐさま上着を頭に被つた彼女はハジメに身体ごと背を向け、座り込んでしまつた。

ハジメもなんとか話しかけようとしたのだが、彼女からの返答は悶えた声にならない声ばかりで、彼にはどうすることも出来なかつた。

結局、ひとまず彼は風華の頭を撫でることで落ち着かせることにするのだつた。

その結果、なんとも言えない気まずい空気が二人の間を流れていった。

ハジメとしては、告白するならきちんとしたいところなのだが、今この様子の風華にするのもどうかと考えていた。

とりあえず復活するまで待とうと考えていたのだが、それは小さな声で破られた。

「……ごめん」

「ん……何が？」

「……無理やりやつちゃつて」

「あ、あー…うん」

その言葉に彼は片方しかない手で頬をかく。

正直、それに関して彼が怒るとかそういうことは考えていない。どちらかと言えば風華の身体の心配をするくらいだ。強いて言うなら、奈落の底じやなくともつとしつかりとしたところで、と思つていたが、それも過ぎてしまつたことだ。

というか、時間が経つ程に自分の理性の壁がだんだんと崩れていく感覚がしていたので、こうなつてしまふのは時間の問題だつたのかもしれない。

「うん……その、なんだろ。僕も結構暴走してた記憶あるし、今回はお

互いさまつてことにしません、か……？」

風華の様子を伺うようにハジメは言葉をかけるが、彼女は何も返さず、微動だにしなかった。

再び沈黙が訪れるかと思われたが、唐突に風華は頭にかけた上着を取るとスッと立ち上がり、ハジメに向き直る。

そして、風華はハジメにまたがり、身体を押し付けるようにのしかかつた。彼女の頭が胸元に押し付けられる。

一度身体を重ねたとはいえ、女の子の柔らかさにはやはり慣れることは難しく、心拍が1段階上がるのをハジメは感じた。

「……じゃあ、今回は、ノーカン……」出たら、やり直そ」

「……ああ、そうだな」

かなり無理なことを言つているのは理解している。けれど、こんな衝撃的な記憶を忘れるという方が無理な話しだ。

そうしてまた、彼らはしばらくそのまままでいた。その沈黙はハジメに改めて決心を固めさせるのに十分な時間だった。

よし、と彼が呟くと彼女の頭を優しく上げさせる。キヨトンとした彼女の顔が彼の目に映る。

〔風華〕

ハジメは、彼女の目を見つめる。その緊張しつつも真剣な表情は、彼女にも緊張を伝染させる。

「好きだ」

極短い、三文字だけのシンプルな言葉。その言葉は彼女の思考を白く塗りつぶすには十分な威力を持つていた。

「色々と、どう伝えようかあれこれ考えたけどやつぱりこれが一番だね」

そう言つて、ハジメは風華を強く抱きしめた。

好きだ、とハジメは同じ言葉を風華の耳元でささやく。

告白の返答は、涙声の抱擁で返された。

やがて、少年と少女は口づけを交わした。

「……で、このステータスの異常さはどういうことだろう？」

「……んー？」

風華が泣いたあと泣き止むのを待つたり、泣いた恥ずかしさでまたふさぎ込んだり、それをなだめたり等々、あれこれあつて今現在。彼らは今後の方針を話し合っていた。

胡坐をかいしたハジメは、そこに背を向けて座る風華の頭を撫でながら話す。撫でられている風華の手の中では、ハジメのステータスプレートが弄ばれていた。

ハジメの異常なステータス値は、風華も確認している。彼女のプレートは紛失しているため、ステータスは確認できないがハジメと同じ様に急激な数値の上昇を見せているだろう。

なぜ、彼のステータスが上昇しているのか。なぜ、身に覚えのない技能が発現しているのか。この二つの謎の原因は今までの状況から考えられる限り、一つしかなかった。

例のウサギ肉を食べたから……というより魔物の肉を食べたからだろう。そう考えた二人は、早速狼の肉を食して検証した。

今度は上手く焼くことが出来たが、相変わらず獣臭さや肉の硬さといつた不快な要素はあつた。しかし、一番覚悟していた全身を襲う激痛だけは来なかつた。

それを不思議に思いつつ、二人はステータスプレートを確認する。そこには、予想した通りに上昇したステータスと纏雷という新しい技能が発現していた。試しにハジメが使用してみると、バチバチと微弱な放電が発せられた。

ハジメが今行つたことは魔法と見て間違いないが、彼は詠唱もしていないし、魔法陣も用いていない。魔力を操作できるのは魔物だけだ。このことから、導き出される結論は一つ。

魔物の肉を喰らえば、その能力を手に入れられるとということだ。このことは二人を驚愕させるのに十分だつた。なにせ、ここまで楽

で身近な強化方法は聞いたこともなかつた。むしろ、食べるだけでこんなに強くなれるならばこの世界は超人で溢れ、魔物は駆逐されるはずだろう。

二人が唸つて考へること約5分。風華が胃酸強化の文字に気づいたことで疑問は解消された。

「……あ」

「どした風華」

「……魔物の肉、劇毒。食べたら死ぬつて……教わつた」

「あ」

それは、メルドから座学で教わつたことの一つ。

魔物の肉を食べてはいけない、ということだ。なんでも、魔物の持つ魔力は人が摂取すると体内から身体を破壊させるからだとか。

それを彼らはすっかり忘れていた。正直、この極限状態では無理もないことであつたが。

とにかく、このステータス上昇方法が伝わつていらない理由は単純。食べたあと生きている者が一人もいないからだ。

彼らが生き残つてているのは神水で崩壊する身体を無理やり再生させていたからである。最も、それと正気を保つていられるかというのは別の話しだ。もし、二人のどちらかが欠けていたら耐えきれずに植物状態か、精神に異常をきたしていたかもしねりない。

そして、先ほど魔物の肉を食べて何もなかつたのは、最後に残つた胃酸強化によるものだと考えられる。ウサギが持つっていたのか、それとも魔物の肉に対抗すべく自身の本能が作り出したかは知らないが、これのおかげで、自分たちは安全に魔物の肉を食べていられるのだろう。今更だが、寄生虫や食中毒といった問題が解消されたことに彼らは安堵した。

「とりあえず食糧問題はどうにかなりそうだけど……また狼とかに勝てるかつて言われると自信ないなあ」

時折、肉をかじりながらハジメは呟く。

そもそも、今自分たちが食べているものは奇襲をかけて手に入れたものだ。一応、魔物を殺せるとはい、同じ方法が通用するとは限ら

ない。奇襲だつて仕掛けるタイミングが重要なのだ。

なにより、この階層にいるのは狼やウサギだけではない。他の魔物だつているかもしれないし、暫定の主としてハジメの腕を奪った熊が存在している。脱出路を探すにしても、こいつとのエンカウント率が0%とは言い切れない。

「……武器、作る？」

そう風華から提案されるが、それも正直微妙かなと彼は感じている。

彼らの天職は鍊成師と支援師。どちらも正面で斬つた張つたする天職ではない。二人とも武道の心得なんてないし、せいぜいが美穂の道場で修練中の人達を（両親の仕事の題材用に）観察していくくらいだ。

となると、自然と遠距離武器になるのだが、原始的なスリングショットや弓矢でこここの魔物の身体を貫けるかと言わると無理じやね？と彼は思う。

いや、貫くこと自体はこのステータスであれば可能だと思う。問題はそれらを撃つて当てるかだ。動かない的ならば練習すればやれそうだが、相手は高速で動く魔物である。もし、外したら次の弾や矢を用意している間に死ぬだろう。

そして、遠距離武器と言えば最強格である銃器だがこれも厳しいと彼は思う。まず、銃は基本的に両手で構えて撃つものである。片手で撃つことも可能ではあるが、まず当たらないし、次に狙いを定めるのに時間がかかる。片腕しかないハジメでは撃つことも弾をリロードするのも一苦労だ。風華であればまだましな運用が可能だと考えられるが、ステータスの伸び方がわからない以上、下手なことは出来ない。

なにより、弾の材料である火薬もなければ、銃の構造なんて彼らは知るはずもなかつた。

そうなれば、彼らの取れる選択肢は一つ。

「いや、今は武器はいらない」

風華の提案に彼は少し笑つてこう答える。

「だつて、ここに沢山あるんだから」

ハンティング

奈落の底を一つの小さな影が飛び跳ねている。

この階層の上位種とでも言えるであろうそれは、元気に獲物を探し
まわっていた。

奈落の新参者たちが蹴りウサギと呼称している魔物である。それは時折立ち止まつては鼻をひくつかせ、また探ししまわる。

そして、獲物を見つければ、自慢の脚力と空中移動による戦い方で獲物を仕留めていた。

これが、ハジメと風華が約三日間、壁の向こうに小さな穴を空けてそこからじつくりと観察してわかつたことだ。

「やつぱり、あの足が強力だな……仕掛けれそうなタイミングわかるか？」

「……飛んぐるとき、あえて天歩使わせる。使つた直後が狙い目」「おつけ、それじや次見つけたらやつてみるか」

彼らは拠点で蹴りウサギに対する策を考えていた。

一先ず、今回の最終目標は「打倒熊」である。理由は、彼らがこの先階層を下つて行くときに迷宮の性質上、熊以上の魔物が相手になるのは確実だからだ。そのため、まずは熊より1ランク下であろうウサギを倒すことを目標にしたのだ。

あのウサギの特徴は、発達した足とそこから発動する「天歩」という固有魔法だ。それによつて生み出される驚異的な速度が最大の武器と言つてもいい。

そして、その速度に反応できる熊はもつと強い。考えれば考えるほど無理ゲーに思えてくるが、あの熊は生きている。

生きているならば、必ず殺せるはずだ。

そのためには、情報を集めるところから始めた。鍊成で壁に空間を作り、そこを移動しつつ、風華の魔力に物言わせた探知魔法でセンサーを張り、反応したらそこの壁に穴を開けて観察する。この方法を確立させるのに結構時間がかかつたが、イメージして魔力を流してみるとそこからはあつさりと上手くいった。

そうして彼らはこの階層の構造の把握に専念した。地形、地質、魔物の習性を把握することが彼らの攻略方法に必須だつたからである。今や、この階層のみならば他の誰よりも詳しい自信が二人にはあつた。

その結果、さまざまな鉱石が手に入った。その中には火薬の代わりになるようなものもあつたので、ハジメの考へてゐる戦術を助けることとなつた。

「それじゃ、持ち物確認。閃光手榴弾5個、破片手榴弾5個」

「……よし」

「次、神水のストック10本」

「……よし」

「次、撒き餌兼携帯食糧の魔物肉」

「……よし」

「そして僕の鉄の棒……予備含めて2本、よし」

それら全てを、ハジメのポーチへと詰めていく。ぼろぼろだつたそれは、ハジメの残つたボロ同然の服を鍊成した針金で無理やり縫い付けて機能するようにしていった。おかげで今の彼は上半身裸の状態なのだが、高ステータスのおかげで風邪を引く心配が（多分）ないのが幸いだ。

「……準備オッケー。いつでも行ける」

「だね、あとは寝る準備だけか」

そういうとハジメは、バケツの形をした容器を鍊成し、部屋の隅に、ここに来る際に落ちた滝からある程度汲んでおいた貯水槽から水を掬う。

身体の汚れに関して、彼らは滝の水を汲んで、それを風華の炎魔法で温め、ポーチを修繕した際余つたハジメの服に濡らして拭くことでどうにかしていた。いくら自分たちだけの道を作つたからといつても、100%安全だという保障はないので滝まで汲み上げるは最初の1回以降無しということにして断念せざるを得なかつた。

あえて使える限界量を決めて、それまでに熊を倒すという目標までのタイムリミットの役割も兼ねている。

ただ、風呂文化の日本人産まれの性か、これをするたびに思う。（ゆっくりとお風呂入りたいなあ……）

そう思うのだが、そもそも言つていられないのが現状である。

ちなみにこの時間が風華の今一番の楽しみだつたりする。

ハジメは自分の手の届く範囲は自分でやろうとしていたのだが、風華は、片腕では限界があるからハジメの身体は自分にやらせろとの主張した。

流石にそこまでさせるわけにはいかないと彼も思つていたのだが、

風華の

「……今更見られて困る物、ない」

という言葉に少し納得してしまい押し切られてしまった。

これここから出るまで我慢できるのか、というかさせる気があるのか……？という彼の疑問はさておき、ハジメの世話をしている間の風華は本当に楽しそうなので、彼はそれを許すしかなかつた。

そうしてあとは寝るだけである。相変わらず硬い地面だが、鍊成である程度は柔らかくしているので最初よりはましだ。それでも結局のところは地面である。フローリングの床で寝るのとは全く別で、起きたときは毎回身体が痛む。高ステータスでもそこは変わらないらしい。

一先ずの寝床にハジメが横たわると、その横に風華がハジメの腕を枕代わりにして寝転がる。その上に風華の羽織つているハジメの上着をかけて寝るのが現在の生活だ。

「明日はウサギ狩りだな」

「……ん」

「明日も頑張つて生き残ろうな」

「……ん！」

それじやおやすみ、と互いにキスをして彼らは眠る。明日を生きるために。

ちなみに、風華が現状を我慢する気は半分くらいない。何なら寝起きちよつとだけ（健全な範疇で）襲つてゐる。

そうして迎えた翌日。

いつも通り朝食の不味い肉を入れ、彼らはウサギを探しに行く。

あのウサギは基本的に単独で行動している。そして戦う際に邪魔が入りそうにない場所の大体の目星は、探索を行つたときにくつかつけている。今日の目的地は拠点から一番近いところだ。

向かうときには蹴りウサギから手に入れた固有魔法である天歩とそこから派生した空力と縮地を使用して移動する。

この魔法は空中を跳んだり歩いたりできる魔法だつた。鳥のように飛んでいるわけではないので、多少の制限はかけられるがそれでも行動範囲が増えることは大変便利だ。

地面を歩いて足音を立てることや、素早くメリットはあるが、魔力の消耗が激しいというデメリットがある。最も、今のところ神水を飲めば即座に回復できるため現状そこまで大きな問題ではない。

わざわざ消耗が激しい固有魔法を使ってまで移動しているのは消耗に慣れる訓練も兼ねているのだ。

そうして移動すること数分、目の前に魔物の影が見えてきた。

それは、3頭の二尾狼だつた。狼は二人の姿を捉えると遠吠えを上げ、獲物へ襲いかかる。

「支援」

「鍊成」

それを見た二人は慌てることなく冷静に壁に向かい、風華は支援を、ハジメは鍊成を発動させる。

その瞬間、1頭の狼が飛びかかり……後ろの2頭の前から姿を消した。

突如、仲間が姿を消したことに、狼たちは足を止める。即座に仲間の居場所を探そうとしたところで、狼たちは自分の身体に上から何かが当たることを感じた。

狼たちが見上げるとそこには、

全身から岩を生やした仲間が、天井に磔にされていた。

それを認識した狼たちはそれを行つたであろう下手人に向き直り、「**鍊成**」仲間と同じ姿へと変えられた。

彼らに言えるとしたならば。

敵の能力とステージが噛み合いすぎたとしか言いようがない。

「ん」「……ん」

ハジメと風華は戦闘終了の合図として、互いの拳をこつんとぶつける。

彼らがやつたことはそう難しいことではない。

地面に鍊成をして杭を作り、それを射出しただけである。

ただし、支援魔法による生成速度と精度の強化が加えられているものだが。

彼らの考えた戦法。それは、鍊成による地形の射出である。しかし、ただ棘を作つたのでは効果がないのは、狼の死体で検証済みだ。では、支援による鍊成でより鋭く、より強固な杭を素早く生み出し飛ばすのはどうだろうか。

そう考えたハジメと風華は、拠点で何度もトレーニングを行い、つい先日に実戦投入できそだというところまでこぎつけたので狼に試してみた。

結果は今のように、杭は狼の身体を貫通して絶命させた。仮に生きていたとしても、次に待つているのは貫通した岩が再び鍊成によつて体内から岩棘の花を咲かせる末路だ。

ハジメが前言つた「武器はいらない。沢山ある」という発言の理由がこれである。

地面、壁、天井、そこから生えている岩。これら全てがハジメにとっての武器だ。

弱点は、風華の支援魔法が必須なことと、屋外や森林では射出できるのが地面に限られるということだ。砂や土が鍊成対象だと威力が低いことも考えられる。

しかし、今現在においては、文字通り全てが強力な武器となる。「今回もうまくいったな……あとはこれがウサギに通じるかだ」

「……ん、タイミング」

「だなあ……使わせたあと即座に撃たないと」

そう言いつつ彼らは狼の群れだつたものを引きずり、壁の中に鍊成で通路を作り、安全なところで解体を始める。この倒し方の問題は、魔石ごと相手を碎いてしまい、魔石が無事に残っていることは少ないことだろう。どちらかというと肉や皮、牙といった素材が目当てである。運よく魔石が残っていた場合は風華の魔法行使の触媒行きだ。

「……お、魔石残つてた」

「……おー」

もちろん、本格的に解体するのは拠点へ持ち帰つてからだ。しかし、魔石を回収出来た場合、戦闘が楽になるので魔石の取り出しだけは毎回チャレンジしている。今回は幸運なことに1頭の狼から魔石を回収することができた。予想外の収穫に、二人は顔をほころばせる。

そうして、あらかた片付けを終え、神水で魔力を回復させた二人は、再び空中を移動し目的地へと足を進める。

今度は何の邪魔もなく、彼らは目的地へとたどり着いた。そこは、少し開けた小部屋とでも言える空間だった。

二人は早速、鍊成で壁に隙間を作るとそこに入り込み、小さな穴を残して入口を閉じる。あとは蹴りウサギが通るのを待つだけだ。

待つ間に食事と、神水を飲んで魔力を満タンにすることも忘れない。

隠れて待つこと数十分。

別の場所へ移動しようかと考えていたときに、彼らの目当ての獲物はやつてきた。

ぴよこぴよこと跳ねながら移動する小さな獣。間違いない、蹴りウサギだ。

小部屋に入つた蹴りウサギは部屋の中央に来たところで、警戒するよう辺りを見回し始めた。

「半分くらいバレてるな……やっぱ解体したあとは血を洗わなきやだめか」

「……水魔法、頑張る」

そういういつハジメは壁へ、風華はハジメの身体に手をつきそれぞれの魔法を唱える。

「支援」

「鍊成！」

ウサギの真下から1本、さらに左右の壁から2本。計3本の杭が同時に射出される。

「キュー！」

ウサギはそれを驚異的な反応速度で全て回避した。
「ちつ、やつぱよけられたか！」

出来れば、今の攻撃で死んでほしかった。

しかし、ハジメたちは初撃がよけられるのも想定はしている。すぐさま次々と杭を射出し、ウサギを攻撃する。

今度は3方向どころか縦横無尽に飛んでくるそれを、ウサギはかわし、時には蹴り碎くことで被弾をゆるさない。

そして、二人が神水を飲もうと、少し攻撃の手をゆるめたときだ。

「キュウ!!」

蹴りウサギがこちらへと向かってきた。

二人が知るよしもないが、蹴りウサギは二人が隠れている壁側からの攻撃が薄いことから、そこに何かがあると勘で日星をつけていたのだ。

「つ不味い！」

それを見たハジメは飲もうとした神水の容器を捨てて、風華を抱えて壁から転がり出る。それと同時に、蹴りウサギの飛び蹴りが彼らが隠れていたところに着弾した。

二人が隠れていた壁が音を立てて崩れ去る。間一髪のところで危機を脱したはいいが、蹴りウサギに一人が見つかってしまった。

蹴りウサギは二人の姿を認めると、小さい方の獲物へと襲いかかろうとする。

その瞬間、彼らの間に強い閃光が発生した。

「キュ!?」

予想外の光に目を焼かれたウサギは思わずその場に立ち止まってしまう。

それが、小さな獣の運命を決定づけた。

「鍊成」

その言葉と共に蹴りウサギの足は杭によつて地面に縫い付けられる。

次の瞬間、蹴りウサギの細い首は杭に貫かれ、頭と胴が両断された。

蹴りウサギが完全に死んだことを確認したハジメは、膝から力がどつと抜け、その場に尻餅をついた。疲労と緊張感から全身が汗まみれの彼の口に、風華が神水を流し込む。

「んぐつ……んぐつ……ふはあ、ありがとな風華。さつきの閃光手榴弾は助かつた」

「……んつ」

ハジメからの礼に風華は自慢げに胸を張る。

先ほどの閃光は、風華による閃光手榴弾だった。彼女は、ハジメが壁から転がり出たときに彼の耳元で閃光手榴弾を転がすことをささやいていた。そのおかげでハジメは顔を下げて閃光を回避することに成功していた。

その結果、蹴りウサギは見事に視界を潰され、ハジメ達は勝利を手に入れた。

「しつかし、上手くいかないもんだなあ。空歩が切れた瞬間の攻撃」

「……要練習」

彼の作戦は、蹴りウサギの空歩が終わつた瞬間を狙つて攻撃を当てるこことだつた。左右1回ずつ使用されると仮定して、最低4回の攻撃で終わるはずだつたのだが、思いの外蹴りウサギの空歩のクールタイムが早く、てこずらされていた。

まあ、なにはともあれ勝利は勝利だ。ウサギへの閃光手榴弾の有効性も確認できただし、戦果としては上々だろう。

風華は座り込むハジメへと手を伸ばす。

ハジメも彼女の手を取り立ち上がるうとする。

そして、彼は己の勘に従つて彼女の手を引き、転がることでその場から離れた。

直後、彼らのいた場所を鋭い斬撃が通り抜けた。

「グルルルルル……」

絶望の主がその場に現れた。

急襲、そして決着

(くそつなんでだ!?)

とっさに飛び退き、攻撃を回避したハジメの脳内は恐怖と焦りに支配されつつあつた。

背後でべちゃつと水音がする。振り返つてみると、そこには赤い血だまりと、僅かに残つた何かの肉片が転がっていた。ハジメの腕の中の風華は、攻撃のあつた方向をじつと睨みつける。

「……にい、まずい」

彼女の警告にハジメは応えることは出来なかつた。彼はゴクリと生唾を飲む。

風華の視線の先には、2mは超えるであろう巨躯と赤く妖しく光る二つの目。そして、先ほどの斬撃を放つたであろう鋭い爪。

間違いない。ここに住まう階層主である熊だ。熊は、二匹の獲物をじつと見つめていた。

「あ……ああ……」

” 次は逃がさない”

その威圧感のこもつた視線を受けたハジメは、恐怖で身体を震わせる。失つた左腕が痛みだす。彼は風華を抱きしめていた腕を、自然と左腕へと伸ばし傷口をかばう。

なぜこの場に奴がいるのかはわからない。たまたまこちらへとやつて来ただけか、はたまた戦闘音を聞きつけてきたか。（違う、そんなことはどうだつていい。今は急いでここから逃げないと……）

——逃げる？

——ウサギが逃げだしてからでも追いつける化け物相手に？

そう認識したとき、彼は目の前が暗くなつていくのを感じた。

いけると思つていた。あいつを殺せると思つていた。

認識が甘かつた。恐怖とは、そう簡単に拭い去れるものではなかつた。

「グルルルアア！」

熊が咆哮を上げる。それすらもどこか遠くから聞こえてくるように思えて、

「……閃光、カウント3」

「つ！」

小さいけれど、はつきりと聞こえた声に彼は意識を現実へと引き戻す。

熊が発達した腕を大きく振りかぶる。それと同時に、風華は全力で熊へと閃光手榴弾を投げつけ、ハジメは壁へと走り寄る。

「グツ！」

熊は、突如己へと向かってきた物体を迎撃するために腕を振るう。すぐさまそれは切り落とされ、カラッと乾いた音を辺りに響かせた。閃光手榴弾は不発に終わった。しかし、彼らには意識を一瞬でも逸らせれば十分だつた。

「鍊成！」

ハジメは壁に鍊成を発動させ、柱を左右から生やして熊の伸びきった腕を押し潰し固定する。今回は支援魔法を受けていないため、効果はあまりないと思うが、数秒の拘束は出来るはずだ。

しかし、そこは階層主。「グルルア！」とすぐさま腕に力を入れて拘束具を破壊にかかる。鍊成し続けているはずなのだが、3秒も経たずに拘束具にヒビが入る様子を見たハジメは心の中で「化け物め」と毒づいた。

それでも、十分な時間稼ぎにはなつた。

熊は、拘束具を破壊した直後、ようやく眼前に何かが迫つてていることに気づいた。

それは、風華が全力で投げた破片手榴弾だった。

気づいた頃にはもう遅い。それは眼前で爆発し、中に入っていた鉄の破片や狼の牙が熊の目や鼻、口の中に突き刺さる。

「グルア！」

突如視界を奪われた熊は混乱し、腕をめちゃくちゃに振りまわして暴れまわる。

その様子を見て、ハジメと風華はすぐにその場から離れた。

背後からは熊の怒りであろう咆哮が響き渡っていた。

「はあ……はあ……はあ……」

熊から離れたところで、壁に隠れた二人はその場で大の字になつて倒れた。

ある程度呼吸を整えたところで、二人は神水を飲んで喉を潤す。これで手持ちの神水は全て使い切った。

「ごめん、風華」

どうにか上体を起こしたハジメは、風華へ礼を言う。彼女の言葉がなかつたら、今頃は二人そろつて無惨に引き裂かれていたかもしない。

「……いい、の。それよ、り」

「ああ……」

彼らが入ってきた側の壁からドスドスと音を立てて何かが通りすぎていく。十中八九あの熊だろう、やつは自分たちを探しまわつているようだ。

「どうするか、あいつ」

「……」

「……倒す、か？」

「……っ」

風華の身体が小刻みに震え出す。彼女は、最初に熊に襲われた状況が脳裏に浮かんでいた。

前回、ハジメは自分をかばつて左腕を失った。また、自分が足かせになつてハジメから何かが、最悪の場合、命が奪われてしまうのではないか。

死ぬのは怖い。しかし、それよりも兄を失つて生き残つてしまふの

はもつと怖い。

兄のいない世界に価値なんてない。

そんな風華の心情を察して、ハジメは優しく彼女の頭に手を置く。

「あ……」

「正直、無理してまでやることじゃない。僕も死ぬのは怖いし、風華のいない世界なんて嫌だ」

だから、とハジメは言葉を続ける。

「僕は死ぬつもりはないし、風華も死なせない」

「……ん」

「それに、白崎さんと約束したでしょ。それを果たすためにも生き残

らなきや」

ライバルとの約束。それを聞くまですっかり忘れていた彼女は、ポカンと口を開ける。それがおかしかったのか、ハジメはクスッと笑つた。

約束。ああ、そうだ。約束だ。

「約束は守らなきや、だろ？」

「……ん、当然」

約束を守るためには、あの熊を倒して強くなる必要がある。

どのみち倒す必要がある相手だ。その倒す時が思つてたよりも早くきただけではないか。

そして、やつは今、視覚や嗅覚が潰れているはず。倒すなら絶好のチャンスだ。それは、ハジメも理解しているからこそ、今倒そうと言つたのだろう。

風華は身体の震えが自然と消えていることに気づく。

「……ん、わかつた。やろう」

「ああ、あいつを倒して、食つて、生き延びる」

「そしてあの女に見せつける」

「あの風華さん、今何ど？」

ハジメとしては確認のために聞き直したい言葉が聞こえてきたが、

風華はそれを無視して立ち上がる。

「……ほら、にい。いこ」

はあ、とため息をついたハジメはその後を追うのだった。

階層の主の後を追うことはそう難しいことではなかつた。熊が進んだ道には、血で出来た足跡や血痕が残つていた。この足跡はウサギの死体を踏みつけでもしたのだろう。

ハジメと風華は慎重にその跡をたどる。魔力を温存するために空歩で移動するわけにはいかない。

途中で何頭もの狼やウサギの引き裂かれた死体を見つけた。どうやらあの熊は自分たちが思つていてる以上に怒り心頭らしい。

そして、この階層に存在する広間の1つに着いたとき、二人はバチイツ！という電気の音と何かの弾ける水音を聞いた。

それを聞いた二人はとっさに岩陰に身をひそめ、中の様子を伺う。広間の中は地獄とも呼べる様相を呈していた。部屋中の床や壁はところどころが血で赤く彩られ、その素になつていたであろう狼の死体が至るところに散乱している。

そして、部屋の中央では狼の最後の1頭が無惨に命を散らしていった。

「グルルアアアア!!!」

全ての息の根を止めた熊はまだ足りないと言わんばかりに怒りの咆哮を上げる。

「ずいぶんとご機嫌だな」

突然、熊の背後から声が聞こえた。その声に、獣は咆哮を止め、後ろを見た。

そこには自身へと迫る杭と、小さな生き物がいた

間違いない、自分を怒らせた餌共だ。

飛んできた杭を、熊は何事もなかつたかのように叩き落し、餌をじろりと睨みつける。

「まあ、無理だよな」

ハジメは、その視線を意に介さず熊の目を睨み返す。それが気に食わなかつた熊は再び咆哮を上げ、突撃する。

「それじゃあ……左腕の借り、返させてもらうぞ」

「……支援」

その咆哮を受けて尚、ハジメは怖気づくことなく鍊成を発動させた。

すると、周囲の壁から何本もの杭が熊へ向けて射出される。全方位同時に飛んできたそれを、頭に血が上つていた熊は判断が遅れ、回避することが出来ずに杭に貫かれていく。

それでもなお、熊はハジメたちへ足を止めなかつた。

「これでもダメかよ……だつたら」

「……これでも、くらえ！」

今度は風華が地面へと手をつく。

正確には、ハジメが地面から鍊成で露出させた鉄線の上だ。

風華は鉄線に向けて纏雷を最大出力で発動させる。さらに、ダメ押しと言わんばかりに、先ほど回収したばかりの狼の魔石を触媒に使用し、威力を上げる。

鉄線が向かう先は、ハジメの攻撃で傷つけられた熊から流れる血液だ。

「グルルアアアアア！？！」

鉄線を辿り、全身から流れる血を辿つて、体内に電撃を流れ、感電した熊は、流石に足を止める。

全身から煙を上げ、その場に倒れる熊。しかし、流石というべきか、息も絶え絶えながら熊はまだ生きていた。

「……まだ生きているのか」

そういうとハジメは地面を鍊成して熊の身体を抑え込む。すでに死に体にも関わらず、熊はハジメを睨みつける。その姿に、ハジメは左腕の仇である獣に思わず感服してしまつた。

「……強くなるために、お前の命を食わせてもらうぞ」

ハジメはズボンのポケットから1本の黒い棒を取り出す。それは、

彼が拠点の壁の中から魔力の伝導性がよく、とても丈夫な鉱石をかき集めて鍊成で作りあげた、金属棒だつた。

ハジメは鍊成で極限まで鋭くしたそれを、熊の頭へと突き刺し、更に内部で鍊成することで熊の脳を破壊した。

階層の主は完全に息を引き取つた。
それを確認した一人の勝者は、互いをたたえるように拳をぶつけ合つた。

鍊成を利用してどうにか持ち帰つた熊の遺体は、使えるところを全て使うことにした。そして、その肉を喰らつた二人は大量のステーキスと風爪という技能を手に入れた。

ちなみに、肉の味は相変わらずのものだつた。

ハジメたちが階層主である熊を食べている頃。

その時間帯は空が赤く色づき始める時間であり、働く人々は「今日はあと一息だ」と気合いを入れ直す。

それは、ハイリヒ王国にあるウォルペン工房も例外ではない。

常にカンツカンツと鉄を打つ音が絶えない工房には、ウォルペンを始めとした筋骨隆々の男女が今日も鍛冶に精を出していた。

小窓から空を見たウォルペンは「もうこんな時間か」と思い、最近雇つたアシスタントへ声をかける。

「おーい、5番の棚の材料を一つ持つててくれ！それが終わつたら今日は上がつていいぞ！」

「はーい！」

すると、この場には似合わないであろう透き通った声が工房の中に響き渡つた。

工房の職人たちとはその声が聞こえるたびにやる気を即座に回復させ、それと同時に二人がこの場にいないことに寂しさを感じる。

「よっこいしょ、と。これでいいんですね、ウォルペンさん」

「ああ、そうだ」

「はい、それではお先に失礼しますね」

そういうと彼女はエプロンを脱いで、帰る準備をする。

そして、お疲れさまでしたー！と元気にウォルペンたちに挨拶をして工房を去つていった。

「おう、気を付けて帰れよ。嬢ちゃん……全く、あの坊主共はどこで道草食つてるんだ」

その背中を見て、彼はこの場にはいない少年少女へとつぶやく。

彼女の名前は白崎香織。

彼女は、ハジメがかつて働いていた工房でアシスタントを務めていた。

残された彼女たち

「」

どこからだろう、声が聞こえる。

「崎さん——」

「」

いつまでも聞いていたい二人分の声。

「白崎さん——」

「——で」

ハジメ君と風華ちゃん。二人の声。

「白崎さん——」

「——んで」

嬉しいな。私、ハジメ君に名前を呼ばれるだけでいつも嬉しかったの。風華ちゃんと話すのが楽しかったの。

「ねえ、白崎さん——」

「ねえ、なんで」

でも、今は、今だけは。

「ねえ——」

「白崎さん——」

「なんで——」

「僕たちのこと助けてくれなかつたの?——」

私の名前を呼ばないで。

「つ!?

ハイリヒ王国王宮の、生徒たちが寝泊まりしている部屋の一室。最上級であろう毛布を跳ね除け、香織はガバッと上体を起こした。呼吸を荒げる彼女の全身は汗にまみれ、濡れた寝間着が肌に張り付く感触が彼女に不快感を与える。

「はあ……はあ……はあ……はあ」

少し無理をして呼吸を整えた彼女は、窓の外を見やる。

空はまだ真っ暗で、太陽が顔を出すにはまだ時間がかかりそうだ。くうくうという同居人の寝息をBGMに、空に輝く星々が彼女の目に写る。

「……また、か」

まだ夜であることを確認した香織は、備え付けの椅子に腰かけると、顔を両手で覆つた。

「ハジメ君……風華ちゃん……」

香織は、今ここにいない二人の名前を呟く。

彼女の長い1日が今日も始まった。

香織たちがオルクス大迷宮から帰還して10日が経つた。

大迷宮を脱出した後、香織は危機を脱した安堵から気絶し、目を覚まさなかつた。介抱した雫たちが言うには、王宮に帰つてくるまでは寝込んでいたらしい。

幸い、彼女は3日ほどで目を覚ました。目覚めたときに取り乱すことはなかつたのだが、そこからが香織の地獄の始まりだつた。

香織は、目を覚まして以来、寝るたびに夢を見るようになつた。原型を留めていないくらいにぐちやぐちやになつた肉塊のハジメと、全身を炎に焼かれている風華。

そんな姿になつっていても、目だけは香織を見つめている。それらは彼女を責めるように問いかけるのだ。

”なんで助けてくれなかつたの?”と。

二つの死体が香織を責める夢。夜寝るときはもちろん、ちよつとし
た昼寝であろうと彼女は決まってこの夢を見るようになつた。

目覚めたばかりの頃は、寝るたびに飛び起き、錯乱したり嘔吐を繰
り返していた彼女だが、現在は少し落ち着いて眠りが浅い程度になつ
ている。

おかげで、彼女はこれまで一度もぐっすりと眠れていない。

「ここ最近の彼女はうつらうつらと舟をこぐ姿がよく見られた。

「ふわ～ああ……」

「香織……無理はしちゃダメよ」

昼下がりの午後、人もまばらな王宮の訓練場にて。

隅っこに座つて零と美穂の訓練を見学していた香織は、いつものよ
うに首をカツクンカツクンさせていた。

事情を知らぬ者が見れば可愛く思えるであろうそれは、事情を知る
零にとつては心配事でしかない。

「あ……零ちゃんお疲れ様。はい、タオル」

「ありがとう、香織」

「白崎せんぱーい。こつちにもお願ひしまーす……」

休憩に入った零へ、香織はタオルと水を渡した後、大の字で倒れて
いる美穂にも同じものを渡した。

「んぐ……んぐ……ふはあー生き返るうー」

美穂は、上体を起こすと香織からもらつた水を飲み干すとタオルで
汗を拭く。

「二人ともお疲れ様。相変わらず凄いね」

「うんにや、それほどでもないつすよ、うちの父ちゃんとかじいちゃん
たちにはまだまだ」

「ええ、まだまだね」

「ええ……」

香織は先ほどの光景を思い出す。

格闘技の美穂と剣術の零。人外じみた訓練の光景はオルクス大迷
宮への遠征以前でも繰り広げられていたが、遠征後はさらに激しく
なつていった。

二人の訓練が一般生徒はおろか、光輝でさえ危険ということで訓練場の片隅が二人専用スペースになつていてるほどだ。

訓練場の床や壁にヒビが入つていない頑丈さは流石王宮の設備と言つたところだろう。

「私たちのことはいいのよ。それより香織、貴女のほうが心配だわ」

「そうですよ白崎先輩。今日も朝早かつたんでしょ」

「……うん、ありがとう」

零と美穂は、香織が悪夢を見始めたときから同じ部屋で寝泊まりするようになつた。これは香織が変な気を起こさないように監視する目的もある。

最初は零だけの予定だったのだが、美穂もそれに付いてきた。

「いやー零先輩が白崎先輩みたいなちょー美人さんと一緒に寝るとか気が気じやないですしね？」

美穂は笑いながら訳を話していたが、香織は、彼女が少し無理をして笑つているように感じた。彼女も一番仲がよかつた風華がいなくなつたことに不安を隠せなかつたのだろうか。

それはそれとして半分くらい目が本気だつた気もするが。

「あ、そうだ。一人とも、治癒魔法かけるからそこに座つてね」

香織がそういうと、二人は素直にベンチに座つた。香織は二人に手をかざし、治癒魔法を発動させる。

「……ん、ありがとね。香織」

「ありがとうございます。てか、結構上達してきてますよね治癒魔法」

「あはは……うん」

原因是目の前なんだよなあ……と香織は苦笑する。

なんせこの二人、訓練が激しすぎるおかげで休憩に入る頃には全身傷だらけなのだ。しかもたまに休憩前にやらかすときもあるので、自然と治癒魔法をかける回数は増えていく。

「何度も言うけど、腕とか足とか飛んでも私じゃ治せないからね？そこまでやらぬでね？」

「大丈夫よ。ちゃんと加減は出来るわ」

(本当かなあ……)

「まあまあ、白崎先輩も訓練になるからいいじゃないですか。なんせ、今ここガラガラなんですから」

そう言うと、美穂は訓練場をぐるりと見渡す。彼女の言う通り、訓練場内はあまり人がおらず、せいぜい訓練中の兵士たちとそれに交じっている数人の生徒くらいだ。オルクス大迷宮へ挑む前のような活気はどこにも見受けられない。

これも全て、ハジメ達が落下し、死亡したことが原因だ。クラスメイトの死というのは彼らに改めて自分たちはどうするのかということを考えさせるには十分だつた。死んだというのは国王が発表したことであり、生徒たちはハジメ達が死んだのだと信じていた。

無論、この3人は信じていない。信じたくない、といった方が正しいのかも知れないが。

「そう、だね……」

「あ……ごめんなさい」

美穂の頭を零がはたく。スパンツと小気味いい音が響いた。

「大丈夫よ香織。南雲君たちは絶対に生きてる。貴女が信じなくてどうするの？」

「零ちゃん……うん、そうだよね。ハジメ君と風華ちゃんは絶対に生きてる。ハジメ君が守ってるんだもん」

零の言葉に、陰つっていた香織の顔に笑みが少し戻った。

「お、いたいた。シズク、すまないが話しがあるんだ」

そのとき、訓練場にメルドが入ってきた。彼は零の顔を見るなり彼女を呼び出す。

心当たりが無いのか、彼女は香織と顔を見合させ二人してキョトンとするが、無視するわけにもいかないので零はメルドの元へと向かった。

痛みに呻く美穂とその頭を撫でる香織が零を待つていて。二人に近づく影があつた。

「香織、ここにいたのか」

それは天之河光輝だつた。彼を毛嫌いしている美穂は、光輝を見るなりグルルと威嚇する。

「光輝君……何か用？」

「香織、南雲のことは忘れるんだ」

彼は、真正面から堂々と彼女の地雷を踏みぬいた。

「……………」

香織の静かな怒りが頭に置かれた手を伝つて美穂に伝わる。それを受けた彼女の全身を一瞬だけ震えが駆け上がつた。

香織が黙りこむ中、光輝は気づかず言葉を続ける。

「現実を受け止めるんだ香織。南雲は間違いなく死んでいる、あの高さから落ちて生きているはずがない。確かに残念だつたかもしれないけど、俺たちは戦わなくちゃいけないんだ。死んだ人間をいつまでも引きずっている暇はないはずだろ」

「……………」

香織は俯いて表情が見えない。怒りで震える彼女に、美穂は「アワワ……」と震えあがる。

その怒りに光輝は気づかない。

「そもそも、南雲が先頭に出るべきじゃなかつたんだ。俺があそこにいたら風華も救い出すことが出来たはずだ。それに……」

「光輝君」

「怒るよ？」

「…………ッ?!」

香織は顔を上げ、光輝の目を見てそういつた。その視線を受けた彼は言葉を詰まらせる。

彼女は無表情で光輝の目を見つめていた。

「か、香織？一体どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもないよ。ハジメ君が死んでる？それって光輝君やこの国の人達が言つてるだけだよね？」

「だけど！香織もこの目で見ただろ！南雲が落ちていくのを！あの高さじや死んだと考えるのが普通だろ！」

「でも、この世界は私たちの普通とは違う」

「ッ！」

「ね？そう考えたら生きているのが普通かもしれないでしょ？」

それに、と彼女は言葉を続ける。

「風華ちゃんを見てればわかるよ。ハジメ君は約束を絶対に守る」

「約束……？ 香織、それは」

「だからさ、光輝君」

「ハジメ君が死んでるなんてことはありえないよ」

香織はいつものように、光輝に笑顔を向ける。

しかし、その表情は彼が今まで見たこともないくらいに優しい笑みだつた。

その笑みが、何故だかわからないが彼は気に入らなかつた。

「あ、そうだ。お水取つてこなきや。美穂ちゃん、手伝つてくれる？」

「え？ あつはい！」

それじやあね、と彼女たちは訓練場を去つていつた。

「香織……なんなんだよそれは……」

光輝のつぶやきは彼女には届かなかつた。

訓練場を出たところの通路で香織と美穂は零と合流した。

「ごめんなさい。入るタイミングが難しくて」

そういうと零は頭を下げる。

「ううん、大丈夫だよ。それに、光輝君にも生きてるつて思つてほしかつたし」

「どうでしようね……それはそうと。零先輩、結局話しつてなんだつたんですね？」

美穂がそういうと、零は少し考えてから口を開いた。

「明日、ウォルペン工房へ向かうことになつたんだけど……香織、貴女も来る？」

工房へ

「ウォルペン工房……つてハジメ君がアシスタントに行つてたところだよね？」

「ええ、それで合つてるわ。私に受け取つてほしいものがあるつて」「あれ？ 雪ちゃん、いつ依頼したの？ ていうかそれつて何なの？」

「さあ……全く心当たりが無いわ」

（……南雲先輩、ちゃんと考えててくれたんだ）

工房からの謎の呼び出しに香織と雪の頭に？が浮かぶ中、その用事が何なのかを美穂は一人理解する。

「とりあえず、明日行つてみません？ そしたらわかるでしようし。あ、私も一緒に行きますよ。道案内できますんで」

「……そうね、美穂の言う通り明日行つてみればわかることね。それじゃあ美穂、明日はお願ひね」

了解でーす。と美穂が返事をする中、香織はどうするのか考えていた。

「ウォルペン工房があ……そういうえば、ハジメ君が何をやつていたのか私知らないな……」

ウォルペン工房。オルクス大迷宮へ遠征するまで、ハジメが修行の場として利用していた王国一番の鍛冶屋。それが香織の知っている情報の全てだ。

何となく想像はつくが、ハジメがそこでどういったことをしていたか詳しいことを彼女は知らない。何度か聞いてみようと思ったのだが、彼は工房に泊まることがよくあり、城に戻ってきたとしても疲労困憊で中々話しを聞くことが出来なかつた。

ならばと休日が与えられたときに訪れてみようとすれば、そういうときにもまだ幼いランデルに遊んでとせがまれ、その機会は悉く潰れていった。断ることは簡単であつたのだが、子供の純粹な願いを断ることを彼女は出来なかつた。途中で抜けようにも光輝が混ざつて尚更機会を逃したのもある。

ちなみに、毎日城に戻つてきていた風華に聞いてみても「……内緒」

と言われ、結局聞けず仕舞いである。でもかわいいから許した。

まあ会えたら会えで、ハジメの少し引き締まつた身体つきやら首筋やらちよつと汗の混じつた彼の匂いやらで興奮してキュンときて色々と大変になりそうなのを抑えながら彼と話していた香織にも原因はあるのだが。

「ありや意外。先輩のことだしてつきり一度は見に行ってるもんだと」

「うん、私も何回か行つてみようつて思つてたんだけどランデル殿下が……ね？」

「あー、あのちびっこ殿下。よくまあ先輩も付き合つてあげてますねえ」

「やつぱり断りづらくて。ちょっと遊んであげるだけだしね」

ただ……と香織は少し困った顔をする。

「殿下の顔、少し赤いことよくあるんだよね。風邪とか引いてないといいんだけど……」

「アーウンソウデスネー」

南雲先輩のこと考えながら鏡見てこい。そう言いそうになるのを美穂は必死に我慢した。

ランデルが香織に向ける感情は間違いなく、恋愛のそれである。しかし、香織は子供のじやれ合いと捉えているので少年の淡い恋心に気づくことはないだろう。

「で、どうするの？ 香織」

少し話題がずれそうになるのを修正するべく、零は再度問い合わせる。先ほどの光輝との会話が聞こえてなかつたわけではないが、香織が辛くならないかを心配したのもある。

それに対しての香織の答えは決まつていた。

「私も行くよ。ハジメ君が何をしていたのか気になるもん」

香織は力強くそう答える。彼女の顔に不安などの表情は一切見られなかつた。

（本当にいらぬ心配だつたみたいね）

自分の心配が杞憂に終わり、内心ほつと一息ついた零は「わかつた

わ」と了承するとググッと身体を伸ばす。

「さて、休憩は終わりよ美穂。後半始めるわよ」

「はーい了解でーす」

そう言つて、二人は訓練場へと戻つていった。

その日、香織は遠征から戻つてきて初めて悪夢を見ることがなくぐつすりと眠ることができた。

そうして迎えた次の日、正午少し前の時刻に彼女達三人は城下にあるウォルペン工房の前にいた。

「ここがウォルペン工房……結構大きいんだね」

「見た目は地球の鍛冶屋さんと似ているかと思ったのだけど、全然違うのね」

「そらまあ寝泊まりする場所も兼ねてますし。城の周辺だと一番お弟子さん抱えてるところですよここ」

それでもそんなにいる訳じゃないけど、とトータスの鍛冶屋を初めて見た一人に美穂が解説を少し加える。

「城の周辺だとここほどじゃないけれど大きいところがほとんどですよ」

「……やけに詳しいわね」

「まあ、あたしは風華の送迎とかでちよくちよくこっちまで来てたんで、ついでに散策してただけですよ」

「そう……私も行けばよかつたわ」

詳しい理由を知った零は、そういうえば風華はよくハジメや美穂に背負われて帰つてきていたなと思い出し、少し後悔したように呟いた。

「零先輩？」

「なんでもないわ」

八重樫零。好きなことは可愛いものを愛すること。本人は隠しているつもりだが、彼女と親しい人物のほとんどには周知の事実である。

「ま、いつか。んじやさつきと入つて用事済ませちゃいましょ」

零のことを気にしないことにした美穂は勝手知らずといったように工房の扉を開けて中に入り一人もそれに続いた。

瞬間、カンツ、カンツと金属を打つ高い音が彼女達の鼓膜を静かに揺らす。

流石、王国一番の鍛冶屋といったところか。武具屋も兼ねているらしいそこには大小さまざまな武器が並んでいた。少し暑く感じるのは奥の作業場から漏れる熱気のせいだろうか。

「いらっしゃい、つてミホじやねーか。久しぶりだな」

「こんにちはー。親方の客連れてきたよ」

わかつた、と店番をしていた男が店の奥に行くと、程なくして一人の老人が姿を現す。

「おう来たか。遠征に行つて以来だな」

「……まあ、色々とあつてさ」

少しそんみりとした空気が流れる。ハジメと風華が死亡したという情報は城下町の国民は皆知っている。特に交流のあつた工房の人たちの悲しみは誰よりも大きかつたことだろう。

「それより！ 零先輩を呼んだってことは出来たんでしょう？あれ」

そんな空氣を払拭するように、美穂は明るい声で本来の目的を告げる。ウォルペンも「そうだな」とうなずくと面識のない二人に自己紹介をし、零の方を見やる。

「お前さんがシズクであつてるんだよな？」

「ええ、そうです。初対面ですよね？どうしてわかつたんですか？」

「んなもん身体つきを見りや一目でわかる。あなたの手や腕は剣を振る奴の形をしてる。逆に、隣の嬢ちゃんは荒事とはさっぱり無縁っぽいしな」

無駄に生きてるじじいをなめんじゃねえ、と彼は笑うと零もなるほどと納得した。

ついてこい、と彼は彼女達を作業場へと案内した。

「ところでそつちの嬢ちゃんは誰なんだ？」

「南雲先輩の第二夫人」

「坊主もなかなかやるじやねえか」

「違うからね!違いますからね!」

「え? だつて先輩、南雲先輩のこと名前で呼んでるじゃないですか。これそういうことでしょ?」

「／＼＼＼＼!?！」

作業場へ入った彼女達を迎えたのは凄まじい熱気と店でも聞こえた甲高い音だった。

入った瞬間、香織と零は耳を塞いだ。熱気に対しても耐性のステータスが上がっているおかげで気にするほどでもないのだが、脳に響く音だけはどうしても耐えられそうにない。時折、怒号が聞こえるのはその音に負けないためだろう。

その中をウォルペント美穂はするすると彼の作業場へ歩いて行く。二人も慌てて追いかけると、そこには一振りの武器があつた。

トータスでは見慣れない、しかし零にとつてはよく見慣れた武器。「これ……刀? なんでトータスに……」

彼女の疑問は最もであろう。城で見た剣といえば光輝の聖剣のような中世の騎士の使うような両刃剣かサーベルのどちらかだった。「それ、あたしが南雲先輩に頼んだんです。零先輩、今使つてる剣は使いづらく感じてたでしようし、プレゼントです」

「ま、本来なら新人に客を取らせるなんぞ絶対にさせねえんだがな。このカタナ? つてのは坊主の方が俺より詳しいから特別にやらせた」「これはその試作第一号ですよ。知つてるつていつてもあたしも南雲先輩もド素人ですし。てことで感想を聞きたくて」

零はそつと刀を持ち上げ、正面に構え、数回振り下ろす。

「……まだ、少し違和感が強いわね」

「ありや」

「でも、今までの剣よりも格段に使いやすいわ。南雲君にはお礼を言わないとな」

そう言つて刀を置くと、彼女は美穂の方を見て、微笑む。

「もちろん、貴女にも。ありがとう美穂、おかげで私はまた刀を握れたわ」

「えへへ、ど、どういたしまして」

その笑みを受けた美穂は顔を赤らめていた。

「さて、シズク。少し振つてわかる通り、そいつは未完成だ。本来なら坊主が改善点を聞いて修正するんだが奴はいねえ。てことで俺がやることになるんだが、いいな?」

「こちらからもお願ひします。私もこのままで持ち出すのは不安なので」

「よしきた、そんじゃあ早速だがこの紙に直してほしいとこを……」

そうして零とウォルペンは改善点の話し合いに没頭していく。

「零ちゃんいいなあ。ハジメ君が作つたものもらえて」

それを椅子に腰かけて見ていた香織は少しむくれていた。

「いいなー」

「まあそうむくれないでくださいよ」

零が話し合いに集中できるよう離れた美穂は香織の方へと移動する。

「だつて、二人がハジメ君の初めてのお客様でしょ? 初めては私がよかつたのに……」

「なんとなくやばそうに聞こえるのはスルーしますね」

ちなみに、そつちの危惧していた方が手遅れなのを、彼女はのちに知ることになる。

「戻ってきたときになんでも請求すればいいんですよ。今のところあたしもあれ一本しか頼むつもりないですから」

「そうだけどー…」

そうなつて いる香織をどうにか美穂はなだめようとする。

そんなとき、一人の職人がウォルペンの下へとやってきた。

「親方、今大丈夫ですか?」

「ん?なんだ、どうした」

「今、相方が火傷しちまつて、それで薬を塗ろうと思つて薬棚を見たらビンの中身がさっぱりないんです」

「なんじゃと!?

それを聞いたウォルペンは大変驚いていた。

「それは本当か!?」

「はい、念のため他の棚も探してみたけど、どこにも見当たらないんです」

「そうか……シズク、すまないが一時中断だ。俺は薬を調合しなきゃならん」

そういうと、ウォルペンはすぐに棚へ駆け寄り調合の準備に取り掛かる。

「え、確かに塗り薬つて親方が絶対に切らさないようにしていった親方秘伝のあれだよね？」

「ああ、切れそうになつたらすぐに言えつて何度も言われてたあれだ。普段なら絶対にこんなこと起こらないはずなんだが……」

そういうと、職人は表情を曇らせる。まるで心当たりがあるといつたようだ。それが香織はすぐに理解できた。

「ハジメ君と風華ちゃん、ですよね。二人がいなくなつたことの影響が出てる」

「……ああ」

香織の問いかけに、職人は絞り出すような声で返した。

「あんた達がどこまで把握してるかは知らんが……今時の若者は鍛冶なんてやりたがるのは少数だ。それは王国一番だなんて言われてるうちもそうだ」

「……はい」

「そんな中で、俺たちの息子と同じくらいのあいつらが頑張っているのは、俺たちにも活力をくれるもんだつた。あいつは腕が良かつたらまだ負けてられねえな、つてよ」

「なあ、何であいつは、ハジメ達は死んじまつたんだ!?なんで協会の連中はハジメを悼んでねえんだ!?こんなのおかしいだろ!」

それは、この場、いや、ウォルペン工房に所属している者全員が思つてのことだつた。

ハジメは彼らにとつて貴重な鍊成師を持つた若者だつた。風華も、鍊成はできないが、彼らにとつては可愛い孫や娘のような存在だつた。

彼らにとつて、ハジメは戦えない無能の存在ではなかつた。自分たちを追いかける希望の星だつた。

それなのに、貴族や教会の連中は死んでよかつただのこれで恐怖することはないだのと好き勝手に言い放題だ。

職人は床に崩れ落ち、拳を床に叩きつける。

その姿に零は言葉をかけることができず、美穂は黙つて背中をさすつていた。

そして、彼の悲痛な叫びを聞いた香織は一つの決心をする。

「火傷をした人のところへ連れていつてもらえませんか。私が診ます」

工房へ：2

香織が火傷した職人のところへ向かうと、中年の女性職人が作業場から少し離れたところで、左腕を水の張ったバケツに突っ込んで患部を冷やしていた。

「大丈夫ですか？」

「平気よこんなの、いつものこと……あたた」

女性は強がつて笑おうとするが痛みで顔をしかめる。

「ああもう、無理しないでください。失礼します」

「え？ ちよ、あんた？」

そう言うと香織は女性の静止する声を無視し、バケツから彼女の手を引き抜き火傷を診る。酷く焼けただれた腕が香織の目に入った。

「……つ」

「ああもう、若いのがこんなもん見るんじゃないよ……ほら、あたしのことはいいからさ」

「いえ……大丈夫です」

その光景は、彼女が連日見ていた悪夢を思い起こす。フラツシユバツクしたことに一瞬ひるんだ香織は、しかしすぐに気を引き締める。

「今から治癒魔法をかけます。違和感を感じるでしようけど我慢してくださいね」

「治癒魔法？ そういうや、あんた協会の服装でもないし、ここらじや見ない顔だねえ……まさか、召喚された勇者の仲間かい？」

女性の疑うような声に香織は思わず彼女の顔を見る。女性は香織をにらみつけていた。

「もし、そだつてんなら助けはいらないよ。むしろこつちから願い下げだ」

そう言うと、女性は香織の手を強引にはがすと、じゃぽんつとバケツに腕を突っ込みそっぽを向く。

「……私達が、憎いですか」

香織の呟くような問いかけに女性はすぐに答える。

「ああ、とつてもね。あんたちはハジメを、フウカを、あたしらの星を奪つたんだ。他のやつらがどう思つてるかは知らんけどあたしや許す気はちつともないね」

それはもつとも怒りだと香織は感じた。非戦闘職であつたが、戦うことを選んだのはハジメ達自身だ。しかし、彼らを守れなかつたのは香織たち戦闘職に非があるだろう。

ふと周囲を見回すと、女性と同じ目をした職人たちが彼女を見ていた。

彼らも、王国の上層部へ抱く気持ちは同じなのだろう。

しばし、静寂が流れる。気づけば誰もが手を止めて悲しみにくれていた。

「ごめんなさい……」

「いいよ、謝られたつてあの子たちは帰つてこないんだ」

香織の口から漏れた弱弱しい謝罪に、女性は諦めたように返す。

しかし、その言葉は香織に力を与えた。

「大丈夫ですよ、ハジメ君たちはきっと、ううん、絶対に帰つてきます」先ほどの謝罪とは真逆の、力強い声色に女性は香織の方をはつと見やる。

香織は、女性の目をしつかりと見ていた。

「あんた、何を言つて……」

「約束、したんです。ハジメ君と風華ちゃんと私とで。知つてますか？ハジメ君、風華ちゃんとした約束は必ず守るんですよ？」

それに、と彼女は言葉を続ける。

「信じてますから」

「っ！」

「私は一人が生きてるつて信じています。だから、皆さんも信じまよう？」

「だ、だけど、何を根拠に……」

他の職人がそう言つた。彼に向つて香織は少し考える素振りを見せると、

「女の勘……つてこの世界にもあります？」

そう答えた。

再び作業場を静寂が満たす。それを破つたのは今度は女性の方だった。

「ふ、くくく」

「？」

何かおかしなことを言つただろうか。そう問い合わせようとした瞬間、女性は豪快に笑い出した。

「あつはははは!!!」

「つ!?

それは香織だけでなく他の職人も戸惑わせる。そうしてひとしきり笑つて落ち着くと、女性は指で涙を拭いながら香織に謝つた。

「いやあ、ごめんごめん。女の勘、ね。それなら十分信じられるわ」

女性はすつきりとした表情で職人たちを見渡す。

「確かに、今のあたしたちがすることはあの子たちが死んだことを悲しむことじやない。生きてるつて信じてやることだ」

「そうだよな……なんで俺らは簡単なことに気づかなかつたんだ！」

「ああそうだ！」

女性の言葉に彼らは段々と活気を取り戻していく。

「あたしはエルヴィ。どうやら、あんたは他の奴らとは違うらしいね。あんたなら信頼できそうだ」

そう言つてエルヴィは香織の前に腕を出した。

「……ふう、これで大丈夫です」

「ありがとう。……勇者の仲間はすごいね。あたしらが知つているものと全然効果が違うわ」

香織の治癒魔法を受けたエルヴィは、しげしげと火傷があつた箇所を眺める。彼女の腕はまるで火傷などなかつたかのようにきれいな肌を見せていた。

「それでも、念のために薬を塗つてくださいね」

「あら、完璧に見えるけど?」

「今使つたのは火傷専門の魔法じゃないですから。きちんとした薬を塗ることをおすすめします」

「ふーん……ねえ、あの子がやつてたこと、気にならない？」

「え？」

エルヴィイが何か提案をしようとしたとき、ウォルペンが零たちを伴つて調合した薬を持ってきた。

「すまねえ、待たせちまつた。次からは気を付け……」

「ねえ親方！」

エルヴィイはウォルペンの言葉を遮り、香織を抱き寄せる。

「この子、雇えない？」

「は？」

「えつ？」

その言葉に、ウォルペンと香織は少し固まつた。程なくしてウォルペンは薬を香織に渡し、そばの椅子に腰かける。

「お前な……坊主は鍊成師だつたから雇えたが、その嬢ちゃんは治癒師だ。そいつを鍛冶場で雇おうつてのはいくらなんでも無理がすぎるぞ」

「えー、でもこの子がいたら怪我したときに協会のやつらに頼る必要ないんだよ？ それに、アシスタンント二人欠員してるんだから人手ほしいじゃない」

その言葉にウォルペンは困つたように頭をかく。

実際のところ、エルヴィイの言うとおり人手はほしい。それに、治癒師がいれば怪我をしたときにわざわざ協会まで行く手間を省けるのもありがたいことではある。

しかし、香織は魔人族と戦うために呼ばれた身。言うなれば国が管理していると言つてもいいだろう。その貴重な戦力をたかだか一つの工房のために遊ばせておくとは思えない。

「あの、私からもお願ひします。ここで働くさせてください」

そう言うと、香織は頭を下げた。

「嬢ちゃん……」

「ハジメ君がここで何をしていたのか知りたいし、こんなにもハジメ

君のことを想つてくれる人たちの助けになりたいんです」

「ほら、本人もこう言つてるしさ。な！いいだろう？」

ううーんとウォルペンは唸る。本音を言えばほしい人材だ。しかし、どう交渉したものかと頭を悩ませる。

「もう勝手に来ちやつてもいいんじゃないですか？」

そんなとき、美穂が面倒くさそうに呟いた。

「だつて、今のあたしたちつて訓練どころじやなくてほほほほ自由じやないです。訓練させたいなら、まずは他の先輩方のメンタルケアどうぞつてなりますし」

「それに、あの二人の最後のときは貴女も覚えているでしよう？あれで火に恐怖を覚えている人が何人かいるのよ。何か言われてもその人達のためつて言えば大丈夫じやないかしら」

雲の言うとおり、生徒たちの中には火を怖がる者も数名いるのが現状だ。目の前で人が火だるまになるというのは、いくらステータスの強い彼らでも心に恐怖を刻みつけるには十分すぎたのだ。

「じゃあそれでいつちやおうか。てことで明日からよろしくね」

エルヴィイはそういうと香織の頭をやや乱暴に撫でる。そのエルヴィイの頭にウォルペンは拳骨を一発落とした。

「あだあ!?」

「勝手に指揮つてんじやねえ、お前はさつさと薬を塗つてこい！」

怒られたエルヴィイはぶつくさとぼやきながら火傷のあつた箇所に薬を塗り始めた。

「つたく……おい嬢ちゃん」

「はい！」

ウォルペンは、それを呆れた様子で一瞥すると香織に声をかける。

「明日、朝の9回目の鐘が鳴る前にここまで来い。雑用くらいしかさせることはねえが雇つてやる」

「ありがとうございます！」

こうして、彼女の工房での雑用生活は幕を開けた。

封印部屋

「改めて見ると壮大な扉だな」

「……おつきい」

オルクス大迷宮を下ること約50層。ハジメと風華は巨大な扉の前に立っていた。

扉の全長は約3メートル、豪華な装飾が施されたそれの左右隣には半分ほど壁に埋まっている单眼の巨人像^{サイクロプス}が門番のように鎮座している。これまで下つてきたどの階層にもこのような部屋などは二人は見かけておらず、明らかに異質だとわかるエリアだ。

すでに次の階層への階段は見つけてあるので別にスルーしてもよかつたのだが、ここまで異質だと「ここには何かありますよ」と明言しているものである。加えて、姿は変わつてもオタク気質は変わらないハジメの勘があると告げていた。これは無視する方が無理な話しだ。

しかし、それと同時に迷宮攻略の過程で得たスキル「気配感知」が扉の奥に対して警鐘を鳴らしていた。

これまでの迷宮攻略で様々な魔物と戦い、その肉を喰らいどんどん強化していく二人だが、それ込みでもヤバい何かがこの奥にいる。封印部屋と言つてもいいだろうか。

そのため、二人はこの扉の攻略を一旦先送りにし、階層のクリアリングをしていた。

そして、それを終えた二人は今ここに戻つて来ている。

「……気配感知はじゅんちよー……何も変わつてない」

「じゃあこの奥がヤバそうつてのは変わらないか。気のせいであつてほしかつたんだけど」

二人は慎重に扉に近づき、観察を行う。そうしてわかつたことが2つあつた。

1つは鍵穴がどこにも見当たらなかつたこと。さらに言えばドアノブなども見当たらず、ダメもとで押してみたが扉はピクリとも動かなかつた。

もう1つは、装飾だと思っていたそれは一部が魔法陣だということだつた。魔法陣の中央にはハジメの拳くらいの大きさの窪みがあつたが、周囲にはめ込めそうなものは何処にも見当たらない。

これらから察するに、この魔法陣は扉を封印しているものなのだろう。しかし、その式はハジメはおろか、彼より魔法を勉強していた風華でさえ見たことのないものだった。風華が言うには、式のほんの一部は勉強した魔法陣でも見たことがあり、そのおかげで気づけたと言う。

「となるとやっぱこの石像しかないけど……これはあれかな、お約束的な」

「……襲つてくるやつ、ドロップ」

「だよね。それならあのサイクロプスは倒すのが確定、と。この扉も鍊成じや開かなそうだし」

「……そもそも、それ鍊成で開くなら封印の意味、ない」

そんなやり取りをしながらハジメは地面に手を当て、風華は彼の背に手を当てる。

「あれが岩石で出来てればこれで終わるんだけどな。風華、お願ひいん……支援」

「鍊成！」

風華の支援を受けたハジメは鍊成魔法を発動させ、2体のサイクロプス像を直接鍊成しようとする。この戦法は過去にゴーレムタイプの魔物と戦ったときに有効だつたので、この二人にとつてゴーレムタイプの魔物はただの鍊成素材でしかない。そのため、今回もそれで済めばよしと思っていたが、流石は推定ボスエネミー、そこまで甘くはなかつた。

ハジメの手に返つてくる返事は失敗の手ごたえ。直後、二重の雄たけびがフロア中に響き渡る。

雄たけびの主である2体のサイクロプスは侵入者を迎撃するため、自分たちが埋まつている壁を碎きながらその身を表す……ことが出来なかつた。

「まあダメならダメで次の作戦にするだけだし」

「お前ら……一歩も……動くな」

サイクロプスに効果が無いと分かると、ハジメは即座に周囲の壁を鍊成し強固にし、2体のサイクロプスを壁に埋める。さらには、壁から出ている身体も埋めて、首から上だけが出ている状態にした。

首だけの巨人が必死にもがく姿はどこか滑稽に見える。一先ず、その様子から目とか口からビームとかは撃つてこないようだ。

「もういっちょ……支援」

「鍊成！……と風爪」

そして、二人は再び地面に支援鍊成を行い、サイクロプスの目に向けて数本の槍を突き出す。ハジメの思いつきで風爪を纏わせているため、貫通力抜群のそれは魔物の命を一瞬で奪い去った。

ボスクラスであろう魔物に完封勝利出来たことに二人は一息つく。苦労しながら勝利、というのはゲームだけで十分だ。

二人はサイクロプスを壁の中に埋めた状態で死体から拳大の魔石を取り出した。二人が見てきたものとしては最大サイズと言つてもいいそれは、予想通り扉の窪みに丁度はまる形だ。

「てか今更だけど、これ壁の方を鍊成して扉スルー出来なかつたかな……あ、ダメだやつぱ出来ない」

「……これ、相當上手い術者が組んでる」

「そつちが専門外の僕でも気になつてきたよ。つどごめん、さつさと先に進もう」

窪みに魔石をはめ込むと、魔石は一度大きく発光すると扉に彫られた魔法陣に魔力を流し出す。やがて、魔法陣全体に魔力が行き渡ると魔法陣は大きく輝いた。その光に二人は目を開けていられなかつた。

光が収まるとそこには、ほのかに発光する周囲の壁。扉自体に変化は見られないが、どうやら扉の開錠に成功したらしい。二人はグツと拳を突き合わせると神水を少し飲んで魔力を回復させてから、扉に手をかけ押し開ける。

部屋の中は真っ暗で光源となるのはハジメたちが開けた扉からの光しかない。暗視スキルがあつてもまだ暗く感じるが、無いよりかは遥かにマシだろう。

部屋の間取りはかなり大きく、内装は大理石の石造りで出来ており、部屋を支えるように何本もの柱が2列並んでいる。

そして、どことなく神聖さを感じさせるこの部屋に一目で違和感を感じさせる石の立方体。

「……あれかな？」

「……あれだと、思う」

ポツンと鎮座するその立方体の異質さに、扉の前からでも感じられた気配感知に警鐘を鳴らした主があの物体だろうと日星をつけた二人は慎重にそれに歩み寄る。

途中、扉からの光では限界が来たためそろそろ明かりをつけるかと風華が光源を作る魔法を唱える。そのときだつた。

「……ダ……レ？」

ひどくか細く、弱々しい声が聞こえた。

「つ！」

二人は咄嗟に後ろに飛んで立方体からの距離を離す。そして、風華は予定していたよりも多めの魔力を使用して大きめの光源でそれを照らす。

光に照らされた立方体は表面を黒く反射し、つるりとした質感を表す。

そして、その中央には鈍い金色に光る何かが埋まっていた。

光を反射しているそれは髪だった。とても長い金髪が垂れ下がり、何者かを覆っている。

「……ダれか、い……ノ？」

再びそれは声を出す。

間違いない、あの立方体に埋まっているのは

「人……なのか？」

人、それも12、3歳くらいの女の子だ。

ハジメの驚愕の声に少女はゆっくりと両目を開けた。その瞳はやや死んでいるが綺麗な紅で、彼女の髪色も相まって吸血鬼を連想させる。吸血鬼よりも吸血姫と呼ぶ方が相応しいだろうか。

また、顔立ちも随分とやつれてはいるがしつかりと美人であること

がうかがえる。

そして、彼女を観察していくハジメは一つ気づいたことがある。
彼の視界に入る色は金、紅、そして金髪の隙間から見える肌色の三
色だけである。

つまり、

（あれ、この子もしかして服とか何も着てないんじや……）

そこまで思つた時だつた。

「ふんっ!!」つという気合いの入つた声と共に彼の向う脛が思いつき
り蹴飛ばされた。

いくら魔物肉で身体が強化されても痛いものは痛い。思わず
うずくまる彼の顔に何かが被せられる。恐らくは彼が元々着ていた
服であり、現在は手持ちの布類とどうにか縫い合わせて外套へと変貌
を遂げたそれが、彼の視界を奪つている。

そして、そんなことが出来るのは一人しかいない。

「……にい、エロい目で見てた」

「いや見てない！見てないから！ちょっと見ちゃいけなさそうだなと
は思つたけれどぐほっ！」

ハジメの必死な弁明もむなしく、風華は全体重をもつて彼を圧し潰
す。

「ぐおおお…………めんつ風華ごめんて！」

「…………にい、あとでお・は・な・し」

あ、これはダメなパターンだ。義妹のささやきからそう悟つたハジ
メの脳内でチーンと鈴の音が響いた。

「…………?????」

そして、その光景を少女は困惑しながら見ていることしか出来な
かつた。

囚われの吸血姫

「……なに……し、てる?」

突如訪れた来訪者の男女二人組、その男の方が（精神的に）床に沈む様を見ながら埋められた少女は相方であろう風華と呼ばれた人物に問いかける。

その当人である風華は、まるで一仕事終えたとでも言うようにふう、と汗を腕で拭う仕草をしていた。汗など少しもかいてないのがまあ気分の問題なのだろう。

「お仕置き……にいがそういう目で見ていいのはふうだけ」

「?……ご主、人様とか、じゃ……ないの?」

「にいは、にい……ふうのにい、奴隸とかじや……ないよ?」

風華の答えに、少女の口から「え……」と困惑の声が零れる。事実、少女は風華のことを奴隸か何かだと勘違いしていた。

しかし、彼女がそう思つてしまつたのも無理はないだろう。

現在の風華の見た目は、乱雑に扱われたかのようなぼさぼさの髪に、ほぼ全身を被う火傷跡。極めつけは、身に纏つていたのは先ほどの折檻に使用された上半身を覆うのがやつとの外套のみで、その下には下着の類すらないという。少女の知識にある奴隸の方がまだ待遇はいいだろう。火傷跡だらけだが風華の顔立ちが良い方に分類されるのも少女の判断を後押ししていた。

ここがどういう場所なのかを多少は理解している彼女からすれば怪しい点はいくつかあるのだが……それでもと思つてしまふのが今 の風華だった。

「……今度は、こつちの番。お前は……誰?ここで何してる……?」

彼女の思考を知るよしもない風華は、己が言われたことを問い合わせる。ここでハジメもやつと少女に意識を向け始めた。

その問いかけに少女は俯き、黙り込んでしまった。くすんだ金髪に隠れて表情は見えないが、あまりいい顔をしていないのは確かだろう。

互いに無言の状態がどれだけ続いたらどうか。その間にハジメは

顔の外套を取り去つて風華に着せた。もちろん少女の方を見ないよう背を向けながら。

正直なところ、ハジメとしては「無理して答えなくてもいい」と言ってやりたい。しかし、この迷宮の奥で、仕掛けつきの扉にその扉の前には守護兵のような存在もいるという厳重な警戒態勢だ。どう考へても彼女には何かある。その何かが自分たちにとつて障害となりうるか、見極めなければならぬ。

まあ、この時点では彼女を無視してさっさと踵を返して出て行かない辺り、ハジメの答えは決まつていてるようなものだが。

やがて、少女はポツリ、ぽつりと少しづつ口を開いた。

「名前……アレーティア……ここにいる、理由……裏切られた」

「裏切られた？ どういうことだ？」

「……どつかの国の王族か貴族、だつた？」

アレーティアは小さくコクリと頷いて言葉を続ける。

「吸血鬼族の、王……それが、叔父様には邪魔、だつた……お前はもう、いらないって

「だつたら、何で生きてるんだ？ 邪魔だつたら生かしておく理由はないし、普通は殺されると思うんだけど」

「私は、先祖返りの吸血鬼……魔力さえあれば、首が飛んでも生き返れる。だから死なない、し…………死ねない」

「……だから、封印された？」

風華の言葉にまた頷く。

彼女の言葉が嘘という可能性は0ではないが、少なくとも不死身というところは本当だろう。その証拠に最初はかすれた声しか出ていなかつたアレーティアの声量はこの短時間で大分回復したように感じられる。

「……あと、魔法に詠唱、いらない」

その言葉には、ハジメも思わず振り向いてアレーティアの方を見やる。風華も声には出してないが、目を見開き驚いていた。

そんなもの、召喚されたクラスのチートスキル全てが霞む代物だ。詠唱がいらないということは相手より先に魔法を打てるということ

であり、詠唱から魔法の種類を悟られないこともない。勇者以上に最強の能力だろう。

二人の危険感知に警鐘を鳴らした正体がアレーティアだつたことに納得する理由だった。

「なん……だと。それじやあ逆にお前どうやつて封印され……あつ」

「そのときの敵、家臣……攻撃、しづらかつた？」

「……それもだけど、突然のこと、だつた……裏切り、結構混乱する」

「言葉の重みが違うなあ……」

その言葉にハジメは思わず脳裏で自分たちの境遇と比較していた。実際のところ、彼には自分たちがこの状況になつた原因の人物に心当たりがある……というか十中八九そいつが犯人だと確信している。しかし、それはハジメがそういった環境下で過ごしていきたから気づいているのであって、アレーティアの受けた裏切りはまさに寝耳に水だつたのだろう。

「まあ逆に言えばそれだけ信頼される王様だつたつことだろお前は。いいな、その国。一度でもいいから見てみたかつたよ」

「……ん、気になる」

そういう二人の様子にアレーティアは何か引っかかるものを感じた。

「……ねえ、外は今、どうなつてる？ 吸血鬼族はどうなつたの？」

静かに問いかけるその言葉に、今度は来訪者が黙る番だった。その様子から彼女は吸血鬼族の今を察した。

「魔人族とは戦争が続いてる。……そして、吸血鬼族は300年前に滅んだつて言われている」

「多分……アレーティアが、最後」

そう、とだけアレーティアは言つた。

300年、それは決して短くはない月日だが、それだけ経つても外は何も変わつてないどころか同胞は誰もいない。そう告げられた彼女の心境は、ハジメたちが思つてはいる以上に複雑だろう。

またしばらく経つてからアレーティアは礼を言つた。

「……ありがとう、教えてくれて」

「いや、ああは言つたけど僕たちも滅んだっていう確証は持つてない。だからさ」

ハジメは一つの提案を口に出す。

「ここから出て、生き残りを探してみてもいいんじやないか？」

「要約……出してやるから力、貸せ」

自分は今何度驚けばいいのだろう。彼女はそう思つた

確かにここから出たいという気持ちはある、というか最初の余興じみたやり取りのせいで言い出せるような雰囲気ではなかつたのもあるが、こちらから願いたいところだ。それがまさか彼らの方から出してやると言われると彼女は思つてもいなかつた。

「いい、の……？」

「いい加減その状態じゃ色々と辛いだろうし。それに、ここまで話してみてわかつた。お前……いや、君は信用出来る人だ。僕たちはこの迷宮から出るために先に進まなければならぬ。そのための戦力は多い方がいいだろう？」

「……300年前の魔法、氣になる」

「まあそういう情報も欲しいしね。さて、どうする？」

「どうするだと? そんなもの、答えは一つに決まつていてる。

「……お願い……ここから、出して……！」

「うん、任せて」

「……まあ、拒否つても……無理やり出してた」

アレー・ティアの願いを聞いたハジメは、義妹の容赦の無さに苦笑しながら（まあ彼も同じ考えなのだが）立方体に右手をつける。手のひらから伝わる感触に少し違和感を感じるのは封印の魔法がかかっているせいだろうか。

「これは結構苦労しそうだな……風華、全力でお願い」

「ん、わかつた」

ハジメの指示に従い、風華は彼の背中に両手をつける。その行動に何をする気なのかとアレー・ティアはじつと見つめていた。

「支援、最大」

「鍊成!」

そして、ハジメの鍊成による解放作戦が始まった。立方体からの抵抗は彼が想定していた数倍強かつた。

だが、それも支援魔法を受けた鍊成師の敵ではない。

（思つたより抵抗が強い、けど、風華の支援と精密鍊成と魔力の量で

！）

「押し通す！」

絶えず行使される暴力的な鍊成に立方体は抵抗もむなしくドロドロと融解していき、やがてそこには、ペタリと座り込む少女と、彼女を封印していた何かがあつた。

ふう、と一息ついたハジメは座り込んで神水をゴクリと飲んだ。

ところで、一つ問題がある。

「……何か、着るもの……ない？」

それはアレーティアの今の姿である。

今彼女は、ハジメの予想通り一糸纏わぬ姿であり、彼女のキレイな傷一つ無い白い肌と身長にしてはあるものが丸見えなのである。

それに加えて、少々傷んでくすんだ色の長い金髪と、対照的に妖艶に輝く紅い瞳はこれはこれでいい味を出している。

大人の階段を1つだけ登つただけの思春期野郎には劇物レベルの刺激だつた。

「……ねえ？あなた？」

「あひやい！」

ハジメがボーッと見惚れていると、気づけば彼の目の前にまでアレーティアは迫つていた。まだ手足の感覚が戻らないのか四つん這いで来たため、垂れ下がつた金髪の隙間からもつと見えてはいけない

色が見え隠れしている。

その姿にハジメは慌てて目を隠そうとし、背中から首に回された手に今度は別の意味で身体を硬直させた。

「……にい？これ以上浮気は……ダメよ？」

「いや、風華さん、これは違うんです。今後をどうしようか必死に考えていただけでやましいことなんて何もつ」

「?!サブカル的ドストライクのくせに」

「?!？」

「!何故バレている!?とハジメは目を白黒させる。その様子が面白く見えたのか、アレーティアはクスクスと笑っていた。

そして、吸血鬼の女王はゆつたりとした仕草でからかうようにハジメの胸板に指を滑らせる。

「……吸血鬼族の国、あなたと作るのも……いいかも、ね」

「へあつ!？」

「……先に、することが、出来た……！」

その仕草にハジメは混乱をさらに加速させ、風華の殺意のボルテージがぐんぐんと昇りあがる。

直後、上から降ってきた何かをハジメはアレーティアを引き寄せて飛び退くことで回避した。

最後の門番と女王

「あつぶねえなあ！」

上からの急襲を間一髪で回避したハジメは声を荒げる。それに対し、新たな乱入者は彼にただ敵意を向けて応答した。

乱入者の姿を一言で表すならば巨大サソリだろうか。4本腕や8本の足、尾が2本あるなど、相変わらず地球の生物とどこかずれているトータスクオリティだが、サソリ以外に見えるかと言われたらノーノーと答えるだろう。もつとも、雄たけびを上げるサソリなど信じたくもないが。

「おいおいこんなやつまでいるのかよ……アレーティアさんや、あれに見覚えとかある？」

「いや……私、封印されてからここにいる……から、わからない」

それを聞いた彼は「わかった」とだけ答えると、巨大サソリを素早く観察し始める。情報がないならこれまで通り、戦いながら手探りで攻略するしかない。

「……にい、扉閉まつた。逃げれない」

そして、背中から風華の撤退は許されないとお達し。どうやら、アレーティアを封印した「おじ様」とやらは本気で彼女を逃がしたくないらしい。

「先ず散開、多分アレーティアに近いやつを優先して狙うだろうから、僕がおとりをやる。風華は魔法を色々撃つて効果ありそうなのを見つけて」

ハジメが風華にそこまで言えたところで、巨大サソリが尾から紫色の何かをこちらへ飛ばし、彼らの作戦会議を強制的に終わらせた。ハジメはアレーティアを抱きしめたまま右へ飛び退き、風華はその反対へと飛ぶ。

回避した跡を見てみれば、先ほどまでいたところにじゅわじゅわと嫌な音を立てる液体が付着していた。どうやら、毒液のようなものを飛ばしてきたようだ。

「そこまでサソリに似てるなら見た目もそのまんましてくれよなつ

！」

そう悪態をつく彼へ、巨大サソリは毒液を連射する。何発も飛んでもくるそれを、ハジメは空力を使用して僅かな隙を縫つて回避する。これまでの階層攻略で、何度か風華を抱いたり背負つたりして移動していたためか、その動きに無駄はない。

「くう……！」

しかし、かなりアクロバティックな動きをしているため発生するGのせいでアレーティアは苦し気に呻く。先ほどまで封印されて衰弱していた彼女にはかなり負担が大きかった。全力で抱き着きしがみつくが、手足から徐々に力が抜けていく。彼女を落とすまいと、ハジメは彼女を抱く右腕に一層力を込める。

「あ……」

「ごめん、もう少しだけ耐えて！」

一方で、風華は自身のステータスにものを言わせて巨大サソリから距離を取つて背後に回り込む。魔法職タイプの彼女の敏捷はハジメよりは劣るのだが、魔物肉の影響で強くなつてたためトータスの一般人から見ても異常と言われる数値を出していた。

彼女は巨大サソリへ初級魔法を属性をばらけさせて放つ。初級といつても使用した魔力量のせいで中級魔法と言われてもいいくらいのそれは対象に全弾命中する。

風属性、効果無し。

土属性、効果無し。

水属性、効果無し。

雷属性、効果無し。……だが違和感あり。

そして炎属性……効果あり。

「……？」

雷属性の時に違和感を感じたことに風華はそれが何かを考えようとしたが、攻撃に反応した巨大サソリの2本目の尾が彼女の方を向いたため、考えることを中断せざるを得なくなつた。

巨大サソリの意識が風華へ向く。その隙を逃すハジメではない。

「目をつむれ！」

ハジメはズボンのポケットから魔光石を取り出し、魔力を込めて投げつけた。過剰な魔力投与によつて即席の閃光玉となつたそれは、巨大サソリの目の前で爆発し、部屋全体を一瞬だけ明るくする。

突然の強い光にひるんだのか、2本目の尾から何かを放とうとした巨大サソリは悲鳴を上げてのけぞる。尾から何かが暴発し、あらぬ方向へと無数の針が突き刺さる。

自分へと飛んでくるはずだつたものを横目に、風華は巨大サソリが視界を奪われている間にハジメの元へ向かい合流する。途中で顔に向けて炎属性の魔法をぶつけて顔面を焼いておくのも忘れない。これでしばらくはこちらを認識出来ないだろう。

ハジメは、地面を鍊成して作つた即席の半球状のドームに身を隠していた。

ドームの壁に背をつけ、神水を飲んでいたハジメは、半分飲んだそれを風華へとパスする。彼女もそれを飲み干した。

「にい、ありがと」

「いいよ、魔法どうだつた?」

「炎、効いた……あと、雷が、変」

「変? どういうこと?」

彼女の言葉にハジメは怪訝な声を上げる。

「うん……地面に、流れてる、感じ」

「地面に流れる……つて、まさかあれ外殻って金属? 甲冑みたいな感じな

のか?」

「そこまで、わからない……でも、一つだけ言える」

「ああ、そうだね……」

「鍊成が効く」

相手に直接鍊成が効くとなると、この兄妹に敵はない。あとはどうやつて鍊成を叩き込むかだが、それについてもハジメは一つ策を思いついた。それには協力者が必要だ。

「とりあえず風華の支援は必須として……アレーティア」

ドシン、ドシンと巨大サソリが暴れる音を聞きながら、そろそろ動かなければ不味いと判断したハジメは、策への協力を得るために自身

に抱き着いたままのアレーティアへと声をかける。しかし、彼女からの返答はなかつた。

「……アレーティア？」

返答がないことを不審に思い、彼は身体を軽く揺らし、密着しているアレーティアをちょっとだけ剥がす。彼女の頬は赤く染まり、息は少し上がっているのか「ハア……ハア……」と小さい声が聞き取れる。

「あの、アレーティアさん？」

「あなた、名前は……？」

三度呼びかけるハジメの声に被せるように、アレーティアは彼の名を問う。何故今?と思ひながらも彼は反射的に自分の名前を答える。

「ハジ、メ……ハジメ……ごめんな、さい」

「え、ちょ!？」

「もう、限界……！」

急な謝罪に戸惑うハジメ。そんな彼を無視して、アレーティアは彼の首筋に顔を埋め、

ガブツと牙を突き立てた。

「ぐあつ……!?」

「にい!？」

突然の痛みと身体の中から何かが抜けていく感触にハジメは思わず悲鳴を上げる。痛みには慣れてきた自信はあるが、血を吸われるというのは初めての体験だ。

しかし、痛いのは最初だけだった。血が抜けていく感じはするが、噛まれた首筋を中心どこか心地よいものを感じる不思議な感覚だ。

「あ……ああ……」

「風華、僕は大丈夫だから……」

「にいの、血……まだ、飲んだ、こと、ないの……に……！」

うん義妹よ、落ち着いたら後でゆっくり、本当ゆっくりと話し合おうか。

どこかずれたところで身体を震わせる義妹を見て、逆に精神が安定したハジメは脱力感を感じた。

吸血を開始して10秒くらいが経つてからアレーティアは首筋か

ら口を離した。その顔は恍惚の表情を浮かべており、どこか満足しているように感じた。

「ゞちそう、さま……でした」

「う、うん……アレーティア、今のは……」

「魔法、撃てる」

突然の吸血の理由を聞こうとしたが、アレーティアの一言で頭のスイツチが切り替わる。

少し想定外のことが起きたが、彼の必要なピースはそろつた。

「よし、僕と風華での巨大サソリを攻撃するから、アレーティアは指示したときに魔法で攻撃して」

「ん、了解」

彼女の了承を得たところで、巨大サソリの暴れる音が消え、かわりに咆哮が響き渡る。どうやらこちらの位置を把握したらしい。

音を立てて突進した巨大サソリは4本腕の鉄をドームへと叩きつける。それに対し、ハジメは風華との支援鍊成で極限までドームを硬くした。それでもそう長くは持たないだろう。

しかし、それだけ時間があれば十分である。ハジメはポケットからかつて階層主だった熊相手にも使用した金属棒を取り出した。

あれから迷宮攻略の合間に良質な鉱石から、さらに良質なものを厳選して混ぜ込み、アップデートした結果、より長く、より太くなつたそれを地面へと突き立てる。

「支援」

「鍊成！」

そして金属棒に対し、兄妹は支援鍊成を行う。すると金属棒は徐々に細くなつていき、先端は巨大サソリへ向かって地面を掘り進む。

ドームが猛攻を防いでくれている代わりに目で場所はわからないが、地面を伝わる振動が彼に敵の居場所を知らせる。

やがて金属棒は地面から巨大サソリの脚に目がけて勢いよく突き出される。しかし、金属棒は巨大サソリの外殻を貫通せずに深く突き刺さるだけで内部にまでは到達しない。

だが、それでいい。貫通しようがしまいが今回の作戦には関係ない。

「自分の鎧に刺される気分はどうだい？」

ハジメはそう不敵に笑うと、金属棒越しに外殻 자체を鍊成する。自分と風華の見立てが合っていれば、鍊成は可能なはずだ。

そして、その目論見は巨大サソリの悲鳴が響いたことで、彼らに成功したことを知らせた。

手足の外殻は内部を突き刺すアイアンメイデンへと様変わりし、顔や背中といった胴体を覆う外殻の一部は強制的に外される。たまらず巨大サソリの攻撃を止める。決めるなら今しかない。

「アレー・ティア！」

ハジメが吸血姫の名前を呼ぶと、彼女はドームの上に飛び上がり、片手を掲げる。彼女の身体から黄金色の魔力光が漏れ出すのが見える。

「蒼天」

その言葉と共に巨大な青白い光が頭上に現れ、強烈な熱波が女王以外に降り注ぐ。その熱にハジメは工房の温度を思い出したが、この熱量はそれ以上だ。

そして、光が巨大サソリへと落とされる。その破滅の光は敵対者に悲鳴すら許さず焼き尽くした。

「……ん、終わつた」

魔法の発動から数十秒後、ようやく光が収まつた。それから少しして、アレー・ティアはドームの二人へ飛び降りて告げる。

ハジメがドームを解除すると、まだ所々燃え残つているのかほのかに光る外殻と、それに照らされる炭化して真っ黒なサソリだったものが兄妹の視界に飛び込んだ。

「最上級魔法、久しぶりに使つた」

あまりの光景に言葉が出ない二人に、女王は気分良さげに笑うのだった。